

第三章 遺 跡

1 遺跡の形成

平城宮朱雀門内の北方には、奈良時代の遺構とかがえられる建物跡の土壇や築地痕跡に比定できる土塁状の地物があり、それにしたがって水田の地割りにも規則性がみられた。朱雀門の北250mのところからはじまる東西210m、南北280mの地域、その北側に接する東西180m、南北100mの地域、またその北に接する方180mの3地域に大別することが可能であった。これらの地域が方約1,000mの平城宮の中軸線上の好地を占めていることから、当調査部では南から第1次朝堂院・第1次大極殿・第1次内裏に想定し、聖武朝の平城遷都以前の中心的な宮殿跡に推定してきた。今回報告する地域はそれらのうち、北方の大極殿・内裏想定地域に相当し、そのほぼ東半分とこれに接する東側の幅約40mの地域である。

調査前の推定

発掘調査の結果、この地域は周囲を築地回廊でかこみ、全体の約2/3にあたる南方地域を建物のない広場とし、北辺の約1/3地域に建物が林立する状況があらかになった。また、検出遺

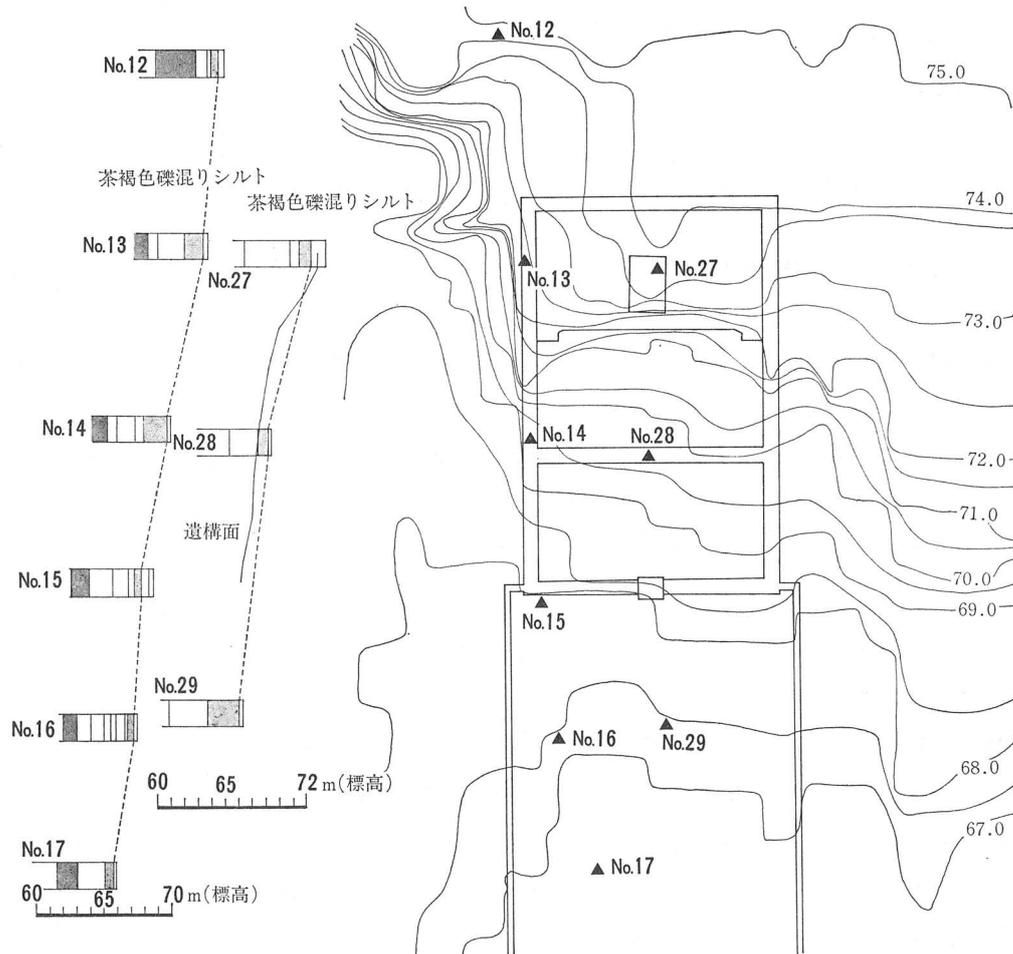


fig. 11 現状地形とボーリング調査

第三章 遺 跡

構は大きくわけて奈良時代前半の第Ⅰ期、後半の第Ⅱ期、平安時代の第Ⅲ期に大別でき、各時期ごとに個性豊かな建物配置をとっている。それらのほか、平城宮造営以前の遺構もあった。ここでは1：門と回廊域、2：殿舎地区(6ABP区)、3：広場地区(6ABQ, 6ABR区)、4：東外郭地区(6ABC, 6ABD, 6ABE区)、5：大膳職地域(6ABO区)にわけて、それぞれの遺構を第Ⅰ～第Ⅲ期にわけてのべることにした。なお、地域の呼称については従来からよびわけている第1次朝堂院・第2次朝堂院、第1次大極殿・第2次大極殿はそのまものこし、第2次内裏は単に内裏とよぶことにした。

調査地の区分

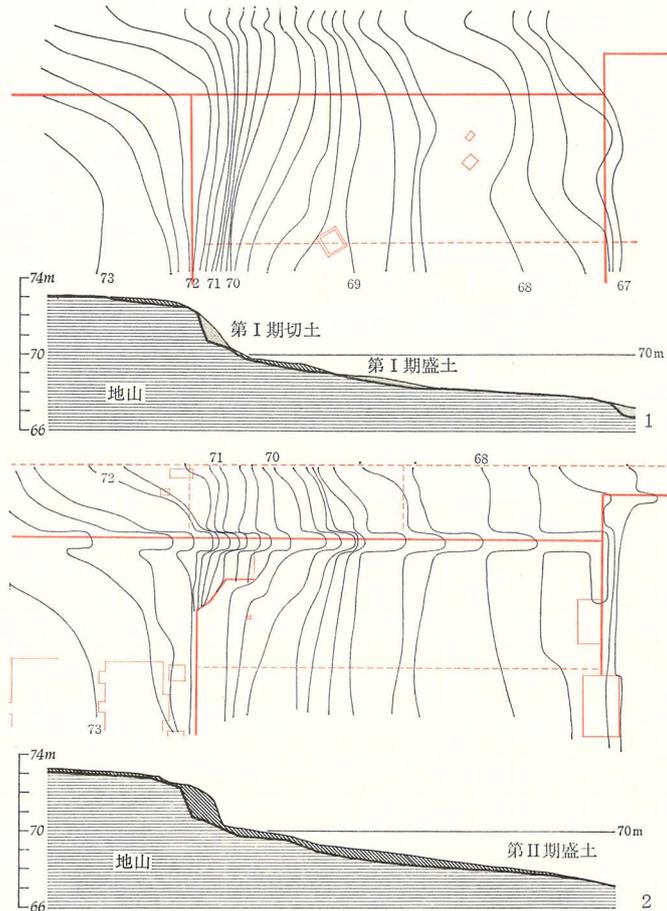


fig. 12 第1次大極殿地域の地形変遷(1)
1. 造営以前, 2. 第Ⅰ期

A 発掘前の地形 (PLAN. 1・2, PL. 1)

調査地は平城・佐保丘陵などの東西に連なる小丘陵の南麓に位置し、北から張り出す標高68～74mの台地を呈している。西側は北西方の御前池・佐紀池につながる谷筋で画され、東側は内裏・第2次大極殿地域との間によこたわる浅い谷筋によって画されている。北部の1/3地域(殿舎地区)は、もっとも高く南方地域と2mほどの比高差があり、西側の低地より約4m高い状況を呈している。また微地形として、殿舎地区と広場地区が接する東西端の部分は南にのびる土塁状の高まりとなり従来から築地痕跡に比定されてきた。そして、土塁痕跡をはさんで内と外へ斜めに下がる地割りがみとめられた。広場と回廊の地域では、東南から西南方向に傾斜している。そして南の朝堂院地域との間に約50cm内外の落差がある。灌用水の水路は、殿舎地区の南辺を東西にぬけ、この地域の中軸線上を南下する水路と東外郭地区の東辺を南下する水路とに分流している。

調査地域の土質調査は、発掘調査時の所見と1961・1962年のボーリング調査結果¹⁾によってあきらかである。すなわち、砂礫・砂・シルト・粘土が厚く堆積している大阪層群相当の層が下部にあり、丘陵部では上部を不整合な新期洪積層の礫層が覆い、丘陵の南麓からは沖積層が層厚1～2mで南へいくほど厚く堆積している。遺跡は北部では洪積層の礫層上、南部では沖積層上に形成されていることになる(fig. 11)。

1) 『平城宮整備報告』1979, p. 3

B 古代の地形

以下で各時期の地形を復原するわけであるが、それはつぎのような手順で行なった。発掘地域の土層図によって、地山(平城宮造営前の地形)と各時期における整地層の厚さを基礎資料とし、ボーリングによる土質調査を参考にした。各時期における整地層の厚さは fig. 12・13の断面図でもわかるように後世の削平が著しいため、旧地形を把握しえない部分も多い。そこで現況の地形図を基本にして、各時期の溝底面の高さ(原則として北から南へ、西から東へと地形に準じて流れる。上部の遺構が削平されていても、溝底勾配によって等高線間隔を調整できる)で修正を加えながら等高線を変更し、等高線間隔 25cm で各時期の地形図を作成した。

旧地形の復原

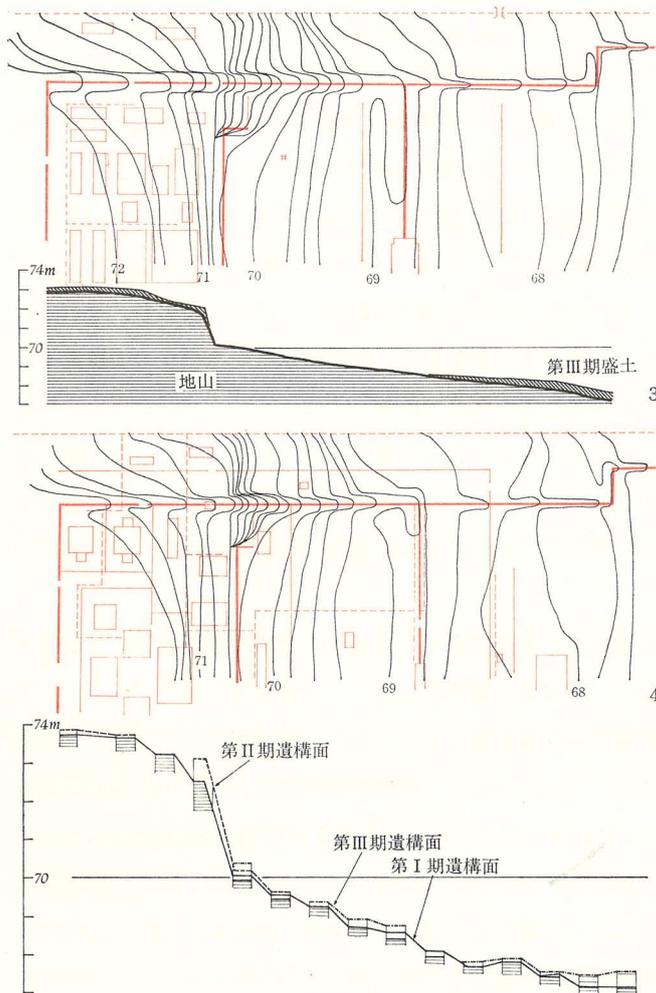


fig. 13 第1次大極殿地域の地形変遷(2)
3. 第II期, 4. 第III期

平城宮造営以前 (fig. 12-1) 殿舎地区と広場地区との間(ボーリング No. 13—No. 14, 27—28, fig. 11参照)で、遺構面および下部の土層が他の調査地点にくらべて急傾斜になっている。すなわち、造営以前にも、現況の地形に似た形で北からのびる台地の張出しがあり、殿舎地区の南辺付近に段差があったことが想定できる。造営前の地形図作成にあたっては、遺構面から旧地山面の標高を抽出し、造営時に埋めたであろう下ツ道東側溝SD7787の溝底の高さで修正して、標高点を等高線に置きかえた。その結果、地形全体としては現況地形と類似することになった。

台地と低地

造営以前の地質は、殿舎地区では赤褐色粘質土であり、広場地区北半では礫まじりの黄褐色粘土を主にする。広場地区の南半では、黒色粘土が堆積する浅い流れをとまなう小さな谷筋があり、そこに造営にとまなう木材の削り屑などが堆積している。

第I期 (fig. 12-2) 第I期の遺構検出面は、殿舎地区においては赤褐色粘土・褐色礫面であり、広場地区北半(6ABQ区)では整地層の黄褐色礫面、広場地区南半(6ABR区)では暗灰色粘土・灰色礫層の整地層である。これら整地層の標高を抽出し、後の整地層削平状況を東面築地回廊西雨落溝(SD3790)と中央南北参道東側溝(SD7142, 勾配1/70)の溝底高によって修正し、等高線図をおこした。

溝の勾配

造営前の地形では殿舎地区と南面築地回廊(SC5600)との比高差 5.5m, 勾配1/45であり、平城宮中央部南北地形の勾配1/80にくらべるとかなり急であった。この段差を利用して、殿舎地

第三章 遺 跡

塙積擁壁 区の南縁に塙積擁壁 SX6600 を設けて上下二段の土地を造成している。擁壁の構築にあたっては、中央部で約100m幅の切土を行ない、東面築地回廊付近では旧地形をのこして斜道 SF9232A としている。塙積擁壁の高さについては、 検出した擁壁高と東面築地回廊雨落溝 SD3790の底差によって2.2m前後(標高72.8m)に復原できる。SD3790の溝底勾配をみると、殿舎地区での比高は1/60~1/70の勾配であり、斜道 SF9232の部分(長29m)では1/30の急勾配となり、SF9232の裾から約40m南までは1/35となお急勾配をとり、それ以南では1/60~1/70の勾配を呈している。こうした溝の勾配によれば、擁壁の高さ2.2mはSF9232Aで1mの段差を、それ以南40mで1mの段差を処理していることがわかる。すなわち、広場は水平面をなすのではなく、北東方から南西方に向ってゆるやかに傾斜していたのである。

殿舎地区と広場地区との整地は、旧地表に合せて若干の盛土と切土を行ない、平坦に整えたのち一面に礫(厚さ20cm前後、下層礫敷面)を敷きつめている。広場地区の南半では浅い谷筋を黒色粘土を主にして厚さ0.15~1mで埋立てて平坦な土地を造成し、上記の礫をしきつめている(下層礫敷面)。

第Ⅱ・第Ⅲ期 (fig. 13) 第Ⅱ期の遺構は、殿舎地区では黄褐色礫敷面、広場地区では暗灰・黄褐色礫敷面(上層礫敷面)で検出した。第Ⅲ期の遺構検出面も大体第Ⅱ期と同じであるが、広場地区では茶褐色礫混りの整地面が覆うところがあった。つまり、第Ⅲ期には大規模な地形変更は行われず、第Ⅱ期の地形に準じているとみてよい。整地面の標高を、第Ⅱ・第Ⅲ期の溝底の比高で調整して地形図をつくった。第Ⅱ期におけるもっとも大きな整地は塙積擁壁SX6600をやめて前方15mにわたって盛土し、石積擁壁SX9230を積みあげたことであり、それが第Ⅲ期まで存続する。新しい擁壁の高さは、残存する最下段の玉石と殿舎地区礫敷面(上層)との比高、および殿舎地区から下の広場に流れておちる第Ⅲ期の3本の南北溝(SD8301, SD6659, SD6612)によってきめた。その結果、擁壁の高さは1.6m前後と第Ⅰ期にくらべて若干低くなったようである。3本の南北溝はいずれも第Ⅰ期のSX6600を過ぎる位置から1/30の急勾配となる。それは第Ⅰ期の斜道SF9232Aの勾配と等しく、SX9230の構築に際して、SF9232Aの勾配を基準にしたのではないかとおもわれる。この時期の斜道SF9232Bは段差が低くなったこともあり、SX9230から50m南の間で西南へ向ってゆるやかに下り、1.6mの段差を解消したようである。

殿舎地区の整地は第Ⅰ期に準じて礫を敷きつめる。しかし、第Ⅱ期・第Ⅲ期の区別はほとんどつかない。広場地区では第Ⅰ期の礫敷面の上に平均30cmの厚さで第Ⅱ期の礫を敷く。とくに南半のSC5500の北側では厚く敷いている。広場地区では第Ⅲ期の礫敷整地面を識別できるところがあり、やはり礫を敷きたしたようである。とくに広場南半の中心建物SB7803付近では礫敷が厚く、30cmの厚さをもつ。

整地と土量 第1次大極殿地域は、元来北から南へ張り出す台地の急勾配1/45の地形を中心にとりいれている。この急勾配を利用して、敷地を二段にわけその境に第Ⅰ期では塙積擁壁をつくったのである。つまり壇上に立てば下方を見下すことになり、壇下に立てば上方を仰視することになる。そして、旧地形は壇の上下をつなぐ斜道と東面築地回廊の基壇にのこされたことになる。第Ⅱ・第Ⅲ期では斜道の勾配で擁壁を前方に15m移動し、石積擁壁を新設した。その造成工事は台地上の建物基壇の削平などによって容易に行なわれたであろう。

また各時期を通じて、第Ⅰ期の正殿(SB7200)、第Ⅱ期の主殿(SB6610, SB6611)、門(SB7801、

2 遺 構

SB7750), 主要建物 (SB7803) などの構築される部分は, 基壇を積みあげて建築したものである。それらについては全体の南への緩傾斜のなかで, とくに平坦に整地が行なわれるように留意して地形造成がなされていることが各期の断面図からわかる。

各時期に要した地形造成のための土工量は, 地形図の中軸線・東面築地回廊・南北溝SD 土 工 量 3715南北方向平均断面によって求めた (fig. 13)。これによると, 全体の土工量はそれほど多くなく, 大極殿地域の 2/3 が広場であることをかんがえると, 旧地形を最大限に利用した造成であったことがうかがえる。第 I 期では, 擁壁をつくるために旧地形を切土する切土量が多く, 第 II 期・第 III 期では擁壁を前へのばすため盛土量が多くなる。各時期の土工量をくらべると, 第 II 期が第 I 期の約 1.6 倍の土量を要し, それに準じて人夫数も増加しており, 第 II 期の造成がきわめて大規模であったことがうかがえる。積算に用いた土工歩掛りは現行のものであり, 使用工具が原始的であった奈良時代ではもう少し人員を要するものとおもわれる。また, 積算した数値は第 1 次大極殿東半部分についてであるから, 全域としては, 第 I 期: 10,000m³, 2,200人, 第 II 期: 15,000m³, 3,400人, 第 III 期: 7,600m³, 1,600人程度の土工量になる。

なお, 第 I 期の 塼積擁壁については, 10m あたり 32個×29段=928個 の 塼 (長さ29.3cm, 幅 塼 積 7.5cm) を積むことになり, これに東西築地回廊間の距離 170m を乗ずると 15,776個の 塼を使用したことになる。

| | (盛土) (0.2人/m ³) | (切土)(0.3人/m ³) | 計 |
|---------|-----------------------------|----------------------------|------------------------------|
| 第 I 期 | 2,630m ³ (526人) | 1,900m ³ (570人) | 4,530m ³ (1,096人) |
| 第 II 期 | 7,110 (1,422) | 270 (81) | 7,380 (1,692) |
| 第 III 期 | 3,450 (690) | 350 (150) | 3,800 (795) |
| 計 | 13,190 (2,638) | 2,520 (756) | 15,710 (3,394) |

Tab. 2 第 1 次大極殿地域東半部推定工量

2 遺 構

第 1 次大極殿地域で検出した主な遺構は, 築地回廊 6, 築地 6, 擁壁 2, 建物89, 足場19, 溝83, 井戸 2, 土壇18以上などである。遺構の大多数は平城宮方位 (内裏北面築地回廊SC60の北雨落溝の方位を基準としたもので, 国土方眼方位に対して N0°07'47''W 振れている) に近い方位をとる。以下の報告において, N.S.W でしめす数値は, 第 2 次大極殿基壇上の基準点 No.7 (国土方眼座 測量基準 標第VI座標系で, X=-145412.55, Y=-18322.19の値) を基点 (0, 0) にした平城宮方位での値である。たとえば, N100とは No.7 から北へ100m, W200とは No.7 から西へ200mという意味である。建物でもっとも多いのは掘立柱式の建物であり, 以下の記述ではとくにことわらないかぎり単に建物という。また柱穴・柱掘形などの用語については『平城宮報告VII』にしたがうが, 個々の柱穴の呼称については建築修理の方法にしたがい, 桁行柱を漢数字とし梁間柱を片仮名であらわす。そして, 東と南から数えはじめることとする。たとえば, 東西棟 5 間× 2 間の建物のときにロー柱穴といえば東妻柱をさし, ロ六柱穴といえば西妻柱をさすことになる。基壇の「掘込み地業」などの用語については, 『平城宮報告IX』にしたがう¹⁾。

1) 模式図の記号 ●柱根をとどめる掘形 ○柱痕跡をとどめる掘形 ○掘立柱掘形
■礎石 □礎石抜取痕跡 …推定 ▲は北をしめす

A 門・築地回廊地区

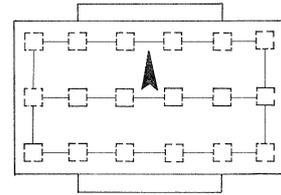
6ABR・6ABQ・6ABP・6ABO区にかけて、築地回廊が当初には南北に長い長方形に構築して第1次大極殿地域をとりかこんでいるが、後には方形に縮少している。第Ⅰ～第Ⅲ期のあいだに幾度かの改変がある。

i 第Ⅰ期の遺構

SB7801 (PLAN 12, PL. 3~6, fig. 14・15) 6ABR-H・J 地区

南 門 第1次大極殿地域の南門であり、中軸線上(W266.6)に位置する。

基壇の立ち上り部は削平されて、柱位置をしめす礎石据付痕跡などはうしなわれている。また、基壇の南辺は後世の耕作のため深く削りとられ、残存する遺構は基壇の掘込み地業、基壇の北縁をめぐる礫敷の雨落溝と地覆石抜取痕跡、北面階段の痕跡などである。



掘込み地業 南門付近では、地山(黒灰色粘質土、標高67.4m)のうえに黄褐色粘質土(厚さ20~30cm)をしきつめてまず整地し、後に基壇の掘込み地業を行なう。東西31.2m、南北17.45m、深さ50~60cm程度の長方形坑を掘り、四周と中軸線の東西へ5.7mにおいてそれぞれ1条の盲暗渠(SD7809, SD7810, SD7812)をもうける。東辺(SD7812)と内寄りの2条(SD7809, SD7810)は、幅50cm内外で少し掘下げ礫をつめて南へ排水するが、北辺と西辺ではとくに溝を掘込まず礫を带状にあつめておいているにすぎない。掘込み地業の南北心にあたる東西縁に径10cmの杭がある。東端では打込んだ状態で検出したが、西端では遊離してたおれていた。築地回廊および門の地割設定にかかわる基準杭であろう(fig. 14)。

版 築 版築ははじめ一層10~30cmの厚さで、約40cm位まで搗き固める。礫混り粘質土、砂混り粘質土などの色調をこととする土を2・3層にわけて搗く。それより上部は色調のことなる粘質土を厚さ2~5cmぐらいで、幾層にもわけて搗く。ただし、全面に一樣ではなく場所によって層序がことなっているので、部分的に搗き固めていったことがうかがえる。長方形坑の上端まで版築すると、礫混り粘質土を厚さ10cmで積むが、この層は東西の築地回廊基壇の盛土と重りあっている。そして、さらに上へ積む暗褐色礫混り土は築地回廊に連続しており、門と築地回廊の地業が平行してなされたことがわかる。のこりのよいところでは深さ90cmの版築地業をとどめ、上面は平坦に削平されて第Ⅱ・第Ⅲ期の礫敷面がおおっている。

基壇縁 基壇の北面では地覆石抜取痕跡、雨落溝、階段痕跡などがあり、それらは第Ⅰ期内での3回にわたる改修が層位的にみとめられた。上層の遺構としては、東北と西北隅の基壇縁にそって、L字形(南へ2m、中軸線に向って6.7m)にめぐる幅60cm、深さ20cmの浅い溝SD7852Bがあり、それは基壇盛土を削りこむように掘り、随所に凝灰岩の粉末をまじえる。基壇の地覆石抜取りの痕跡である。その外縁に60cmをへだてて、やはりL字形にめぐる小玉石列がある。それは玉石を一列に立てならべたもので、内側を密な礫敷とし外側を粗い礫敷とする。小玉石は一種の見切りであり、内側が雨落溝SD7833とかんがえられる。中央寄りの端は、同様に小玉石を両側にならべる南北溝SD7805, SD7806につながって北流し、東西溝SD5590に注いでいる。北面中央部に長さ14.2m、北へ1.2m張出す形で大型の凝灰岩片が堆積しており、そ

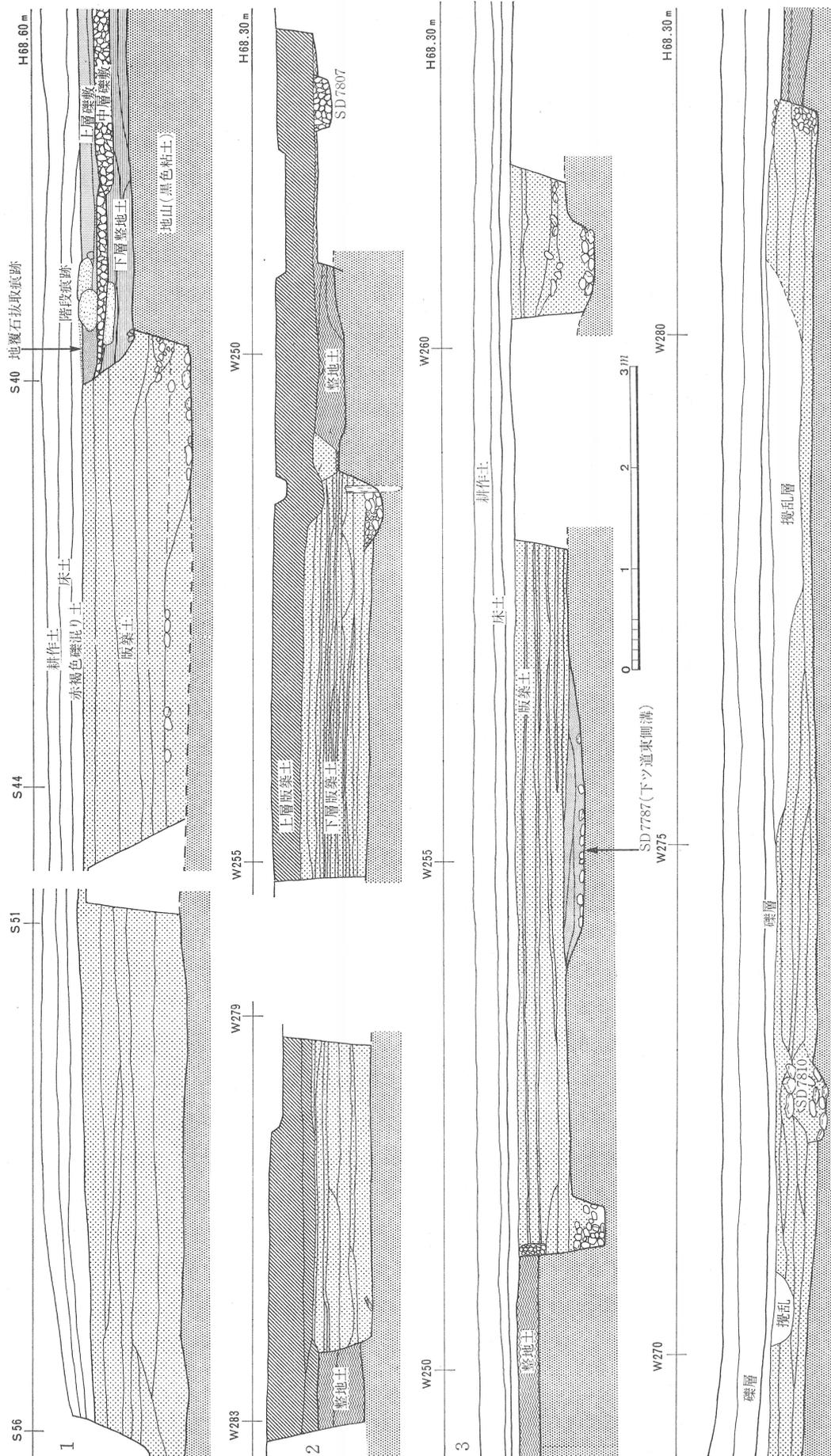


fig. 14 SB7801基礎の断面 1. W266ライン南北断面 2. S48ライン東西断面 3. S57ライン東西断面

第三章 遺 跡

の外側は小粒の礫敷となる。北面階段の痕跡である。この凝灰岩の検出状況からは、裏込め用のものなのか、あるいは解体時の廃棄物なのか、いずれとも決めがたい(fig. 15)。

礫敷 中層の遺構は部分的にしか検出していない。上層の階段と同じ位置に凝灰岩の堆積層があり、それは上層よりも70cmほど北へのびている。両隅の地覆石抜取痕跡 SD7852Aも同位置にある。この時期にはとくに雨落溝はもうけず、大粒の礫敷が地覆石抜取痕跡の北側に展開する。下層の階段位置もほぼ中層と同じで、凝灰岩片をまじえる暗灰色砂質土として痕跡をとどめる。この階段部ではとくに黄褐色砂混り土を敷く地業を行ない、その外方4mまでに灰白色粘質砂土をしきつめてから、礫敷きを行なったようである。

上層の遺構をおおって、とくに北側では瓦片の堆積が著しく、第Ⅱ・第Ⅲ期の赤褐色礫混り土が基壇上面に堆積しており、第Ⅱ期には基壇が削りとられていたことをしめている。

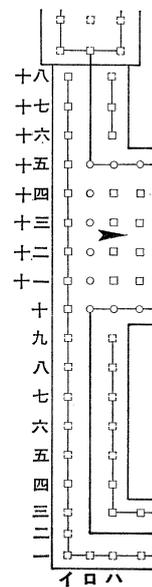
復原 このような遺構から推定される基壇の規模は、上層で復原すると東西約28m(94尺)、南北約16.2m(55尺)、階段の幅15m(48~50尺)、同出1.8m(6尺)となる。柱間寸法を桁行5間(81尺・23.8m)、梁間2間(40尺・11.8m)に想定すことができ、この場合の柱間寸法は桁行両端間が15尺、内の3間が17尺等間となる。

SC5600 (PLAN 2・5・11・12, PL. 3・7~10・14, fig. 16~18)
6ABR-H・Q, 6ABR-Q, 6ABS-E地区

南面築地回廊 第1次大極殿地域の南面を画する築地回廊東半分である。ただし、東寄りの22mについては未掘である。全域に基壇の掘込み地業を行なう。掘込み地業は整地土から幅11m内外、深さ40~30cmの布掘りであるが、自然地形の傾斜に影響されたりしく、南側のほうが少し深い。W246ラインの基壇断面では、底に礫を混える厚目の土層を1・2層おき、そのうえに色調をこととする粘質土、砂質土を3層(各厚さ5~15cm)ほど版築し、深さ60cmの掘込み基壇をのこしている。基壇南側上部の版築は南に傾斜しており、南側では盛上げるような積み方を行なったことがわかる。東端に近いところでは下部の積土を南半と北半にわけて行なう部分もある。しかしながら、W246ライン以西では東方とことなり、上述の南門SB7801と同じ基壇の状況をしめている(fig. 17)。

基壇 基壇の南北縁には幅30~40cm、深さ50cmの溝を掘り大形の礫をつめた盲暗渠 SD5565, SD5557が平行する。西端はともにSB7801にとりつくようである。SD5557の東端はのちの木樋の南北暗渠SD5561によって破壊されているが、SD5556となって東面回廊との入隅で南下し、南側のSD5565と交わり同じく礫詰め盲暗渠となって東へ20mのび、南北溝SD3765に注いでいる。この入隅部でSD5565が直進せず南に方向を変えていることや、基壇土の状況が東西でことなることから、SC5600の基壇土のほうがSC5500より以前に積まれたのではないかとおもわれる。なお、基壇土の積み方に変化のみられるSB7801の東約6m、W246ラインの西側には基壇を南北に横断する礫詰め盲暗渠SD7807(幅45cm、深さ15cm)があり、その両端は回廊の南面と北面につくる盲暗渠(SD5565, SD5557)につながっている(fig. 16)。

地覆石 基壇の北縁では盲暗渠の内側に幅70cm、深さ10cmの東西溝SD7855が平行しており、地覆石の抜取痕跡に比定できる。西端は上述のW246ラインあたりでとまるが、東端は削平をうけてお



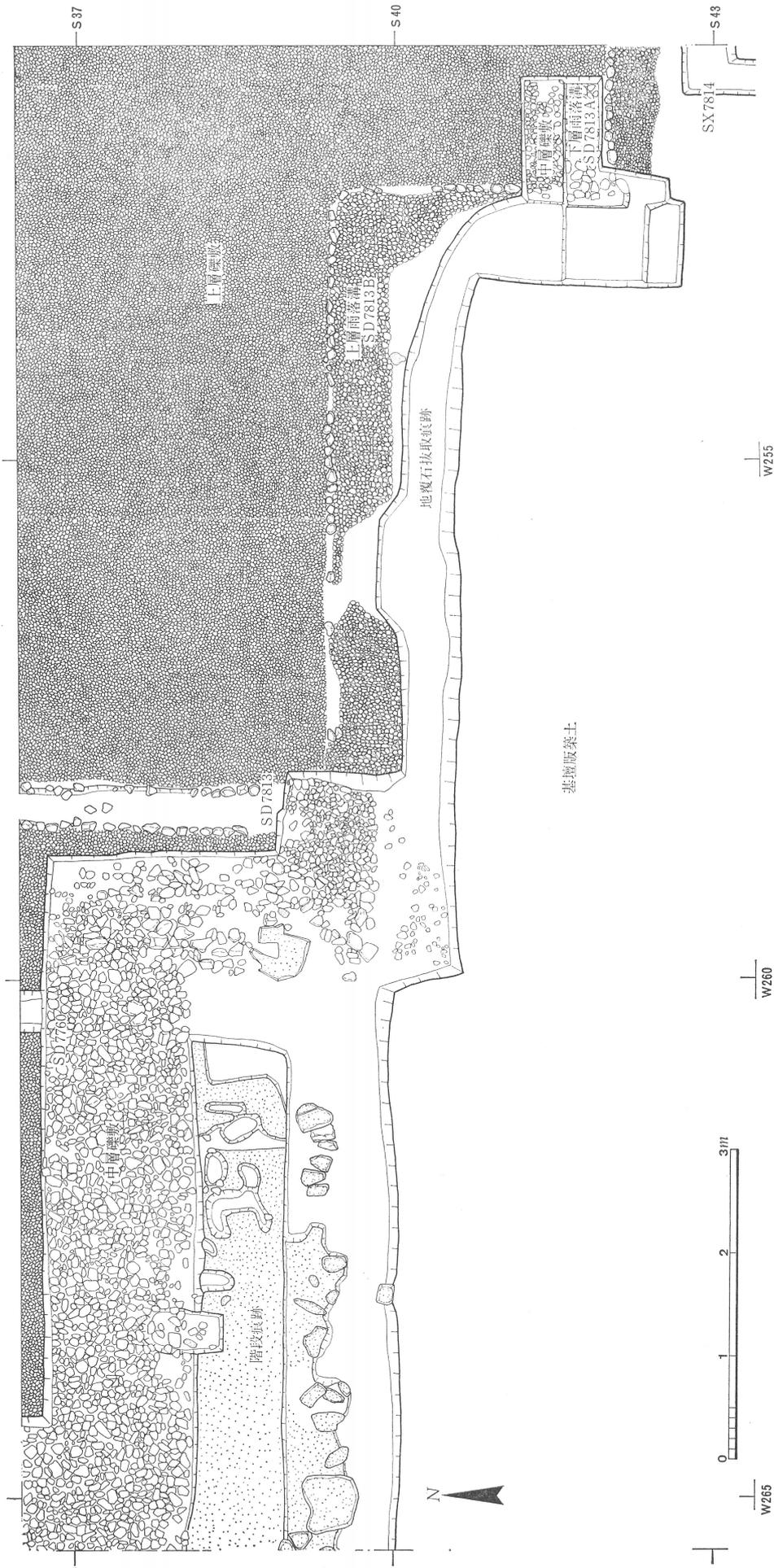


fig. 15 SB7801北面階段付近の様敷

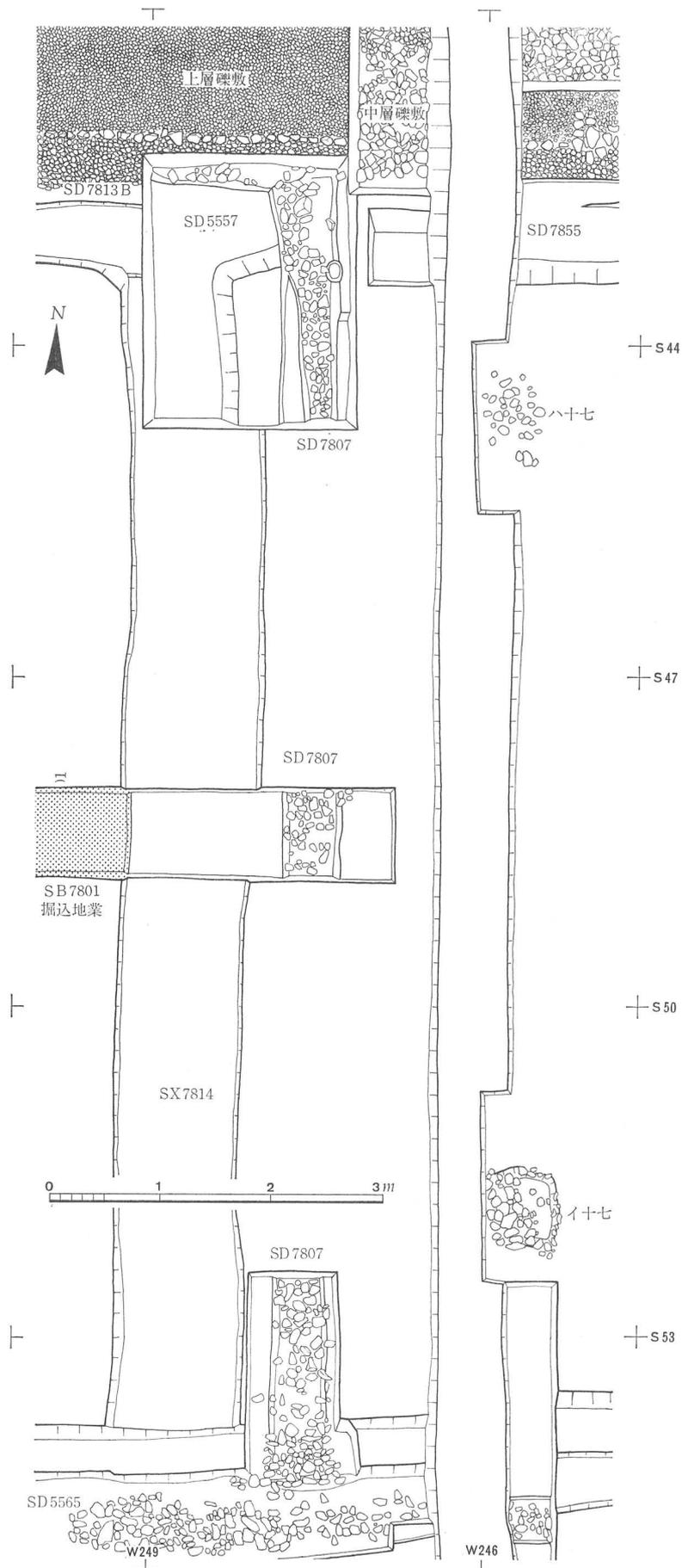


fig. 16 SC5600 礎石
掘付痕跡と
盲暗渠

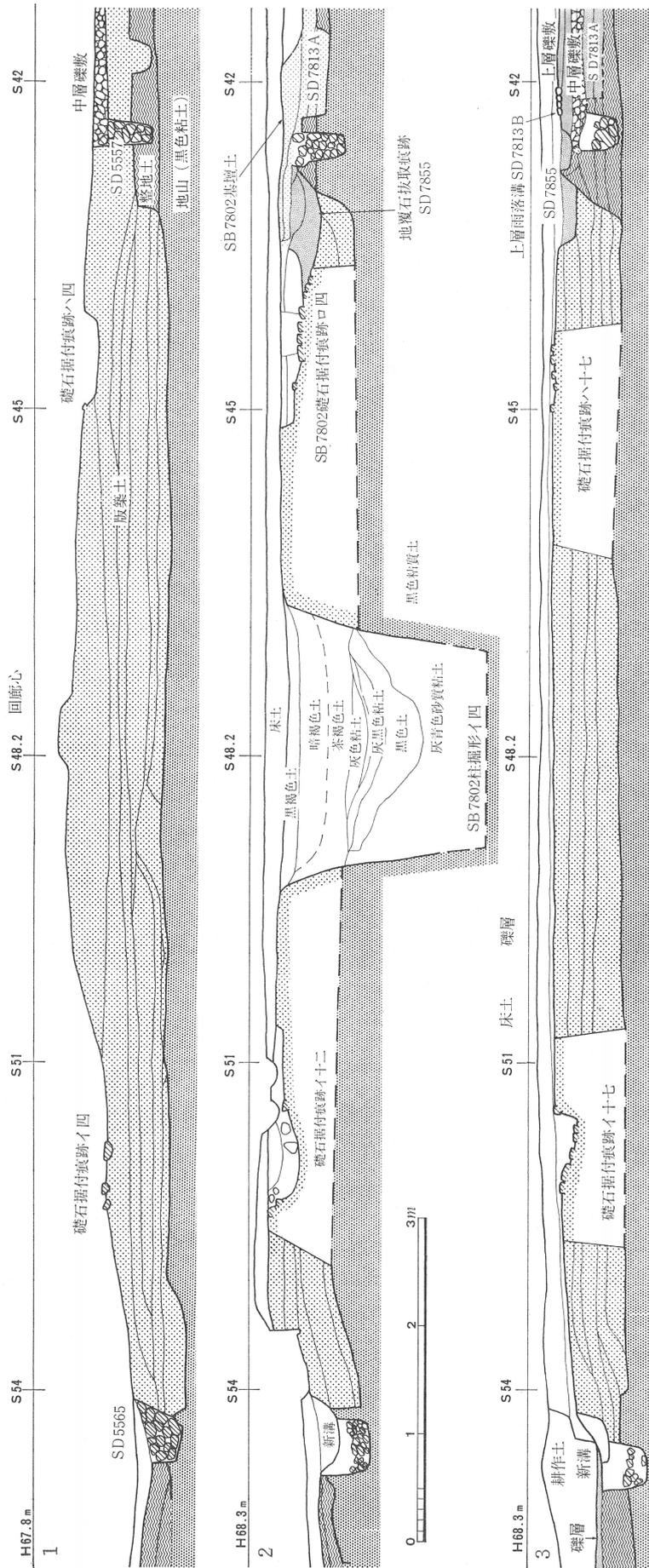


fig.17 SC5600基礎の断面 1. W186ライン 2. W228ライン 3. W246ライン

第三章 遺 跡

り不明である。この地覆石の抜取痕跡の心と回廊棟通り(S48.2)との距離は5.4mであり、基壇幅が10.8m(36尺)であったことがうかがわれる。回廊北面における雨落溝とそれにつづく礫敷はSB7801の場合と同じように3層にわかれる。上層の雨落溝SD7813BはSB7801の雨落溝につながり、建物SB7802の軒先でとまる。基壇縁に幅50cmで小粒の礫を敷き、見切りとして拳大の玉石を1列にならべる。見切り石の外側は小粒の礫敷となり、雨落溝とのレベル差はほとんどない。中層では基壇縁に接して外側一面に大粒の礫を敷きつめ、とくに雨落溝をもうけない。この整地はSB7802の増築にかかわるものであり、盲暗渠SD5557の上をおおっている。下層ではSD5557の外側15cmをへだてて幅65cmで大粒の礫をしいて雨落溝SD7813Aとし、その外側にやや小粒の礫敷がひろがる(fig. 18)。

礎石据付痕跡がのこっていた。南側柱列では、東端の3個と未掘部分の5個を除いて9個の痕跡がある。北側柱列では、SB7802の増築でうしなわれた6個と未掘部分の5個を除く4個の痕跡がある。それらは径1m内外のほぼ円形に散布する拳大の玉石で、いずれも中心部が低く、なかには方1.7mの掘形をとどめるものもあった。礎石の安定をはかる根固め石である。この礎石据付痕跡によって、回廊の心をS48.2に決定しうる。SB7802の間口の柱掘形をのぞいて回廊の棟通りには柱痕跡がない。だが、梁間を1間にすると広くなりすぎの復原で、遺構としては痕跡を見出しえないが、棟通りに築地を想定せざるをえない。そうすることによって、回廊東半部の桁行18間(80.37m)、梁間2間(7.1m)の南面東半分の築地回廊が推定できる。柱間寸法は桁行で東端の2間が3.54m(12尺)であるほかは、4.58m(15.5尺)の等間となる。梁間は3.54m(12尺)等間である。南側の基壇土の崩れた部分、南側柱の外側1mでは、礎石据付痕跡にそう形で8間(18m)分の小柱穴列SS7804(径30cm、深さ20cm)がある。柱間寸法は不揃いだがおよそ2.1mと2.4mを交互にくりかえし、礎石据付痕跡をさけて掘込んでいる。築地回廊南側の足場である。

以上のようなことから、SC5600はSB7801の基壇からはじまり、東西18間、中軸線と後述の東面築地回廊心との距離は88.3m、東西築地回廊の心々距離は176.6m(600尺)となり、その基準尺は29.43cmである。

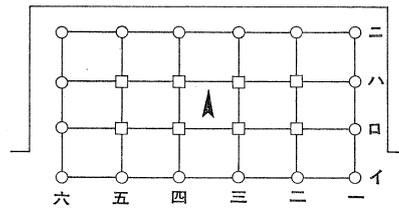
SX7814 (PLAN 12, PL. 5, fig. 16) 6ABR—H地区

SC5600の西端とSB7801との間の基壇上に、長方形にめぐる溝状の遺構がある。南端の部分は後世の攪乱によって痕跡をのこさないが、西溝幅30cm、北溝幅50cm、東溝幅1mで、東・西溝の幅は約3.4mである。北溝はSC5600の地覆石抜取痕跡とそろっており、南北の幅が回廊のそれとひとしかったことがうかがわれる。この溝状遺構は両側壁が垂直に立ち上り、埋土中に凝灰岩片を混入しているので、凝灰岩切石の抜取痕跡とみてよい。すでにのべたように、この部分の基壇土はSB7801と同時に盛られ、東溝の下部には盲暗渠SD7807があった。SB7801は礎石の痕跡をまったくのこさず、回廊には根固め石を良好にのこしていることからすると、回廊階段両者には高低差があり、SX7814はその中間で中壇を形成し、階段状につくられた回廊とりつき部分とみられる。

SB7802 (PLAN 11, PL. 3・7~11, fig. 17・18・19) 6ABR—H地区

南門SB7801の東にたつ5間(22.9m)×3間(11.52m)で総柱の東西棟建物である。柱間寸法は桁行で4.58m(15.5尺)等間であり、梁間は3.84m(13尺)等間である。総柱のうち側柱は

掘立柱であり、内部の柱を礎石建てとする。柱掘形は3.5m×2.5mの長方形を呈し、深さは2.75mという超大型である。ハ一柱穴をのぞくほかには、漏斗状の柱抜取痕跡がある。イ・ニの柱列は抜取痕跡が連続し、東側に抜きとっていることが推測でき、六通の抜



取痕跡は西側にはみだし、西側に抜きとったことがわかる。掘形の埋土は地山の砂質土であるが、抜取痕跡には瓦、土器、木器などの遺物が比較的多く堆積していた。イ三・ニ三・イ五・イ六・ニ六の抜取痕跡には柱根を支えた角材(17cm角)の断片が2本ずつのこっていた。また、ニ四柱抜取痕跡では、径75cmの柱根がたおれており、それには貫穴が2箇所あって、1箇所には支えの角材をなおとどめている(fig. 19-1)。イ六柱掘形の南壁とそれに接する左右壁には底から約80cm上に傘風の掘込みを6個あけている。足掛け用の穴であろう(fig. 19-3)。ハ二柱穴には抜取痕跡がなく、版築状に埋戻されていた(fig. 19-2)。この柱穴には柱が立てられず、東側北2間を吹放ちにしたのであろうか。礎石据付痕跡は、方形掘形(方2.7m、深さ15cm)の中心にあたる位置に、径1m程度に根固めの礫が散布する状態でのこっていた。なかに礫のまわりに小柱穴(径20~30cm)を配するものがある。足場ともみられるが、性格をきわめることはできなかった。

SB7802は、南面築地回廊の中層礫敷の改修時に増築されたもの。下層の雨落溝SD7813と礫敷面を埋めて東西約29m、南北約8mの基壇を北側につけたし、東・西側では2.5m、北側では2mをおいて中層礫敷として大粒の礫を敷きつめている(fig.17-2・18)。基壇はすでに削平されているが、このことによって軒の出がわかる。南半はSC5600と重複しており、築地回廊の一部を開いて増築されたものとみてよい。南北方向の柱筋は回廊南側柱と一致し、SC5600の南側柱とSB7802の南側柱の間隔は3.6m(12尺)であり、回廊南半を片流れの廂状に扱った建物であることはあきらかである。また、柱抜取痕跡から出土した木簡によって、この建物が天平勝宝5年(752)以後に廃絶したことがわかる。

SC5500 (PLAN 2・3・5~10・20~24, PL. 13~15・22~24・41・47・49・71・76・78・80・84, fig. 20・21) 6ABS-E, 6ABE-M・K, 6ABR-Q・P, 6ABD-C・D, 6ABQ-A・B, 6ABC-U・V, 6ABP-A・B, 6ABO-D・E地区

第1次大極殿地域の東面を画する築地回廊である。6ABR・6ABQ区では基壇の痕跡をのこしている。6ABP・6ABO区では基壇の痕跡はまったくないが、雨落溝や木樋暗渠が存在していることからその存在が確められる。低地部(6ABR, 6ABE区)の地山が軟い青色粘質土の地域と丘陵部(6ABQ, 6ABD区以北)の地山が硬い褐色粘質土・赤褐色砂質土の地域とでは、基壇形成の状況がことなっている。

低地に属する6ABR-Q, 6ABE-M地区における基壇断面をみてみよう(fig. 21-1・2)。ここでもSC5600と同じく、はじめに整地土(黄褐色粘質土)を広く敷いたのちに基壇の掘込み地業を行なっている。掘込み地業は、中心に約3m幅を掘りのこし、その左右に約3.5m幅の布掘地業を行なう。掘りのこし部分は回廊の心にあたり、その幅は築地の幅をしめす可能性がある。掘込み地業の深さは30cmで下部に礫混り土を搗き固め(厚さ25cm)、上部に礫混り土・粘質土を3・4層に盛りあげる。この段階で掘りのこし部分と東西の積み土との高さが大体一致する

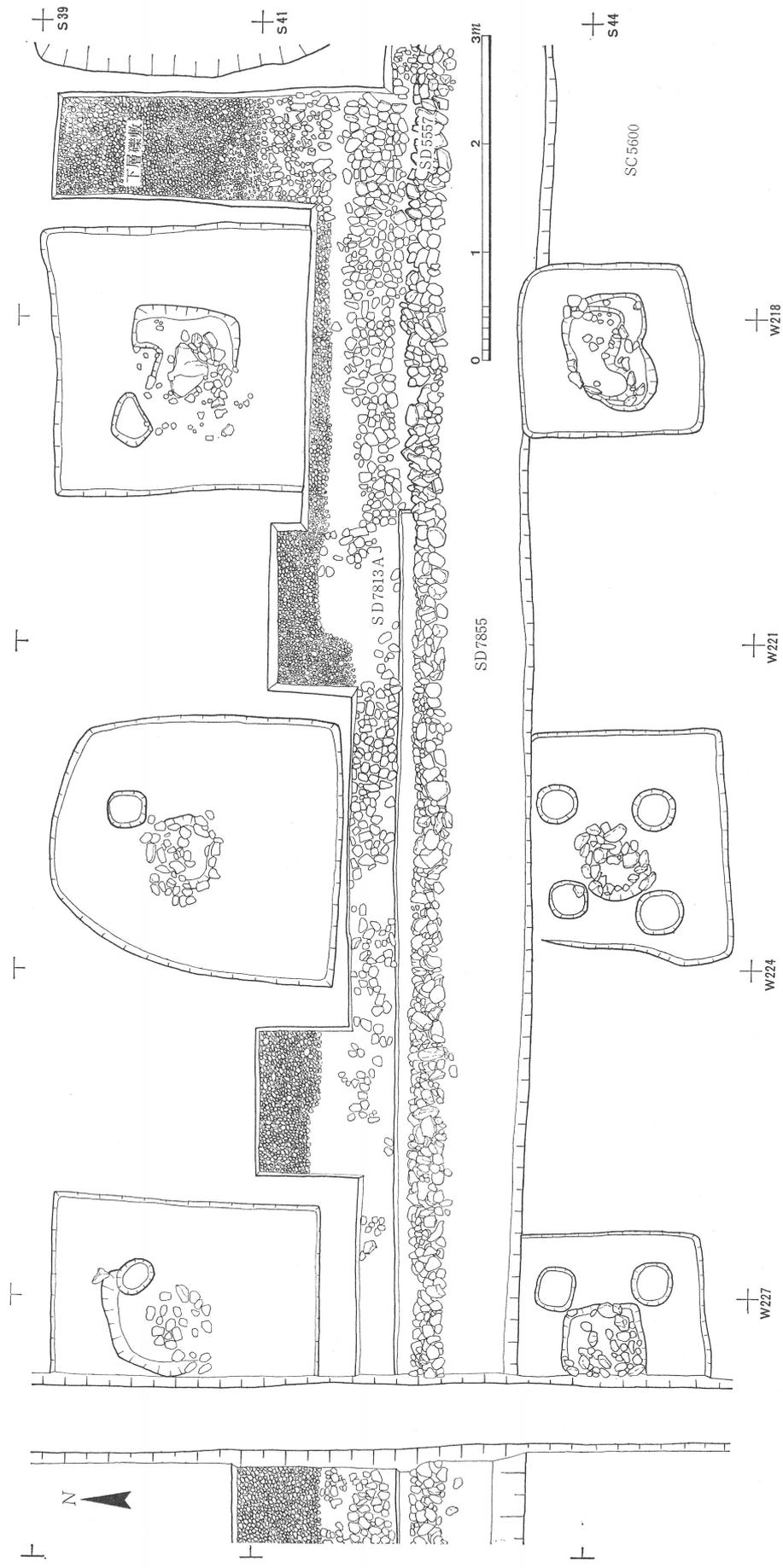


fig. 18 SB7802とSC5600の重複 fig. 17の断面図を参照

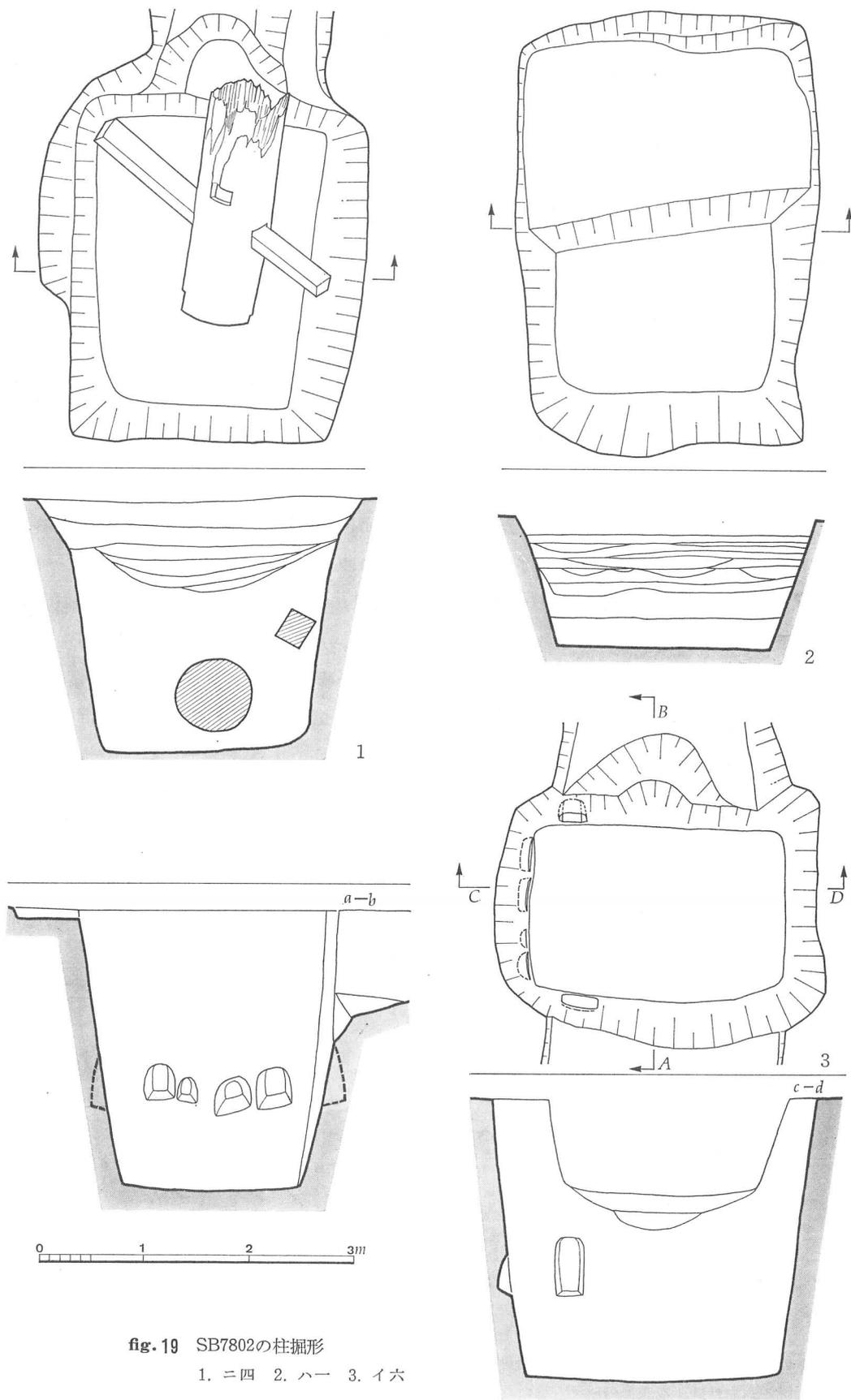


fig. 19 SB7802の柱掘形
 1. ニ四 2. ハ一 3. イ六

第三章 遺 跡

と、つぎには築地回廊の全面にわたって土を積み、結局掘込み地業の部分では深さ 60cm の基壇積土をとどめることになる。基壇上面の削平は著しく、基壇の東西縁に想定される地覆石採取痕跡を見出すことはできなかった。しかしながら、掘込み地業の外側 1 m 内外のところに雨落溝 (SD3790, SD5575, SD5588) があり、その間が回廊基壇となる。このことから、SC5600 と

基壇幅 同様に基壇幅を 10.8m とすることが可能となる。

6ABQ-A 地区では N120 付近で地山に傾斜がつき、それ以南では掘込み地業を行ない、以北については赤褐色礫混りの整地土のうえに版築して基壇をつくる (fig. 21-3)。さらに N140 以北では版築を行わず、地山を削りだして基壇を造成している (fig. 21-4)。また、6ABQ-A 地区では第 III 期の築地 SA3800 が比較的良好にのこっており、その基底面が第 I・第 II 期築地回廊の床面と大差ないとするならば、西側の雨落溝 SD3790 との比高は 60cm 内外となり、それが基壇高をしめすことになる。

SD3790 は東面築地回廊の西雨落溝である。幅 90cm、深さ 15cm の溝を掘り、幅 500m 内外に西雨落溝 礫をしくのであるが、礫敷は上下 2 層にわかれる。上層の礫敷は大形の礫を見切りの石列として南北に 1 列にならべその内外にやや小粒の礫をしく。下層の礫敷はやや大粒の礫をしくにとどまり、見切りの石列をもうけていない。ともに 6ABR-D 地区の中央では、第 II・第 III 期の東西築地 SA3810 の盛土でおおわれている。6ABP・6ABQ-A・6ABR 区では部分的にしか痕跡をとどめないが、6ABE-M・K 区では比較的保存状態がよい (PL. 24・48)。SD5588 は広場地区を横断する東西溝 SD5590 との合流点から南下した部分の雨落溝である (PLAN. 5)。もっとも古い石詰の盲暗渠 SD5555 の後身として、築地回廊を横断し、東方へ排水する木樋暗渠 SD 東雨落溝 5561, SD5560 につながっている。SD5575 は東面築地回廊の東雨落溝であり、6ABE-M 地区でしか痕跡をとどめていない (PLAN. 6)。幅 65cm、深さ 20cm の素掘溝で、若干の砂を混える黄褐色土が堆積しており、その下で後述の足場 SS3795 の柱穴を検出した。

この時期の基壇の削平は著しいが、西側柱列の礎石据付痕跡 4、東側柱列の礎石据付痕跡 6 を確認し、回廊の棟通りが南端で W178.3 であることがわかった (PLAN. 5, PL. 15, fig. 20)。基壇に掘込まれた足場によって 回廊の柱位置を想定することが可能である。SS3795 は東面築地回廊に設けた足場であり、築地回廊の建設にともなう工事用足場柱の痕跡¹⁾とみられる。その配列状況は、回廊の心から東西に 2.3m をへだてた位置に各々 2 列ならんで南北にのび、さらに

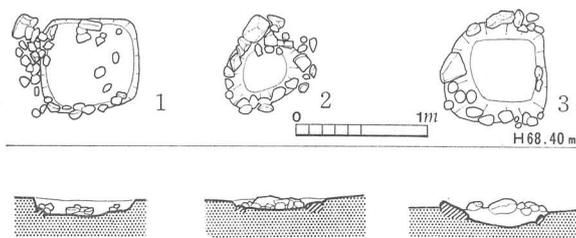


fig. 20 SC5500とSC5600の礎石据付痕跡
1. SC5600ハ四 2. SC5600ハ三
3. SC5600ハ四

1) 足場の柱穴と小掘立柱建物・木堀・縁束・床束などを区別する条件としてつぎのようなものがある。1. 柱掘形は方形・円形をとわず小さい。2. SC5600 でもそうだが、殿舎地区の状況からすれば、本建築の柱筋をさけた柱間の中央に柱穴が規則的に配される。3. 規則的と

はいえ、方位や柱間寸法は本建築のように厳密でない。このような条件をそなえた遺構を建築の建設や解体などにともなう足場に比定した。逆に足場をたどることによって、すでに消失した礎石位置などを推測することが可能である。

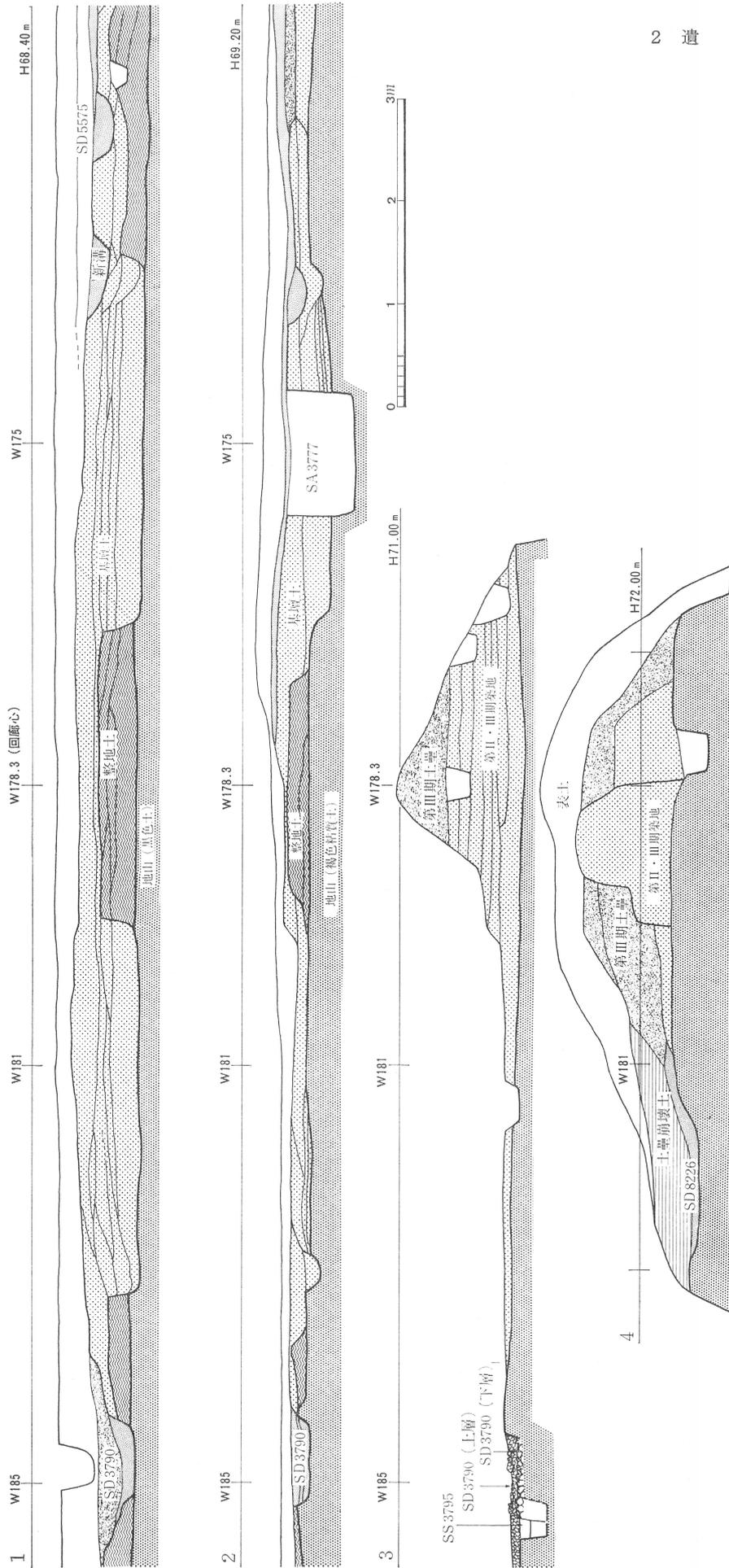


fig. 21 SC5500の基礎断面 1. S30ライン 2. N26.5ライン 3. N100ライン 4. N141ライン

外方4.5mのところを東西雨落溝に重複して、西側では1列、東側では2列の小柱穴列がある。都合7列の足場は掘形の径50cm、深さ20cmであり、柱間寸法は必ずしも一定しないが約2.4mと約2.1mとを交互に配し、梁間の柱筋をおおむね揃える。基壇上で近接している2列には部分的に重複するものもあり、前後2回の作業にかかわるものであることがわかる。すなわち中心寄りの古い列を造営時のものとみなしてSS3795Aとし、外側の新しいほうをSS3795Bとして再建時の遺構に想定した。第I期の築地痕跡はないが、6ABP-A地区の棟通り推定線上に1間分(3m, 10尺)の南北に相対する柱掘形(1.2×0.9m)があり、これを築地にあげた門の親柱に想定することができる **SB8233**。こうした足場とSC5600で確認した側柱の柱間寸法(桁行4.58m・15.5尺、梁間3.54m・12尺)とは矛盾しない。残存する西側柱列を北へ延長し、6ABO-D地区の東西溝SD130を北面築地回廊SC8098の南雨落溝として想定すると、桁行総柱間は72間(南北端各2間の柱間は各3.54m、延324.79m)、梁間2間(7.1m)となり、南北の心々距離は317.7m(1,080尺)となる。この場合基準尺は29.41cmである。

SA3777 (PLAN, 2・3・5・6~10・20~24, PL. 14・15・22・23・47・76・84, fig. 22)
6ABE-M・K, 6ABD-A・D, 6ABC-U・V, 6ABO-D地区

東面築地回廊SC5500の東側柱筋に重なる南北塀である。未掘部分があるが、総柱間は65間(307.3m)であり、柱間寸法は4.58m(15.5尺)を基本とするが、6ABD-C地区の第35・36柱穴間と6ABC-U地区の第52・53柱穴間は2間分(9.16m)をあげ、門の役割をはたしている。なお、『平城宮報告IV』で建物SB269として報告した柱掘形は、SA3777の北延長線上にあって、木樋暗渠SD130が掘込んでいるなど、共通点が多いので、SA3777にあらめた。南北両端はそれぞれ南北築地回廊心と5.2mへだたったことになり、少し広いがこの状態で塀の両端は南北築地回廊の築地部にとりついたのであろう。柱の掘形は1.1~1.5mの方形または長方形を呈

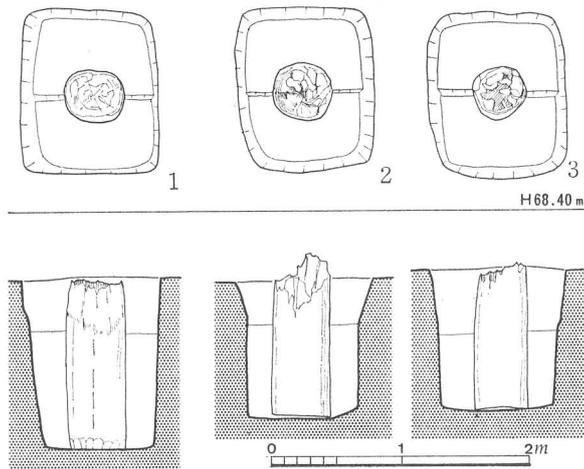


fig. 22 SA3777の柱根 1. 第3柱(南から), 2. 第4柱, 3. 第5柱

SD5555 (PLAN 5, PL. 16, fig. 23) 6ABS-E地区

築地回廊の東南入隅を南に横断したのち基壇のやや南を東へ流れて、南北溝SD3765に注ぐ東西盲暗渠。全長18.8m、幅50cm、深さ80cmの溝を掘り、大粒の礫をつめている。SC5600を横断する部分 **SD5556** は、後の木樋暗渠SD5561によって破壊されている。礫詰めの上層は東端のほうが西端よりも65cm低い。

1) PLANでは推定柱位置を■でしめしている。

SD5560 (PLAN 5, PL. 16・17, fig. 23) 6ABS—E地区

SD5555 の北約 1m を流れる東西木樋暗渠で、全長 24.7m。西端は SD5561 につながり、東端は開渠 SD5558 につながる。はじめに溝 (幅 1.2m, 深さ 60cm) を掘り、木樋をすえて埋戻したもの。木樋は角材に溝 (幅 23cm, 深さ 13cm) をくりぬいた樋 (長さ 5m 内外, 38×25cm 角) を 5 本つないだもの。継ぎの部分はソケット状に加工し、一端は雄形に削り出し、他端を雌形にくりぬいている。また雌形の木口を水上にむけ、雄形の木口を水下におく。樋の両側には 1.2m 内外の間隔をおいて棧をおとしこむ切りこみ (幅 5cm, 深さ 2.5cm) をいれ、1 本につき 3～5 本の棧 (長さ 28cm, 3.5cm 角) をわたし、そのうえで全部で 9 枚の板 (長さ 2.8m 前後, 幅 31cm, 厚さ 5cm) で蓋している。なお、両端の木口部では北からの SD5561 につなぐために、北側を 45cm ほど切りとっている。東端と西端の落差は 15cm。西端部が南北塀 SA5550 の柱穴にかさなっており、木樋のほうが新しいことがわかる。

東西木樋暗渠

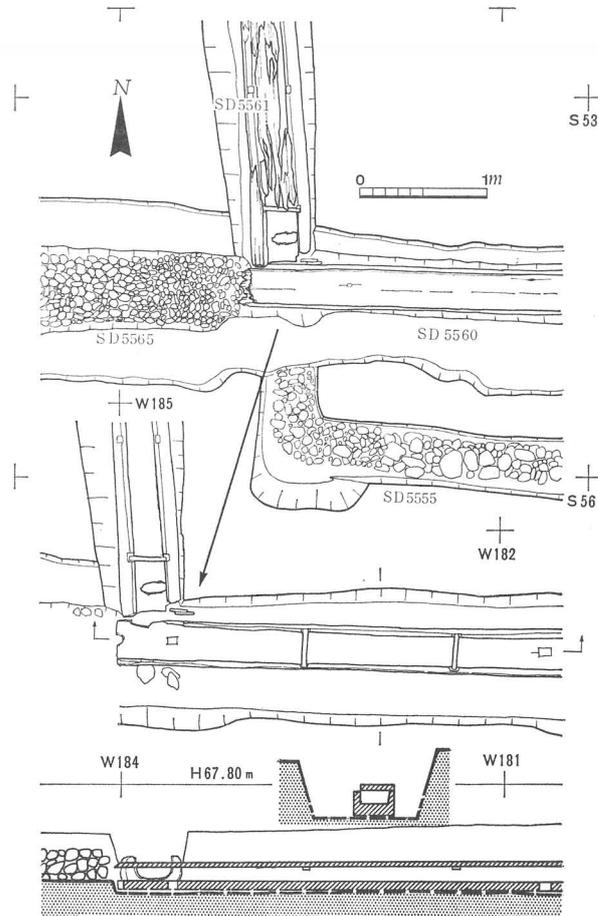


fig. 23 SD5560 と SD5561 の結合

SD5561 (PLAN 5, PL. 16・17, fig. 23) 6ABR—Q地区

築地回廊 SC5600 の東南入隅部で南下し、南端を SD5560 につながり木樋暗渠。構造は SD5560 と同じだが、この木樋は丸柱 (長さ 6.05m・6.30m, 径 45cm) を転用したものである。棧は 1 本につき、7 本おくが、蓋は著しく腐蝕し原形をとどめていない。南北の落差は 12cm で、南のほうが低い。

南北木樋暗渠

SD5562 (PLAN 4・5, PL. 16・18, fig. 24) 6ABR—Q・6ABE—M地区

築地回廊東南入隅から東へのび、SC5500 を横断する木樋暗渠で SD5561 の北端と接している。全長は 41.67m で、7 本の木樋をつないで東方の南北溝 SD3715 に排水する。木樋の構造は SD5560 と同じだが、SC5500 の基壇部分では掘形を狭くして (幅 85cm), 長さ 6.2m の丸柱転用材を 2 本おく。その東方には、掘形を広くし (1.95m), 長さ 5.2m 内外の角材樋 (内法幅 23cm, 深さ 15cm) をおく。棧をわたして蓋をかけるのであるが、蓋は腐蝕が著しく原形をとどめない。西端では南面・東面回廊の雨落溝をうけるが、築地回廊の東側では東雨落溝の水をうけず、東雨落溝 SD5575 は木樋の上部を通りぬける。東西の落差は 29.1cm で、東端のほうが低い。SA3777 の柱穴を掘込んでおり、木樋のほうが新しいことになる。

東西木樋暗渠

SD5563 (PLAN 5, PL. 18, fig. 24) 6ABE-M地区

SD5562の北3.5mにある木樋暗渠で、全長13.25m。西端ではSD5588, SD5589をうけ、東端は東西溝 SD5564 につながる。丸柱転用の木樋2本をつないだもので、上口(幅15.6m)に棧をはめず、長さ2.35m、幅20cm前後の板を3~4枚かさねて蓋する。西端では両側を約10cm低くし、木口を板で塞いで上から水を受けている。東端では木口下面に礫をすえ、両側に板を打ちこむ。東西の落差は13cmで東端のほうが低い。この木樋の上にも 東雨落溝 SD5575 が通り、SA3777 の柱穴を掘込んでいる。

SD3770 (PLAN 7, PL. 24・25, fig. 25) 6ABR-P・6ABE-K地区

SC5500を横断する木樋暗渠で、全長41.45m。西端は西雨落溝 SD3790 につなぎ、東端はSD 3715 に注ぐ。ただし、この暗渠と直接連続しないが西延長線上に東西溝 SD3779 があり、本来は連っていた可能性がある。蓋のほとんどは腐蝕し、樋も著しく腐蝕し底部をとどめるにすぎない。7本の木樋をつなぎ、基壇下の2本を丸柱転用材とし、それ以外は角材をくりぬいたものである。SD5562 と同じ構造といえる。東西の落差は24cmで東のほうが低い。SA3777 の柱穴を掘込んでいる。

以上、5条の木樋暗渠の丸柱には同一の仕口穴があり、同時期のものである。

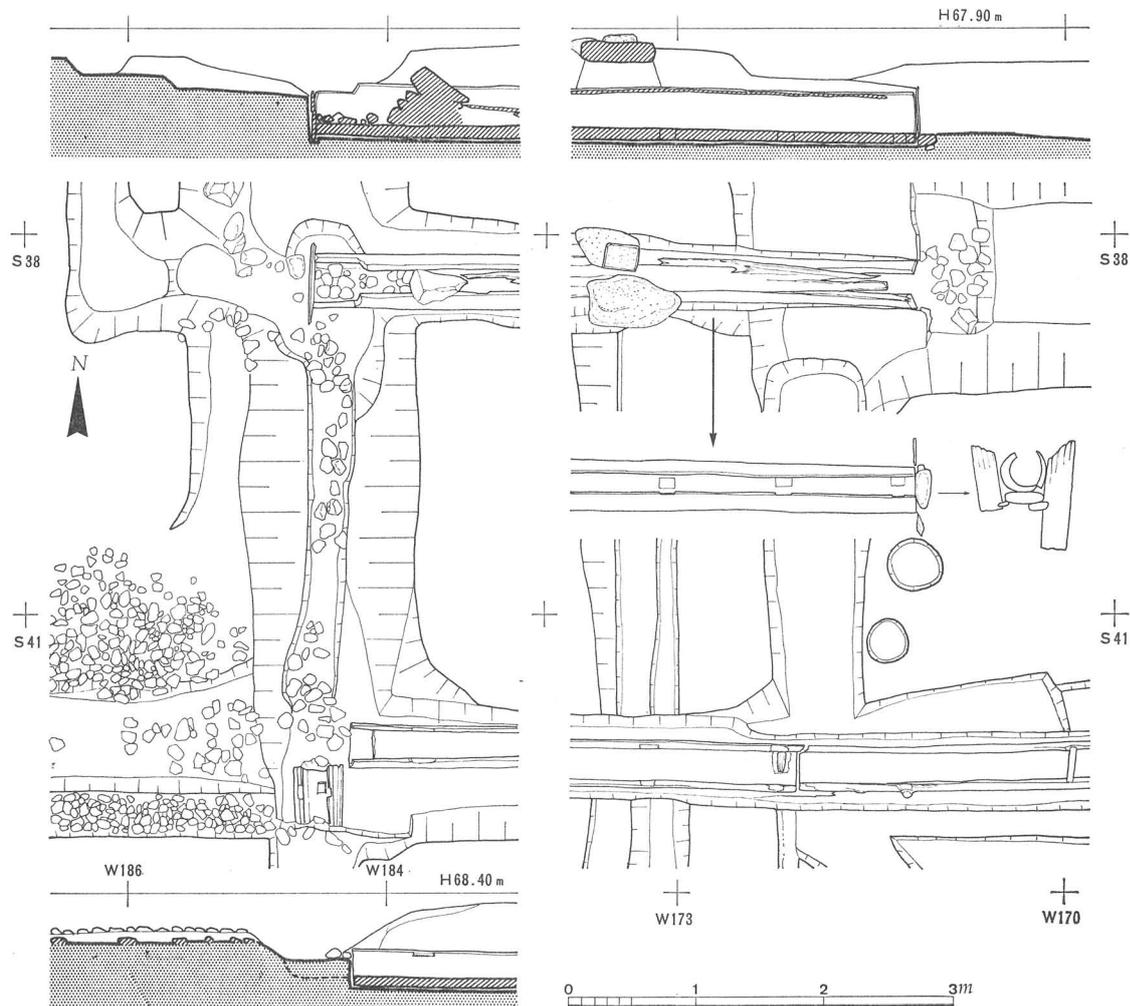


fig. 24 SD5588 に結ぶ SD5562(南)と SD5563(北)

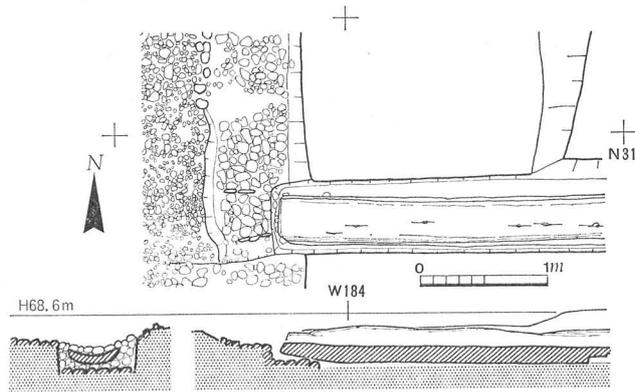


fig. 25 SD3790 と SD3770

SD3775 (PLAN 8, PL. 28, fig. 26) 6ABD—D地区

築地回廊 SC5500 を横断する東西溝。西は西雨落溝 SD3790 とつながり，東方の南北溝 SD 東西溝と暗渠
3715 につながる全長40.7mの素掘溝である。基壇部分は幅1.15m，深さ70cmの溝で部分的に凝灰岩の破片がのこっている。南方の状況からすれば，本来は木樋暗渠であり，凝灰岩片はその据えつけ石であった可能性がある。基壇の東方では素掘りの開渠（幅80cm，深さ40cm）となり，基壇の東約16mから，長さ5.2mの石積暗渠となる。暗渠には扁平な安山岩を用い，現在底石と側石をとどめる。側石は北側で一部2段目をのこすほかは，一段目の石しかのこしていない。当初から溝の南北で地盤の高低差があったのかもしれない。両側石の内法幅は40~50cmで，その掘形は両側の開渠部よりも広い（幅1.0m）。この暗渠は後述する門SB3746の柱位置と対応しており，通路の部分のみを暗渠にしたのである(p. 89参照)。

SD8311 (PLAN 3・20, PL. 78) 6ABC—V地区

西は築地回廊の西雨落溝 SD3790 からはいり，築地回廊 SC5500 を横断し，中断部分があるが，東方のSD8327につながってSD3715に注ぐ東西溝である。基壇部分では幅1.0m，深さ30

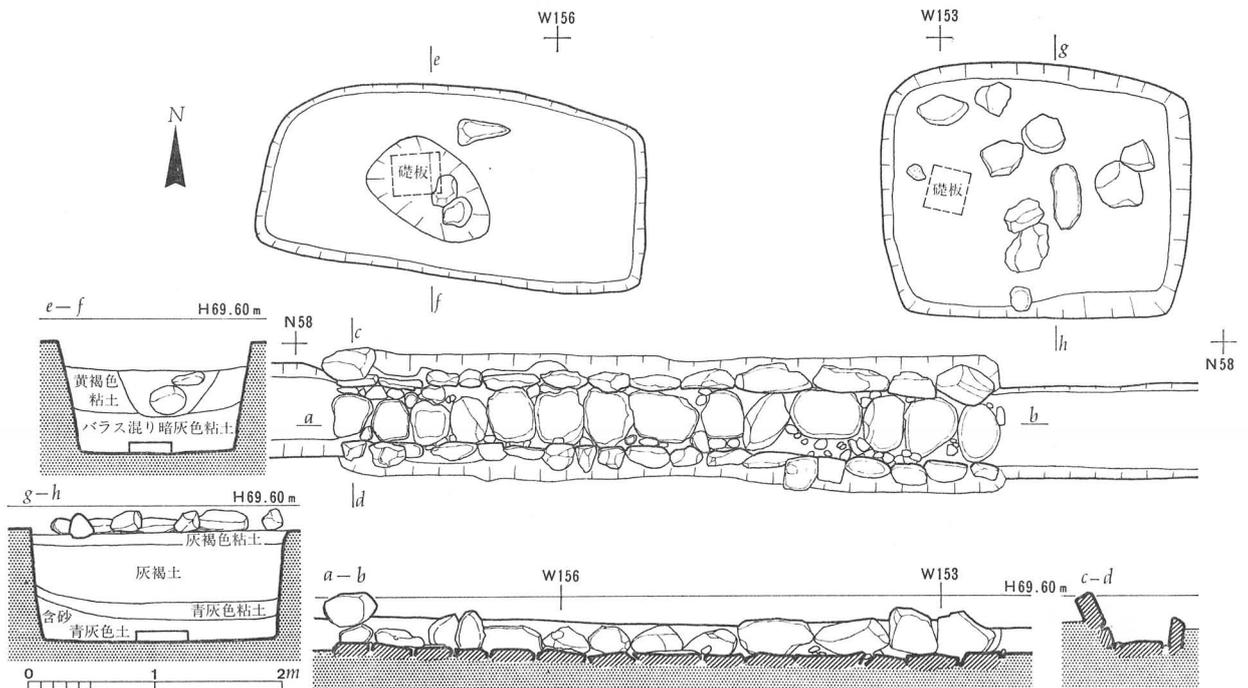


fig. 26 SD3775 と SB3746

第三章 遺 跡

東西溝 cmとなり、中心の幅50cm部分と左右とは土層の堆積状況がことになっており、木樋部と裏込め部分にわかれるようである。基壇上で第Ⅱ期の東面築地回廊 SC8600 の柱据付痕が掘込まれている。また、東方のSD8327には第Ⅲ期の南北溝SD8237, SD8239および南北棟建物SB8325の柱穴が掘込まれている。

SD8307 (PLAN 21, PL. 78) 6ABC—V地区

盲暗渠 SD8311の北11mのところにある東西盲暗渠。断面V字形の溝(幅80cm, 深さ40cm)を掘り、大粒の礫を詰めたもの。築地回廊の西雨落溝 SD3790 の水を東側に排水する施設。

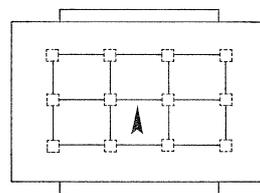
SC8098 (PLAN 2・24・33・34, PL. 93・94) 6ABB—A, 6ABO—D・F・G・J・L・N・O・R地区

北面築地回廊 すでに『平城宮報告Ⅱ・Ⅳ』で報告した東西石敷溝 SD130 によって北面築地回廊を推測することができる。SD130 は断続的に残存するが全長 185m, 幅 80cm の東西溝である。溝には礫を敷き南側に見切りとして大粒の礫をなべ, その南側に小粒の礫敷面がひろがる。東端には約12mにわたって木樋暗渠の痕跡があり, 南北塀 SA3777 の柱穴を掘込んでいる。西端は西面築地回廊推定位置の東約 10m で消失している。この SD130 は SC5500, 5600 の石敷雨落溝ときわめてよく類似しており, やはり上下 2 層にわかれる。北面築地回廊の南雨落溝であり, 木樋暗渠の長さは SC5500 の東西幅とみてよい。以上のようなことから, 破壊の著しい北面築地回廊についても, 南・東面回廊と同じく基壇幅 10.8m, 東西心々距離 176.6m (600尺), 総柱間41間(内両端の各 2 間は東西築地回廊の梁間である), 柱間寸法は桁行4.58m (15.5尺), 梁間3.54m (12尺) と推定することができ, 回廊の棟通りは N269.5 となる。なお, 後述するように中央部分にSD244によって軒廊が復原できるので, 中軸線上の 1 間を北門にあてることができよう。

ii 第Ⅱ期の遺構

SB7750A (PLAN 14, PL. 33・34, fig. 27-3) 6ABR—G, 6ABQ—D地区

南門 第Ⅱ期の南門である。礎石据付痕跡や, 基壇積土の痕跡はない。南面と北面に基壇地覆石抜取痕跡 SD7772, SD7773 がある。それは, 幅 70cm, 深さ 20cm内外の素掘りの東西溝で, 部分的に凝灰岩片が散布する。東半分しか検出しなかったが, 中軸線(W267.0)で折返すと東西長 20.0m, 南北幅 12.7m となる。ただし, 中央部(長さ 13.44m)は南・北面ともに1.05m外側に張りだしており, 階段にあてることができる。第Ⅰ期整地土の上に基壇を盛りあげている。階段の東西幅を門の桁行とすれば, 3間(13.44m)×2間(7.2m)の東西棟建物が想定され, 柱間寸法は桁行4.48m (15尺), 梁間3.6m (12尺)とかんがえられる。なお, この建物と後述する第Ⅲ期の SB7750B によって中軸線が W267.0 であり, 門および南面築地回廊の心が N51.9 であることがわかる。つまり, 第Ⅰ期の南面築地回廊位置から北へ100.1m移動しているのである。



SC3810A (PLAN 2・8・14, PL. 26・27・32・34・35, fig. 27) 6ABR—G・6ABQ—D地区

南面築地回廊 第Ⅱ期の南面築地回廊である。6ABR—D地区の状況によると, 基壇は第Ⅰ期礫敷面の上に直接積上げている。すなわち, はじめに幅約 5m, 厚さ20cmで粘土質の土を盛り, その上に同質の土を薄くつむ。さらに両側につぎたすようにして 2・3 層をつみ, 結局礫敷面から 50cmの高さに積上げて回廊の床面にあてたようである。部分的に築地の盛土をとどめるところ

もある。ただし、これは保存状況のよい部分のことであって大部分は削平されている。基壇幅は雨落溝と足場によってわかり、また雨落溝などによって、南面築地回廊が南門 SB7750 Aから発して東面築地回廊 SC8360 につながるものが裏付けられる。

東西溝 SD3778 は SB7750A の北面階段の東端からはじまり、東端が SC8360 を横断する全長84.4 mの素掘溝(幅50cm, 深さ20cm)で、SB7750Aの棟通りから北へ6.9m へだたっており、南面築地回廊の北雨落溝に比定しうる。なお、東面築地回廊 SC8360 を横断する部分は暗渠でぬけたものとおもわれるが、顕著な遺構はない。この SD3778 に対応する南雨落溝は痕跡をとどめていない。

SD3778 に北接して東西にのびる足場 SS3805は、19間(68.9m)の小さな東西柱列(柱掘形の径50cm, 深さ40cm)で、柱間寸法は3.25~4.0mと不揃いだが、おおむね3.9mにおさまるものが多い。北側の足場であろう。足場SS3818は、SB7750Aの心から南へ7mへだてて東西にのびる19間(68.9m)の小柱列で、柱穴およびその位置はSS3805に対応している。また柱間寸法もSS3805と同じ傾向をしめしており、南側の足場とみられる。後述するSC8360とSB7750Aの心々距離は88.3mとなり、南面築地回廊の全長(東西築地回廊の心々距離)は176.6m(589尺)となる。柱間寸法を後述の北面築地回廊 SC6670

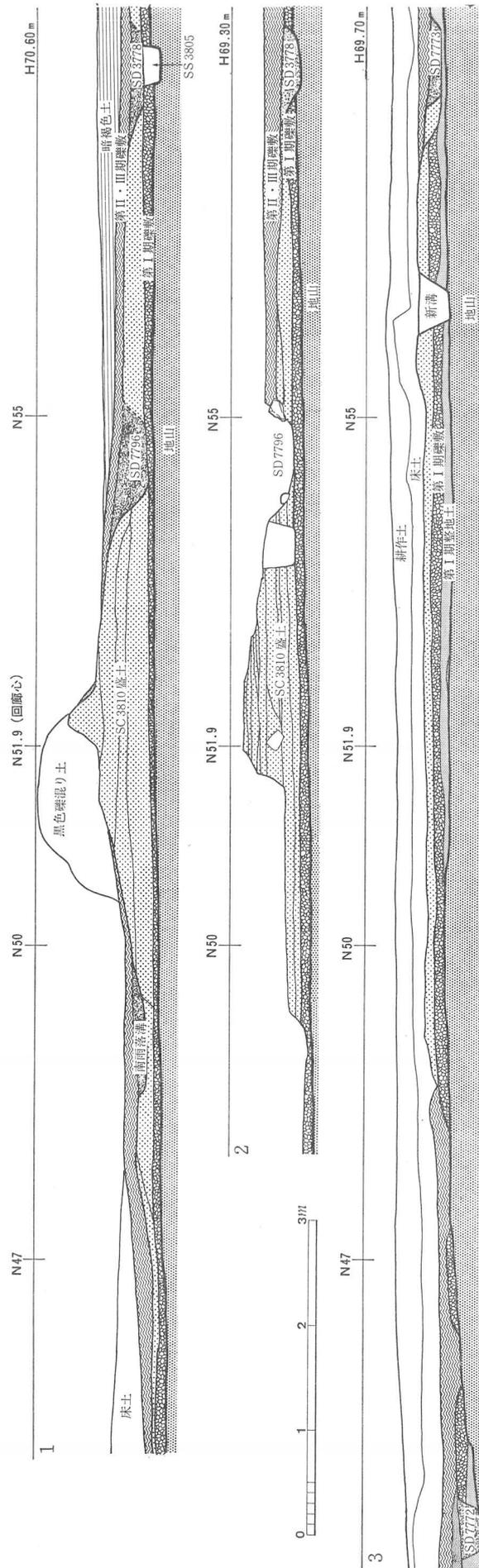


fig. 27 SB7750AとSC3810A・SA3810B基壇断面 1. W196ライン 2. W227ライン 3. W263ライン (SB7750A)

第三章 遺 跡

と同じく桁行3.9m(13尺)、梁間3.6m(12尺)とすれば、南面築地回廊の柱間数は中央に3間の南門をおいて、両脇に22間(内2間は東西築地回廊の梁間)配したことになる。

SC8360 (PLAN 2・3・8~10・20~24, PL. 22・42・47~49・76~78・84・85, fig. 28)
6ABP-A・B, 6ABC-U・V, 6ABQ-A・B地区

第I期の基壇を踏襲した第II期の東面築地回廊である。南方では遺構面が削平され、北方の高地にしか遺構をとどめない。6ABP-A・B地区では基壇積土の痕跡を欠くが、側柱列の礎石掘付痕跡と西雨落溝を検出した。礎石掘付痕跡は径1m内外、深さ20cm内外の浅い掘形に安山岩の根石をすえたもので、東側柱位置に2個、西側柱位置に16個が残存した(fig. 28-1・2)。東側の2穴は第I期のSA3777の柱掘形を掘込み、西側の1穴が第III期の東面門SB8310の柱掘形に掘込まれているので、両者の中間の時期に位置づけることができる(PL. 77)。その柱間寸法は、B地区の北寄りの1間が4.49m(15尺)であるほかは、3.95~4.0m(13.2尺)の等間である。柱間寸法を広くとる柱筋の東3.56mのところ、1間分の柱穴(掘形1.1×1.4m)が南北にならぶ。それは門の親柱であり築地にあげた門の存在をしめしている**SB8230**(fig. 28-3)。6ABQ-A地区の北辺でも同様の掘立柱痕跡があり、この位置にも門**SB9223**が存在したことになる。それは南の親柱にあたり、対応する柱穴を検出していないが、北方の側柱列の柱間からすると、柱間6.6m(22尺)程の一間門となる。6ABC-V地区の南辺にある東側柱列相当の礎石掘付痕跡によって、さきの門の親柱位置を心にする梁間2間(7.2m)の回廊であったことがわかる。

6ABQ-A地区では第III期の築地積土を除去して、築成時の遺構を検出した。回廊の心をはさんで幅1.5m程度の間隔をおく小柱列(柱間3m)**SX9218**が断続的にみられ、しかも柱穴が重複するところもある。この時期ないしは第I期の築地版築時の梓板支柱ともみられる。また、この小柱列と同位置に南北小溝**SD9219**、**SD9221**があり、梓板をすえた痕跡とみられる。**SD**
雨落溝 8216はSC8360の西雨落溝(幅45cm、深さ20cm)で、西側柱心から2.5mはなれて南北に流れる。東北の入隅部から26.4m残存するが、それ以南はのこっていない。この雨落溝によって基壇幅が12m程度であったことがうかがわれる。

SB9223の南親柱位置はこの時期の郭内を南北にわける石積擁壁**SX9230**の東延長線上にあり、東面中央門となる(PLAN10)。SB9223と北方のSB8230との間には礎石掘付痕跡があり、この間は桁行10間(40m)となる。東面北門SB8230の北側にこの礎石掘付痕跡からすれば北面築地回廊SC6670南側柱までの桁行は10間(40m)となる。SB9223と南面築地回廊とのほぼ中間、回廊棟通り位置に4穴の小柱掘形があり、その長さ5.1mを東面南

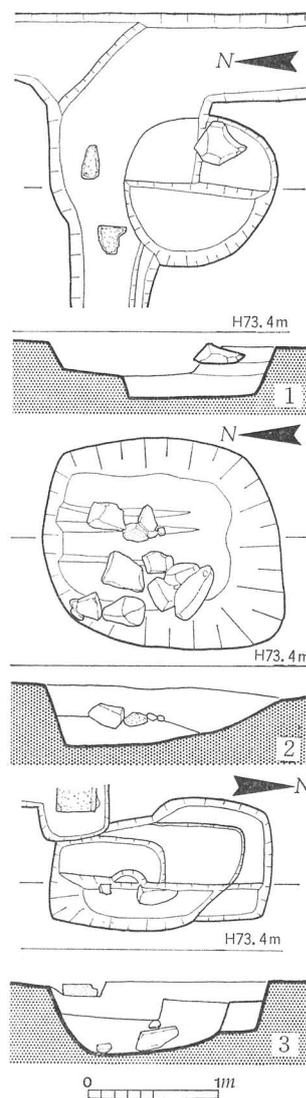


fig. 28 SC8360 礎石掘付痕跡と SB8230 の柱掘形
1・2. 礎石掘付痕跡 3. 柱掘形

門**SB9217**に比定することができる。SB9223 と SB9217 の間を11間に割りつけると柱間寸法は 4.01m となる。さらに SB9217 から南面築地回廊北側柱位置までを10間に割りつけると、柱間寸法は 3.95m となる。このようにして東面築地回廊の総柱間数は48間（門3間、南北築地回廊の梁間4間分をふくむ）に復原しうる。この場合、南北築地回廊の心心距離は 186.08m（620尺）となり、単位尺は 29.9cm である。

SC6670 (PLAN 3・24・27・32, PL. 60・83・85, fig. 29) 6ABP—A・G地区

北面築地回廊である。中軸線から東半で礎石据付痕跡と雨落溝を検出した。築地及び北側柱列・北雨落溝は一条通りの道路敷にかかり、検出しえたのは南側柱列と南雨落溝である。基壇の痕跡はまったくなく、上記の遺構は地山面で発見した。礎石据付痕跡は15個が断続的に残存している。それらは SC8360 の場合と同じように方 1m内外の浅い掘形をとめない、うちに2～4個の安山岩の根石をとどめているが、なかには根石の抜きとられているものもあった。

柱間寸法は中軸線上にある中央間とその東1間が4.48m（15尺）であるほかは、3.9m（13尺）等間である。これによって北面中央の門**SB7217**が3間であったことがわかるとともに、北面回廊の東半の桁行柱間は22間（うち2間は東面回廊の梁間）となる。南雨落溝**SD8214**は側柱列から南へ2.75mへだたる素掘溝（幅50cm、深さ10cm）である。G地区では痕跡をとどめないが、A地区での残存状況は比較的よい。東北入隅部分で東西溝SD8216とまじわり、SC8360を横断する。SD8214の南岸位置で断続的にならぶ小柱穴列**SS7222**は約4mの柱間寸法をもち、SC6670の足場とみられる。6ABO—E地区の南辺に同様の小柱穴列**SS8096**があり（PLAN 33）、北側柱の足場にあたる。

築地回廊の梁間については確認の手だてはなかったが、SC8360と同じく幅12m程度の基壇に梁間2間（7.2m）を想定することは可能であり、棟通り心はN237.98に推測できる。東西築地回廊の心々距離は南面築地回廊と同じく、176.6m（590尺）に復原できる。ちなみに単位尺は29.9cmである。

iii 第Ⅲ期の遺構

SB7750B (PLAN 14, PL. 33・34) 6ABR—G, 6ABQ—D地区

第Ⅲ期の南門である。基壇の痕跡はないが、掘立柱痕跡をとどめる。5間（14.7m）×1間（5.4m）の東西棟建物。柱間寸法は桁行中央間3.9m（13尺）、脇間3m（10尺）、端間2.4m（8尺）と推定される。柱の掘形は方1m内外、深さ50cmで、径50cmの柱痕跡をとどめるほか、腐蝕の進んだ柱根をとどめるものがある。南面築地 SA3810B の北雨落溝 SD3778 の西端がロー柱の東1.8m（6尺）でとまる。

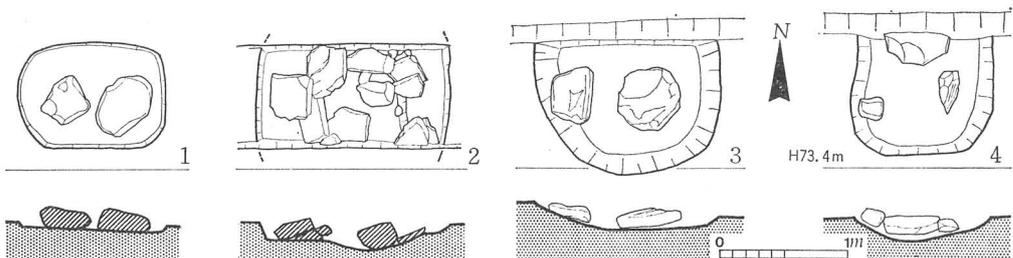
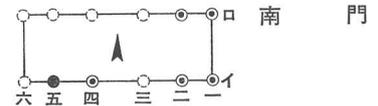


fig. 29 SC6670礎石据付痕跡

SA3810B (PLAN 2・8・14., PL. 26・27・34・35, fig. 27・30)
6ABR-G・P, 6ABQ-B・D地区

第Ⅱ期のSC3810Aを踏襲した南面の築地塀である。現在、土塁状の高まりをとどめる部分
南面築地 (黒色礫混り土)は中近世に盛りたしたもので、築地幅をしる手掛りをとどめていない。築地基壇は第Ⅱ期の回廊基壇を南北とも約4m縮め、幅5m程度の基壇に改修したようである。それは南北の雨落溝によって推測できる。北雨落溝SD7796は南門SB7750B棟通りの北側3mに位置する幅1m、深さ25cmの素掘溝で、部分的に護岸の安山岩列をとどめている。中軸線の東33mで南北溝SD7131とまじわる。南雨落溝SD7804はD地区で比較的良好にのこっており、やはり南門SB7750棟通りの南側3mに位置する同規模の素掘溝である。

脇門 SB7770 は中軸線の東27.1m (90尺)へだてて、SA3810の心に設けた1間の門である。柱間寸法は3.9m (13尺)。柱の掘形は方1m、深さ30cmで、径50cmの柱痕跡をとどめている。この柱位置によって築地心がきまる。

暗渠 築地の2箇所凝灰岩で組立てた南北暗渠を設けている。SD3815は東南の入隅付近にある暗渠である (fi. 30)。第Ⅰ期の礫敷面に達する幅1.7mの掘形をほり、内に凝灰岩の暗渠を組む。すでに南北の出入口は破壊され、長さ1.55mの部分をとどめるにすぎない。凝灰岩は基壇石を転用したもののように角に溝を刻むものをふくむ。底石(4枚)は方50cm、厚さ10cmの材である。側石(西側5枚、東側4枚)には長さ50cm、幅30cm、厚さ10~20cmの柱状石を主に用いる。蓋石(4枚)は長さ55cm、幅25cm、厚さ20cm程度のものを用いる。そして、内法で幅37cm、高さ27cmの暗渠を組立てる。掘形内は石屑や土器・瓦片をふくむ土で埋めもどしている。こうした残存部分は築地の北側にあるが、本来は基壇の全幅を横断していたものとみられる。南北溝SD7131の築地横断部分も暗渠SD7799がある。それはSD3815と同じつくりであり、築地心から南の部分がのこる。基壇石の転用材をふくむ側石と底石を6枚とどめている。

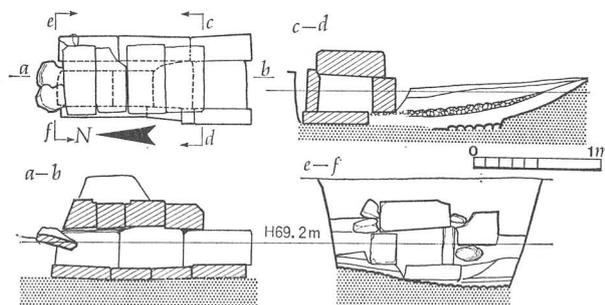
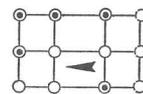


fig. 30 SD3815実測図

SB8310 (PLAN 10, PL. 76・77) 6ABP-B地区

東門 東面中央門である。2間(6.3m)以上×2間(5.4m)の南北棟建物。桁行の柱間寸法は中央間が3.9m (13尺)、北脇間が2.4m (8尺)で、梁間は2.7m (9尺)等間である。柱の掘形は方1mでのこりのよいところで深さ75cmあり、径35cmの柱痕跡がある。南脇間の柱穴は検出していないが、3間×2間の門とみてよい。3間の門とするとその南北心N157は南面築地の心から北105.1m (350尺)、推定北面築地の心から南80.98m (270尺)にあたり、宮殿地区の壇上に通ずることになる。なお、妻柱筋は東面築地SA3800A・Bの中心にあたる。また、イ二とハ三の柱掘形が第Ⅱ期のSC8360の礎石据付痕跡を掘込んでいるので、SC8360よりも新しいことがわかる。



SA3800A・B (PLAN 2・3・8~10・20~23, PL. 22・47~49・76・84, fig. 21・31~32)
6ABQ-A・B, 6ABP-A・B地区

SA3800Aは第Ⅲ期当初の東面築地である。第Ⅱ期の東面築地回廊をひきつぎ、回廊部分を撤去したのであろう。6ABQ-A・B地区においては土塁状の地物として現代まで残存してきた。遺構としては築地のほかに雨落溝・暗渠がある。築地の積土は比較的固く茶褐色を呈する砂礫土で、版築をしめす縞状の層序はみとめられず、第Ⅱ期の築地を踏襲したのか第Ⅲ期に築きなおしたかについては判然としない。そしてまた、崩壊土と本体との識別も困難である。全体に東側からの蚕食が著しいが、のこりのよいところでは1~0.6mの高さをとどめる。

この時期の殿舎地区6ABP-B区を横断する東西玉石溝SD6607は、築地部で暗渠SD8309と東面築地幅になって東方にながれるが、第Ⅱ期の築地東側柱筋で玉石溝がおわり、それ以东は暗渠にかえていいる。そして、SB8310の棟通り筋の西70cmのところに入頭大の安山岩がならぶ(PLAN20)。これが恐らく築地の地覆石になるのであろう。SB8310の北側には地覆石想定線上に、寄柱据付痕跡とみられる掘形が4間分(12m)のこっている。同様の例は東西塀SA6624の築地取りつき部でみられ、ここでは東西塀SA6624の柱掘形のうゑに重複して地覆石がならび、第Ⅱ期と同じく築地基底幅が1.5m内外であったことがうかがわれる(fig. 31)。

築地心の西2.6mに、西雨落溝SD8226が断続的にのこっている。大部分は幅60cm、深さ30cmの素掘溝であるが、安山岩の護岸をとどめるところもある。6ABP-A地区では雨落溝がL字状に折れて凝灰岩暗渠SD8227で築地をくぐりぬけている。それは幅1m、深さ40cm程の掘形に凝灰岩板石を組立てて暗渠にしたもので、現状では長さ1mにわたって底石3枚と側石6枚をとどめ、工法は南面築地の場合と同じである(fig. 32)。

6ABP-B地区の犬走り上に、一種の暗渠施設SX8332がある。平瓦7枚を凹面を上にして南北方向にならべ、その上に丸瓦6枚をつないでふせたもので(長さ2.27m、幅30cm)、これにとりつく溝などは検出していない。築地に設けた門にかかわる施設であろうか(fig. 33)。この時

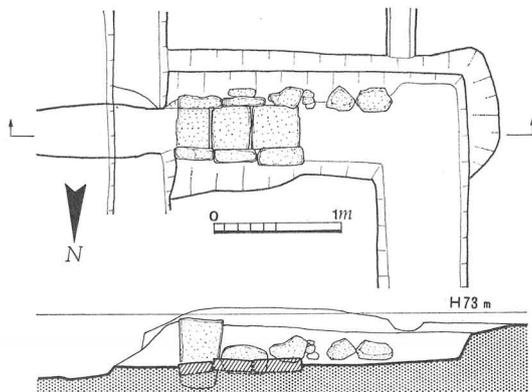


fig. 32 SD8227実測図

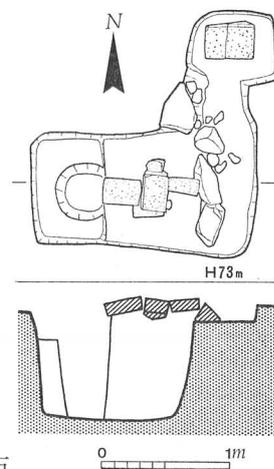


fig. 31 SA3800の地覆石

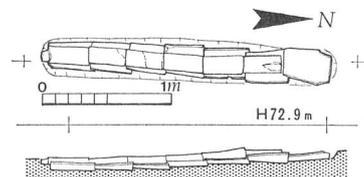


fig. 33 SX8332実測図

2 遺 構

付 属 屋 期に必ずしも限定できないが、築地に添って建つ付属屋がある。6ABD—C地区にある南北棟建物**SB9216**は、4間(10.8m)×1間(3m)で小柱穴の柱間寸法は2.7m(9尺)である。6ABP—B地区にある**SB8242**は人頭大の安山岩を礎石にしたもので、7間(10.7m)×1間(1.5m)に復原でき、柱間寸法は不揃いだが1.5m内外となる。

以上のことから、東面築地 SA3800A は第Ⅱ期と同じく南北築地の心々距離が186.08mであり、中心に基底幅1.5m(5尺)の築地を築き、その左右に2.1m(7尺)の犬走りをつけて、雨落溝を設け、犬走りには小規模な付属屋が設けられていたことが想定できる。

土 壘 SA3800B は築地の崩壊後に土塁に改変したもので、6ABD—A・B地区において観察できた。すなわち、築地本体および崩壊土の両側に土を積みたして、断面がカマボコ形を呈する基底幅4.5m、現状での高さ90cmの土塁に修築している (fig. 21-3)。

SA7223, SA7224, SA7225, SA6635 (PLAN 27・32, PL. 60) 6ABP—A・G地区

目 隠 堀 北面築地は未掘であり、第Ⅱ期の築地をうけつぐものと想定せざるをえないが、**SA6670B**の番号を与えておく。ただし、北面築地にとまなう遺構は検出した。SA7223, SA7224, SA7225はいずれも中軸線 W267.0をまたぐ木堀で、柱穴が小さなことから仮設的なものとみられる。SA7223は2間(7m)、SA7224は3間(9m)、SA7225は2間(6.6m)であり、第Ⅲ期北門の目隠堀とみられる。SA6635は北面築地の東半部中央にある3間(8.5m)の堀。北門の目隠堀にくらべて柱穴は大きく、方50cmの掘形をもつ。第Ⅲ期北面東門の目隠堀であろう。

B 殿舎地区

第1次大極殿地域の北辺、東西約110m、南北約90mの範囲(6ABP区)を殿舎地区とよぶ。この地区は、調査前から南に接する広場地区よりも約1.5~1.8m高い壇状を呈しており、そのうえで多数の建物を検出した。壇は地山を削りだして造成した創建時のものと、後に南方へ拡張した新しい時期のものが重複しており、現地形は拡張以後の地形にしたがっている。

壇の上面には黄褐色を呈する小礫を一面に敷きつめ、この整地面から建物等の遺構を検出している。ここでは創建時の遺構を第Ⅰ期にあて、拡張以後の遺構を第Ⅱ・Ⅲ期とした。第Ⅱ期と第Ⅲ期の区別は遺構の重複関係や計画性によって行なう。以下、検出した遺構を第Ⅰ~第Ⅲ期に大別し、それぞれの時期にぞくする遺構をまとめて説明することにする。

i 第Ⅰ期の遺構

SX6600 (PLAN 2・3・25・29, PL. 43・44・61・62・75, fig. 34・35)
6ABP—B・D, 6ABQ—A地区

赤褐色粘質土の地山、つまり舌状に南へのびる奈良山丘陵の一支脈の末端を東西一直線に切り崩し、上部を削平して広大な壇(約200a)をつくる。壇の前面は第1次大極殿地域の中心軸線 W266.9から東へ49.2mのび、この地点から内角117度5分の角度で東南に折れ、10.9mのびたところでまた30度ほど北に折れ曲る。第2の折曲点から12.4mのびたところでまっすぐ南に折れ曲り、16.2mのびてとまる。壇の前面は約70度前後の傾斜面をなし、外面に埴積みの擁壁を築いている。

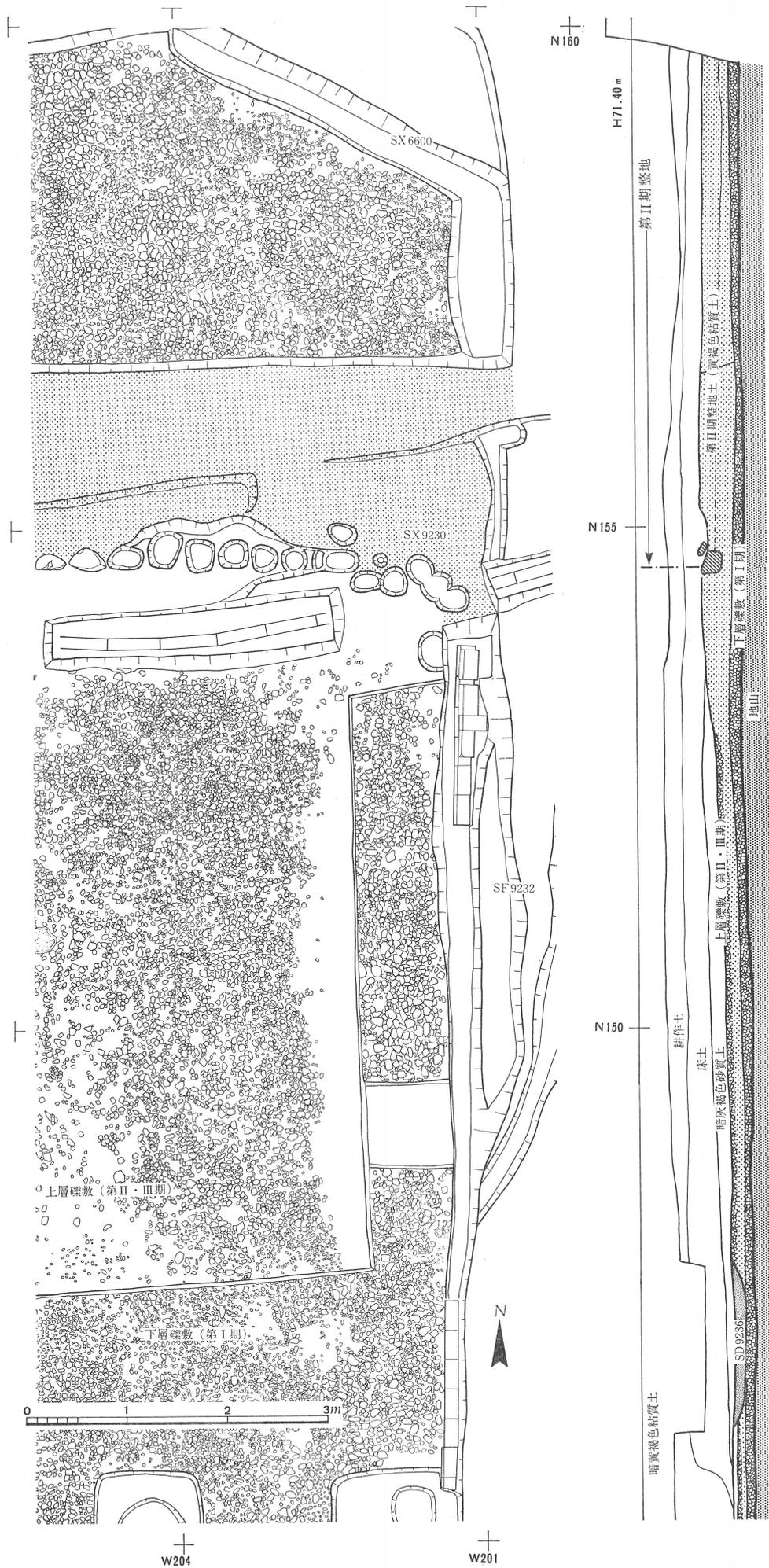


fig. 34 SX6600 と SX9230 の重複

第三章 遺 跡

塼の積み方 塼積擁壁は第Ⅱ期の拡張時にとりはずされ、大半のところでは下部の1・2段をのこすか、抜取痕跡しかとどめていない。6ABP—D地区では、3mにわたって7段の塼積みをとどめていたが、それがもっとものこりのよい部分であった。塼積みは長方形塼の長側面を外に向けて平積みにしたもので、工字形の目地を呈している。地山の壁体にもたせかけるようにして積んでいるが、最下の平坦面と裏側に粘土を薄くつめるほか、塼と塼の間に粘土などをはさむことはない。折曲点における積み方は、塼が抜き取られているか一段しかのこっていないので、不明である。ただし、南進する6ABQ—A地区では短側面を外に向ける塼が1個あった。長さをそろえるためであろうか。6ABP—D地区では、塼積み前方に5cmの間隔をおいて幅8cm内外の溝SD6602があり、その長さは約21mに達している。これを塼の据付痕跡とするならば、擁壁の基部に地覆状の塼積みをくわえたことが想定される。

磔敷 塼積擁壁の南側は厚さ5~10cmの磔敷面となり、その上面に崩れた塼片や若干の土器類、瓦片などが散布していた。壇の高さはのこりのよいところで1.85mをとどめるが、本来は2mをこえるものとおもわれる。6ABP—B地区における第3の折曲点以南は次第に低くなって、壇下の広場に通じる。この東面する塼積壁と築地回廊の間が、一種の斜道SF9232Aとなる(fig. 34)。その東限を仮りに東面築地回廊SC5500の西雨落溝SD3790にあてるとするならば、幅員は16m程度であり、かりに壇の高さを標高72.4mとして、SF9232Aの南側磔敷の標高70.6mを差引くと、比高が1.8mとなるゆるやかな斜道を想定できる。

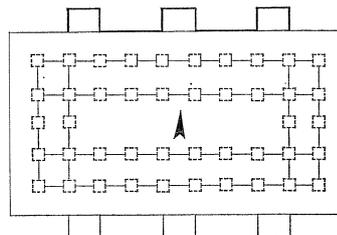
SX6601 (PLAN 29, PL. 63・64, fig. 35) 6ABP—D地区

掘立柱階段 塼積擁壁SX6600直下のバラス敷を除いて検出した東西2間(5.5m)、南北1間(1.69m)の掘立柱階段である。擁壁に接する北側の柱穴は、方80cm内外の掘形に径約40cmの柱痕跡をとどめる。掘形の北辺は塼積擁壁の下にあり、塼を積上げる前に柱が立ったことをうかがわせる。南の柱掘形は長方形(0.6×1.6m)を呈し、その北辺に径26cm内外の柱痕跡をのこし、中央柱穴の左右におのおの小柱穴をとまなう。中央の柱位置は中軸線にのっており、階段の遺構とみられる。ただし、塼積擁壁に木製階段がそぐわないことや、磔敷面から柱痕跡がたどれなかったことからすると、建設時における仮設的な木製階段であった可能性もある。なお、発掘時においてこの部分の埋土が左右よりも固かったことからすると、木階の廃絶後に土を心とする階段を設けたこともかんがえられる。しかし、それを積極的に証明するほどの遺構ではない。



SB7200 (PLAN 3・31・32, PL. 68, fig. 36) 6ABP—F・G地区

大型建物 基壇石の抜取痕跡によって推定される大型の建物である。北面の地覆石抜取痕跡SD7165は、6ABP—G地区の南寄りにある幅1.1m、深さ10cm内外の浅い東西溝で、中央とその左右の3箇所以北に向ってコ字形に突出している。溝の深さは場所によって若干ことなるが、底はおおむね平坦である。この溝の南寄り部分の堆積土が暗黄色粘土に微量の瓦片や小磔あるいは凝灰岩片を含んでいるのに対して、北半部は黄褐色粘質土で雑物をふくまない。両者の違いは必ずしもはっきりしないが、後者が前者に掘込んでいることはあきらかである。このことから、後者が凝灰岩の基壇地覆石を掘えつけたときの遺構であり、前者が地覆石を抜取っ



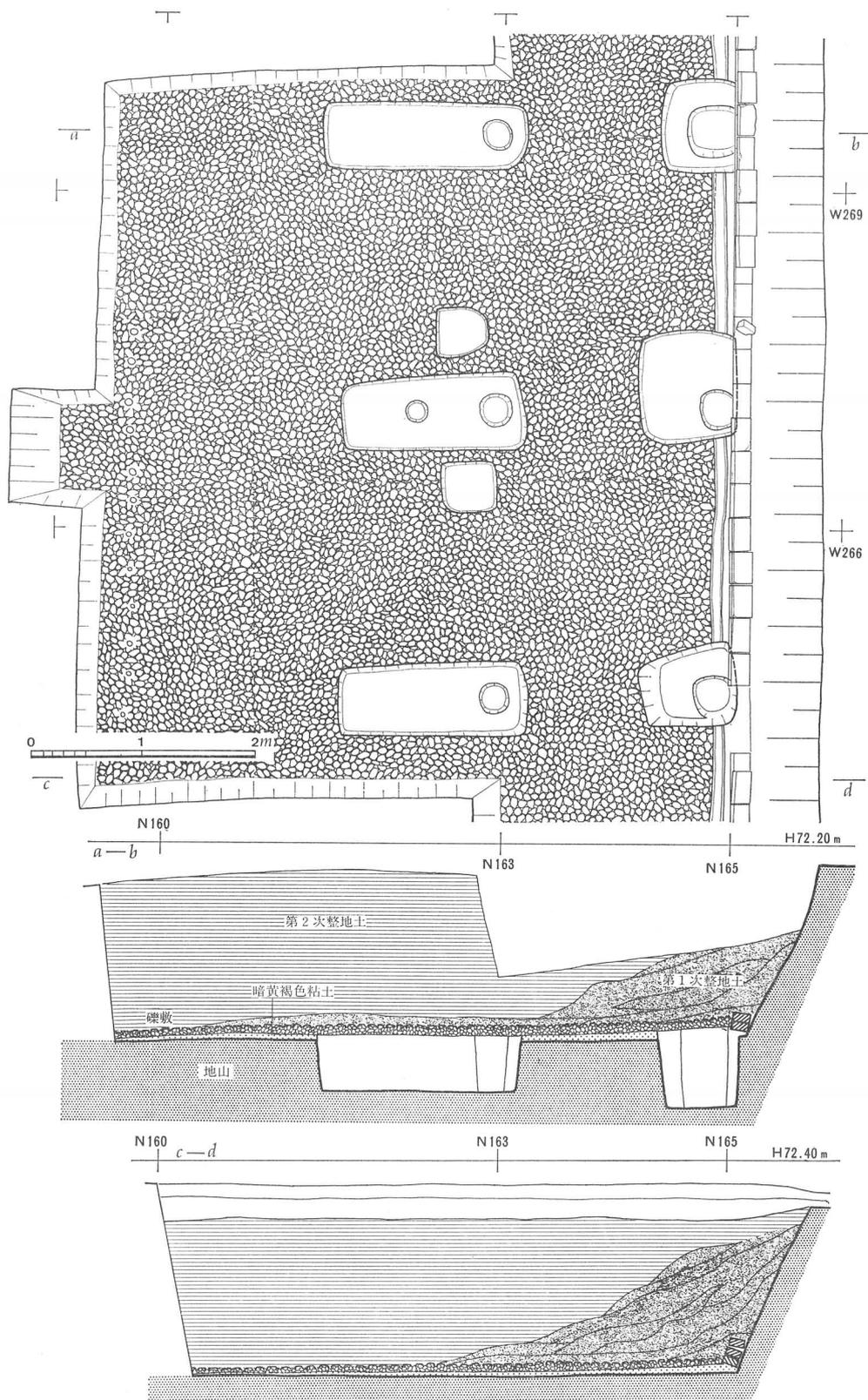


fig. 35 SX6600 と SX6601 の埋立状況

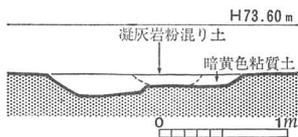


fig. 36 SD7165の断面

たときの痕跡であることがわかる (fig. 36)。突出部の幅約 5 m, 出約 3.5 m で, 中央と左右の心々距離は約 15 m となり, 突出部は階段の痕跡とみられる。なお, 中央階段の心は中軸線 (W267.0) と一致している。

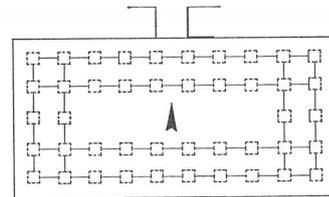
北面の地覆石採取痕跡から 28.5 m に南面地覆石の据付痕跡 **SD7167** がある (6ABD-F 地区)。幅 1.2 m の東西溝だが, のこりがわるく中央から西へ 7 m 程度しか残存しない。北面の SD7165 にくらべて浅く, かつ第 II・III 期の建物 SB7151, SB7178 の大型柱穴が掘込んでいるため詳細が不明である。この溝の南側にある幅 11 m, 出 3.5 m のコ字形溝は, 南面の階段痕跡であろう。

わずかにのこった痕跡から, 東西長 35 m 以上, 南北幅 29.5 m の基壇には, 階段幅から類推される桁行柱間寸法 5 m (17 尺) の建物がたっていたことになる。わずかにえられた数値は恭仁宮大極殿とよく類似している¹⁾。後述するように S B7200 を恭仁宮へ移建した平城宮大極殿にあててみるが, 建物の平面プランは恭仁大極殿よりも一回り大きくなる。その場合, 建物規模はつぎのように想定できる。桁行 9 間 (45.1 m), 梁間 4 間 (20.7 m) の四面廂付建物で, 柱間寸法は身舎の桁行 17 尺 (5.0 m) 梁間 18 尺 (5.3 m) とし, 廂の出は 17 尺 (5.0 m), 基壇の大きさは 53.1 m (180 尺) × 29.5 m (100 尺) に復元できる。この場合の単位尺は 29.5 cm である。

SB8120 (PLAN 2・34, PL. 91) 6ABO-E・J 地区

『平城宮報告 II・IV』で報告したところであるが, 6ABO-J

地区には北面築地回廊南雨落溝 SD130 と L 字形につながる石敷溝 **SD244** とその下層の東西溝 **SD242** がある。SD244 は回廊の雨落溝の場合と同じく, 大粒の礫を敷き見切りの石をならべ外方が小粒の礫敷面となる。石敷溝の西縁は中軸線の東



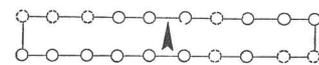
2.2 m で SD130 の南縁から 5 m 南へのびて, 東へ折れる。SD244 の西側の対象位置は土壌 SK 8118 によって破壊されているが, 同様の施設をかんがえることは可能である。このことから SD130 にとりつく SD244 と SD242 は回廊北門に至る軒廊基壇 (幅 4.4 m) の地覆石据付痕跡と雨落溝に推定できる。

東へ折れた SD244 は約 3 m のびたところで土壌 SK8079 によって破壊されている。しかし, E 地区の南辺, 中軸線の東 25 m のところに南北石敷溝 **SD8103** がある。SD8103 は長さ 1.4 m しか検出していないが, SD244 と同様の溝であり東側に礫敷面がひろがるので, SD244 と SD8103 を雨落溝とする建物基壇が想定できる。仮りにこの建物が前方の SB7200 と桁行の柱間寸法をえる揃桁行 9 間 (45.1 m) とするならば, 基壇の出は 2.3 m (8 尺) ほどとなる。一方, 梁間については手掛りを欠くが, SB7200 と同じく 4 間 (20.7 m) とし, 基壇の出を 8 尺 (2.3 m) に想定しておく。この場合, 基壇の大きさは 49.7 m × 25 m となる。

SB6680 (PLAN 29, PL. 52) 6ABP-D 地区

SB7200 の南側にある 9 間 (45.3 m) × 1 間 (6 m) の東西棟建物。

桁行の柱間寸法は東から 2・5・8 間目を 5.5 m (18 尺) とし,



他を 4.8 m (16 尺) とする。柱の掘形は方 80 cm 内外で, 第 II 期建物 SD6611 の柱掘形によって破

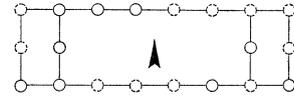
1) 中谷雅治ほか「恭仁京跡昭和 52 年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委

員会, 1978, p. 24

壊されている。中央間とその2間おいた両脇間の柱間寸法はSB7200の面北階段幅と同じであり、位置もそろう、ある時期のSB7200の南面には3道の階段があったことが類推できる。この建物は柱掘形が小さいので仮設的な建物であろう。

SB6605 (PLAN 29, PL. 52) 6ABP-D地区

SB6680と重複する7間(21m)×2間(6m)の東西棟建物で、東西に廂がつく。第Ⅱ期建物SB6611および第Ⅲ期建物SB6620の柱掘形によって著しく破壊されており、柱掘形の片鱗しかと

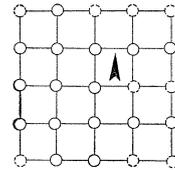


仮設建物

どめない。柱間寸法は必ずしも正確でないが、桁行・梁間とも3m(10尺)等間である。柱の掘形は方1.2mでSB7200の南面階段位置に重複しているので、第Ⅰ期のなかでも新しい時期に位置づけられよう。

SB6636 (PLAN 29, PL. 52) 6ABP-D地区

SB7200の東南に位置する4間(11.8m)×4間(11.8m)の総柱遺構。柱掘形は60×80cm内外と若干小さい。この場合、建物の上部構造については二通りのかんがえ方がある。その1はたとえば舞台のような仮設物に想定する。その2は足場とかんがえて3間(9m)×3間(9m)、10尺(3m)等間の礎石建物を想定する。いまのところいずれともきめがたい。第Ⅱ期の建物SB6611と第Ⅲ期の建物SB6620の柱掘形が掘込まれている。



総柱遺構

SB6643 (PLAN 29, PL. 52) 6ABP-D地区

SB7200の西南に位置する4間(11.8m)×4間(11.8m)の総柱遺構。北西部は未調査区にのびる。柱穴の大きさはSB6636と同じであり、同様の3間(9m)×3間(9m)の総柱遺構が想定できる。SB6636とは中軸線をはさんで対称位置にあり、両建物はSB7200の殿前に建つ舞台ないしは亭の類であろう。

SB7164 (PLAN 32, PL. 67) 6ABP-G地区

SB7200の西階段の北側にある小建物。2間(4.9m)×2間(5.9m)であり、柱間寸法は南北が2.95m等間であるのに対して、東西では3.4m+1.5mと不揃いである。柱穴も小さく、建設時の仮設建物であろうか。第Ⅱ期の建物SB7152の柱掘形が掘込まれている。



仮設建物

ii 第Ⅱ期の遺構

この時期の建物群は、中軸線W297の上に軸線をそろえる中央建物群、その東方にあって東西棟建物を主とする東第1建物群、さらに東方にあって南北建物を主とする東第2建物群の3列に大別することができる。

SX9230 (PLAN 17, PL. 43・44, fig. 34・35) 6ABQ-A地区

殿舎地区の壇を南へ拡張したときの石積擁壁である。この部分は近世の地下げが著しく、かつ現在構内道路敷として利用しているので、約9mの範囲しか調査していない。

石積擁壁

拡張部分は第Ⅰ期の礎敷面上に厚さ15cm内外の黄褐色粘質土をしき、第Ⅰ期の磚積擁壁から18.3m南(N144.5)のところに東西方向に人頭大の安山岩をすえつける(fig. 34)。安山岩は最下部1段のうち4個しか残存せず、他は安山岩の抜取痕跡によってその存在をしる。東端入

埴積擁壁の埋立

隅部分はわずかに南に曲って第I期の埴積擁壁にとりつく。6ABP-B・D地区における埴積擁壁SX6600廃棄後の埋立て状況をみると、壁面に近いところでは礫敷面の上に瓦埴や土器片を混える暗褐色粘質土があり、小礫混りの土が瓦層になって南へ低く堆積する。まさに上方から土砂を崩しおとした状況である。この埋土が壇の上端ないしはそれに近いところに達すると、その上部に粘りのない黄褐色の埋土が一様にひろがる (fig. 35)。埋土には若干の礫をふくむだけで、遺物をふくまず、層状にわかれぬ。一気に埋立てたのである。

6ABQ-C地区の北辺に凝灰岩片がかたまて散布するところにSX7138があり、擁壁に凝灰岩を用いた部分もあったとおもわれる。石積擁壁の高さは不明だが、後方の遺構状況からすれば1.8~2mの高さを想定しなければならない。

南の広場から壇にのぼる斜道SF9232Bは第I期の規模を継承するが、すでに路肩の埴はぬかれており、土坡のような状況であつたらう。

SB6610 (PLAN 29, PL. 50~54・65) 6ABP-D地区

中央建物群の前面に位置する9間(26.85m)×4間(11.95m)で総柱の東西棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに10尺だが、基準尺は桁行で29.99cm、梁間で29.83cmとなる。方1.5m内外、深さ1m内外の柱掘形に径50cm程度の柱痕跡をとどめる。なお、南側柱列と石積擁壁SX9230との距離は13.4m(45尺)となる。

SB6611 (PLAN 29, PL. 50~54・65, fig. 37) 6ABP-D地区

中央建物群の南から2棟目にある9間(26.85m)×3間(8.95m)で3面に廂がつく東西棟建物。南廂は1間だが、東西の廂は2間である。柱間寸法と柱穴の状況はSB6610と同じで、柱筋も一致し、2棟の建物は2.98m(10尺)しか離れていない。身舎の中央柱筋に小柱穴(掘形70×50cm, 柱痕跡径30cm)がならび、床のあつたことがわかる。この建物の直上に第III期の建物SB6620がかさなり、多くの柱穴が破壊されている (fig. 37)。

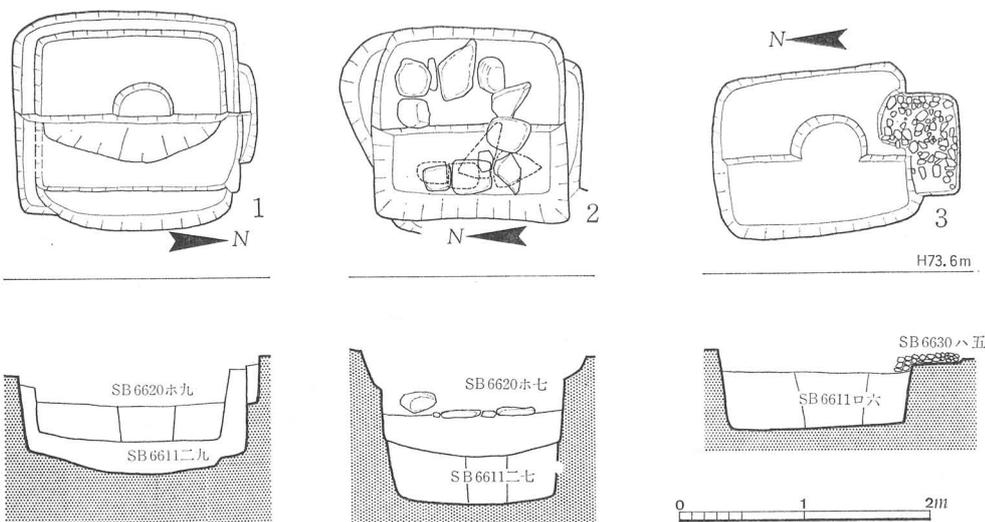
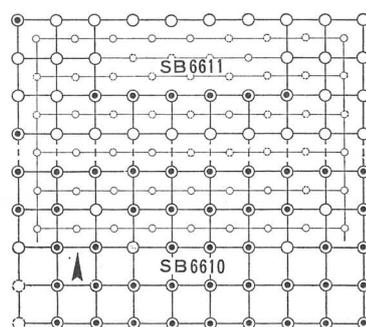
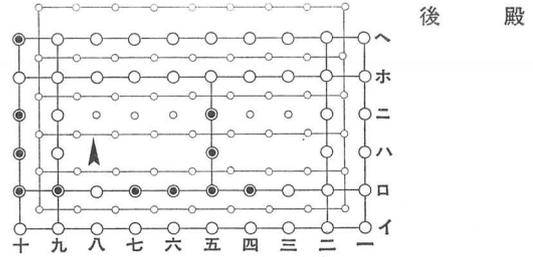


fig. 37 SB6611とSB6620・SB6630柱掘形の重複

SB6610とSB6611の柱間をぬって8間(23.8m)×5間(15m)の総柱遺構SS6642があり、足場場に想定できる。柱間寸法はおおむね3m(10尺)内外だが不揃いである。方55cm、深さ20cm内外の柱掘形に径25cm程度の柱痕跡をとどめるものもある。SB6610の南3間分については著しく削平されており、柱穴が消失したものとみるならば、当然SB6610とSB6611は一連の建物として建設されたことになる。

SB7150 (PLAN 31, PL. 65・66) 6ABP-F地区

中央建物群の南から3棟目に位置する。9間(26.8m)×5間(15m)で、梁間3間の身舎の4面に廂がつく東西棟建物。柱間寸法は10尺(桁行2.98m, 梁間3.0m)の等間である。柱掘形や柱痕跡の状況はSB6610と同じ。身舎のハ五、ニ五に梁間を3間にわける柱穴がある。この2個の柱穴掘形は1.5×0.6mの長方形を呈し、柱痕跡も径



40cmなので身舎の間仕切柱であろう。また、身舎のニ通に7間分の小柱穴があるが、これは床束の東柱穴とおもわれる。ただしその対称位置の南妻柱筋には小柱穴を検出していない。北側柱の外側2.5mの位置に柱筋をそろえる柱列がある。縁東ないしは階段の遺構であろう。

SS7185はSB7150の足場である。8間(24.7m)×5間(16.05m)分の総柱遺構で、方40cm内外の小柱穴からなる。南に接するSB6611とは29.6m(10尺)しか離れておらず、足場を別にするとはいえ、一連の建物であったことがうかがえる。この建物の南側柱列には第Ⅲ期の建物SB6620、東西の入側柱列にはSB7173とSB7172の柱掘形がそれぞれ掘込まれている。

SB7151A・B (PLAN 32, PL. 67・69, fig. 38) 6ABP-G地区

SB7151Aは中央建物群の南から4棟目の建物である。SB7150の北側5.92m(20尺)をへだてて位置する9間(26.9m)×2間(5.9m)の東西棟建物。柱間寸法は10尺(桁行2.99m, 梁間2.95m)等間である。柱掘形(方1.5m内外、深さ1.2m)には、径50cm程度の柱抜取痕跡がある。南側柱列の柱穴に第Ⅲ期の

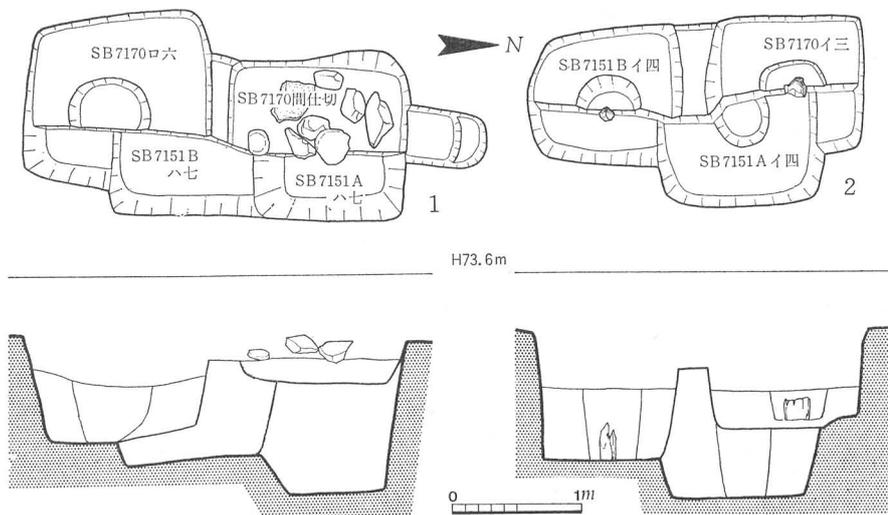
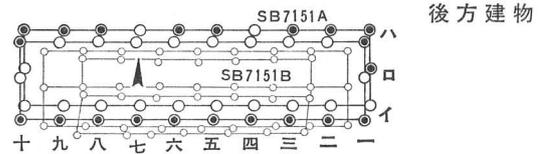


fig. 38 SB7151A・B柱掘形の重複

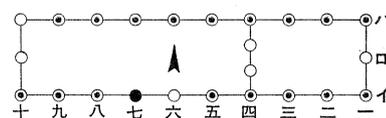
第三章 遺 跡

古い足場 建物 SB7170 の柱穴が掘込まれている。**SS7161**は SB7151A の足場で、身舎から南側柱列をはさんで 8 間 (23.8m) × 2 間 (5.8m) の小柱穴列 (方40cm) を配する。

SB7151B は SB7151A を約 60cm 南へ寄せて建替えたもの。9 間 (26.9m) × 2 間 (5.9m) で、柱間寸法は桁行・梁間とも 2.97m (10尺) 等間。柱の掘形は方 1.5m で、柱根をのこす柱穴が 5 個あり、うちのこりのよい北側柱東端の柱根の径は 30cm である。**SS7120** は SB7151B の足場で、多少不揃いだが、身舎から南側柱列をはさんで 6 間 (20.85m) × 2 間 (5.9m) の小柱穴列 (方 30cm) を配している。SB7151A・B の柱穴に第 III 期の建物 SB7170 の柱穴が掘込まれている。

SB7152 (PLAN 32, PL. 66~69) 6ABP-G 地区

後方建物 中央建物群の南から 5 棟目の建物である。SB7151A の北側 5.9m (20尺) をへだてて位置する 9 間 (26.7m) × 2 間 (5.94m) の東西棟建物。柱間寸法は 10尺 (2.97m) 等間で



ある。柱掘形は方 1.4m、深さ 1.1~1.3m を呈し、柱穴イ七に径 44cm の柱根をのこす。桁行の四通の柱筋に小柱穴 (方 50cm) 2 個をもうけ、梁間を 1.47m (5尺)、3m (10尺)、1.47m (5尺) に分割している。間仕切りの柱であろう。ただし、身舎の柱筋とそろっていないので、改修時のものかもしれない。**SS7227** は SB7152 の南側 2.5m のところにある足場。8 間 (23.9m) の小柱穴列 (方 35cm) である。

SD6608 (PLAN 25~27, PL. 54・65・68・69・70) 6ABP-D・F・G 地区

石敷溝 中央建物群の東 2.8m をへだてて流れる石敷の南北溝 (全長 66.5m)。北方の SB7152 の東側で破壊されて痕跡をとどめないが、南端は東西溝 SD6609 につながって東へ流れる。幅 1.1m 程度の掘形に、幅 45cm 内外に敷詰めた安山岩の石敷が部分的にのこるだけで、側石は撤去されている。石敷には 30 × 20cm 程度の扁平な安山岩を主に用い、部分的に凝灰岩や埴片を敷くところもある。底石の高さは北端 (標高 73.18m) にくらべて南端 (標高 72.65m) のほうが低く、北から南へ流れていたことがわかる。

G 地区では第 I 期の基壇地覆石据付痕跡 SD7165 を掘込んでおり、17.3m にわたって溝の幅が 1.8m に広がっている。F 地区では第 II 期の建物 SB6650 の柱掘形を掘込んでおり、建物の建築後にこの溝が設けられたことがわかる。また、第 III 期の足場が掘込まれており、第 III 期には下らない。D 地区では第 I 期の足場 SS6636 がこの溝底から検出された。

SD7163・SD6618 (PLAN 27・23・32, PL. 58・69・83) 6ABP-A・G 地区

東西素掘溝 SD7163 は SB7152 の北 1.9m をへだてて流れる素掘りの東西溝。幅 30~60cm、深さ 4cm。東方は削平されて消失するが、約 25m 東で検出している東西溝 SD6618 につながるとみてよい。西端は発掘区西辺で南に折れ、南北溝 SD7162 につながる。SD6618 の東端は同時の建物 SB8215 の北東で南に折れて SD8211 につながる。なお、南北溝 SD6608 の北端がこの溝と T 字形に交る可能性が大きい。直上に第 III 期の東西塀 SA6626 の柱穴が掘込まれている。

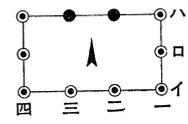
SD7162 (PLAN 32, PL. 69) 6ABP-G 地区

南北素掘溝 SB7152 の西妻柱列の西 1.8m をへだてて流れる素掘りの南北溝。幅 50cm、深さ 7cm、長さ 10.1m。この溝と東西溝 SD7163 とは中央建物群の北辺を画する役割りをはたすとともに、SB7152 の雨落溝をかねている。SD7163 の西端よりも SD7162 の南端のほうが 18cm 深く、かつ SD7163 は発掘区外の西方に流路をかかえるようであるから、西南方に排水したことがわかる。

2 遺 構

SB6640 (PLAN 25, PL. 54) 6ABP-B・D地区

中央建物群と東第1建物群との間に介在する3間(10.8m)×2間(6m)の東西棟建物。柱間寸法は桁行が3.6m(12尺)等間。梁間は3m(10尺)等間。柱の掘形は方1.2m、深さ1m内外。北側柱の2柱穴に柱根があり、のこりのよいもので径33cmである。南側柱列の柱穴は他よりも50cmほど深く、凝灰岩や磚などを礎板に用いている。このあたりは埴積擁壁SX6600の埋立地で地盤が弱かったからだろう。



東 渡 り 廊

北側柱列中央柱間に溝状の掘形(幅92cm、深さ30cm内外)がある。左右の柱掘形よりもさきに掘られているが、柱筋に一致しているのでSB6640の付属施設に想定した。この建物は西側のSB6610の中央間2間および東のSB6660A・Bの身舎と柱筋をそろえており、さらに両建物とそれぞれ10尺しかへだたっていないことから、2棟の建物をつなぐ廊のような役割りををはたすものとおもわれる。イ二柱掘形に第Ⅲ期の建物SB6622の西廂の柱掘形が掘込まれている。

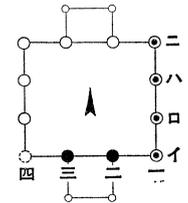
SD6609 (PLAN 25, PL. 54) 6ABP-B・D地区

SB6640の北2.1mを流れる石敷の東西溝。西は南北溝SD6608につながり、交叉点から東2.5mまでは扁平な安山岩を敷いた底石をとどめるが、それ以东は敷石の抜取痕跡(幅70cm)によって、長さ13m程度の流路があったことがわかる。東端は漸次消失するが、SB6640とSB6660との間を南下するのだろう。

東 西 溝

SB6650 (PLAN 26, PL. 57・65) 6ABP-A・F地区

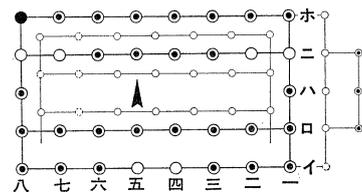
中央建物群と東第1建物群との間に介在する3間(10.8m)×3間(9m)の建物。柱間寸法は桁行3.6m(12尺)等間、梁間3m(10尺)等間である。柱の掘形は方1.4m、深さ0.75~1.26mで、柱抜取痕跡があり、イ二柱穴には抜きえなかった径36cmの柱根がある。南北中央間の外側(南3.3m、北2.4m)に一對の小柱穴(70×50cm)があり、木の階段がつき床が張られていたことがわかる。さらに、南階段柱の前1.1mのところ3個の凝灰岩切石(方30cm)が並び、基壇もしくは水路の存在を予想できる。第Ⅲ期の建物SB7173の柱掘形がニ二の柱穴を掘込んでいる。この建物は梁間の柱筋がSB6640とあい、かつ西側のSB7150の身舎および東側のSB6663の身舎とそれぞれ10尺をへだてて柱筋をそろえており、左右の建物をつなぐ役割りをもつものとおもわれる。



東 渡 り 廊

SB6660A・B (PLAN 25, PL. 55・56, fig.40) 6ABP-B地区

SB6660A・Bは東第1建物群の南端に位置する7間(21m)×4間(12m)で、南北2面に廂がつく東西棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに10尺(3m)等間である。柱の掘形は方1.5~1.7m、深さ1.7~0.92mで、柱根あるいは礎盤に用いた凝灰岩や木材をとどめるものがあり、のこりのよい柱根は径30cmであった。



東 脇 殿

東妻柱列の東2.4m(8尺)をへだてて小柱穴列(方50cm)がある。妻柱筋と柱をそろえているので縁東の痕跡とみられる。縁東の東2.65mのところ身舎と柱筋をそろえた2間分の小柱穴(掘形1.15×0.6m)があり、木階段があったことがわかる。階段の柱掘形の深さは35cmだが、柱位置だけを15cmほどふかくしている。第Ⅲ期の建物SB6622の柱掘形がイ、ロ、ニ列の柱掘形

縁東と階段

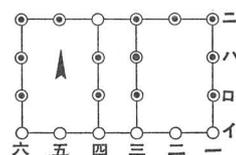
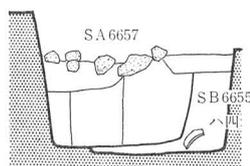
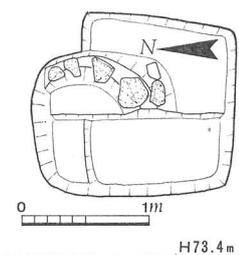
第三章 遺 跡

足 場 を掘込んでいる。**SS6615A**はSB6660Aにともなう足場で、SB6660Aの身舎から北廂にかけて、6間(22.4m)×2間(6.2m)の小柱穴列(掘形は方35cm)がある。南側はすでに削平されたものとみられる。

増 築 SB6660BはSB6660Aの北廂にもう1間(3m)の孫廂をつけたしたときの建物。柱の掘形は方1m,深さ70cm。へ四・へ五・へ六柱穴の北1.5mのところ(2間分)の小柱穴(掘形は方30cm)があり、縁東の柱穴にかんがえられる。**SS6615B**はSB6660Bの孫廂にともなう足場で、5間(15m)分の小柱穴(掘形は方35cm)が廂の北寄りにならぶ。

SB6655 (PLAN 28, PL. 55・56, fig. 39) 6ABP-B地区

東 脇 殿 東第1建物群の南から2棟目の建物。5間(15.0m)×3間(9.0m)の東西棟建物で、四・五通の梁間をそれぞれ3間にわけている。柱間寸法は桁行・梁間とも10尺(3m)等間である。柱の掘形は方1.3m,深さ0.7~1.2m



で、径50cmの柱痕跡がある。南のSB6660Aと北のSB6663とは柱筋をそろえ、それぞれ10尺の(3.0m)間隔をおく。この建物は3間×2間の南北棟建物2棟を並置したものとみられるが、東第1建物群の他の建物がすべて東西棟建物であることからすれば、身舎内の柱穴は一種の間仕切柱になる。南側柱列の柱穴がSB6660Bの孫廂柱穴によって掘込まれていることから、SB6660Bの増築時にこの建物は撤去されていたことになる。また同様に、第II期の改築につくられた南北塀SA6657の柱掘形へ四・へ二の柱穴が掘込んでいる。

fig. 39 SB6655柱掘形の重複 柱穴が掘込んでいる。

SA8304 (PLAN 28, PL. 56) 6ABP-B地区

SB6655の東妻柱列の東2.7mに位置する3間(8m)の小柱穴。柱間は2.4~2.7m(8~9尺)と一定せず、SB6655にともなう一時的な遮蔽物である。

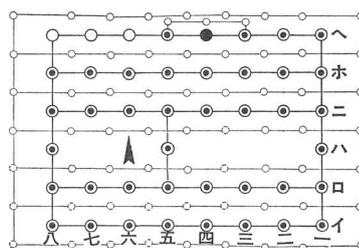
SA6657 (PLAN 28, PL. 56, fig. 39) 6ABP-B地区

目 隠 塀 SB6655の四通の柱掘形に掘込む2間(4m)の南北塀。柱の掘形は方90cm,深さ75cm,掘形の埋土に凝灰岩や瓦片を多くふくむ。SB6655の廃絶後、南のSB6660Bと北のSB6663との間につくった目隠塀である。

SB6663 (PLAN 26, PL. 57) 6ABP-A地区

東 脇 殿 東第1建物群の南から3棟目の建物である。7間(20.9m)×5間(15.3m)で、南北2面に廂がつく東西棟建物。柱間寸法は10尺(桁行2.99m,梁間3.06m)等間である。柱の掘形は方1.6m,深さ1m内外,径40cmの柱根をのこすものもある。この建物は一見すると身舎7間×2間の北側に廂・孫廂をつけたように見える。し

かし、この場合の廂柱列にあたる柱掘形は他に比べて小さく、かつ浅く(方1.2m,深さ70cm),また後述の身舎梁間の足場痕跡が10尺方眼になることからすれば、7間×3間の身舎を南北に画する間仕切りの柱列にかんがえたほうがよい。また、五通の梁間中央にも間仕切の柱穴が



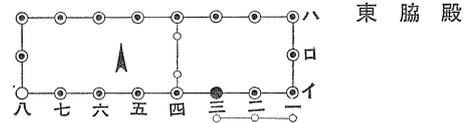
2 遺 構

ある。へ三・へ四・へ五の柱穴の外側2.1mに小柱穴（60×40cm）があり、ここに階段がもうけられたことがうかがわれる。なおこの小柱穴には3回の掘りかえがみとめられる。

SS6661はSB6663にともなう足場で、8間（27.3m）×6間（20.8m）の小柱穴（方50cm、深さ20cm）の総柱遺構である。柱間寸法はかならずしも厳密でないが、桁行では両端の2間を4.5m（15尺）とし、そのほかを3m（10尺）にしている。梁間では側柱列から身舎の心にむかって3.9m（13尺）、3.6m（12尺）、3m（10尺）と次第に柱間をせまくしている。

SB6666 (PLAN 26・27, PL. 58) 6ABP-A地区

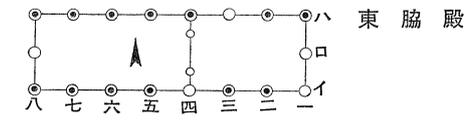
東第1建物群の南から4棟目の建物で、南のSB6663とは5.85m（20尺）の間隔をおいて柱筋をそろえ、西方のSB7151Aとも17.8m（60尺）をおいて柱筋をそろえている。7間（20.8m）



×2間（5.9m）の東西棟建物。柱間寸法は10尺（桁行2.97m、梁間2.95m）等間である。柱の掘形は方1.4m、深さ1.1m内外で、径30cmの柱根をとどめるものもある。柱抜取痕跡には人頭大の安山岩をつめるところがある。四通の梁間に2小柱穴（方70cm）を配し、梁間を1.5m（5尺）、3m（10尺）、1.5m（5尺）に仕切る。棟通りに柱間寸法が不ぞろいの小柱穴があり、床東とおもわれる。南側柱筋一〜三通の外側2mのところを2間分の小柱穴がある。縁ないしは階段の痕跡である。

SB6669 (PLAN 27, PL. 60) 6ABP-A地区

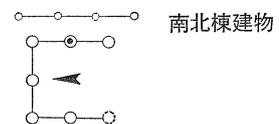
東第1建物群の南から5棟目の建物で、南のSB6666とは6m（20尺）をへだてて柱筋をそろえ、西方のSB7152とも柱筋があう7間（20.8m）×2間（6.0m）の東西棟建物。柱間寸法は10尺



（桁行2.97m、梁間3.0m）等間である。柱の掘形は方1.4m、深さ1.1mで、柱抜取痕跡には人頭大の安山岩をいれたものがある。四通の梁間に2小柱穴（方75cm）を配し、梁間を1.5m（5尺）、3.1m（10尺）、1.5m（5尺）に仕切る。

SB8302 (PLAN 17, PL. 72) 6ABP-B地区

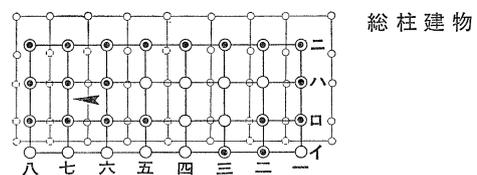
東第2建物群の南端に位置する建物で、西のSB6660とは15.2m（50尺）をへだてて柱筋をそろえている。南北2間（6m）以上×東西2間（6m）の南北棟建物。柱間寸法は10尺（3m）等間である。柱の掘形は方1m、深さ57cmで径30



cm程度の柱痕跡がある。この建物の南方は著しく削平され柱掘形をのこしていないが、桁行を5間に想定すると石積擁壁SX9230との間隔（4.5m）が短く東面中央門SB9223の進路を塞ぐことになるので3間に復原するのが無難である。東側柱列の東2mのところを足場らしい柱掘形が3間分（9.6m）ある**SS8312**。重複関係はないが、西方のSB6660と北方のSB8245と柱筋をそろえているので第Ⅱ期とした。

SB8245 (PLAN 21, PL. 73・83) 6ABP-A・B地区

東第2建物群の南から2棟目の建物。南方のSB8302とは11.95m（40尺）の間隔をおく。7間（20.86m）×3間（9.0m）で、総柱の南北棟建物。柱間寸法は10尺（桁行2.98m、梁間3m）等間である。柱の掘形は外側の柱列が概して大きく、一般には方1.2m、深さ0.57～1mである。柱痕跡はかならずしも明瞭ではないが、径38cmのものが

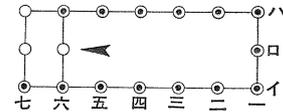


第三章 遺 跡

足 場 岩をつめるものもある。SS8358はSB8245の足場である。8間(25m)×5間(13.7m)の小柱列(掘形は方40cm,深さ35cm)で、柱間寸法は一定しない。SB8245の東側柱列では外側2.4mのところ配し、西側柱列では内側約90cmのところにならべる。一方、内側の梁間2列分の柱列はほぼSB8245の柱筋にそろえている。

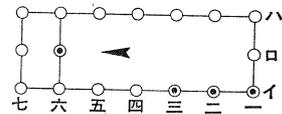
SB8210 (PLAN 23, PL. 82・83) 6ABP-A地区

南北棟建物 東第2建物群の南から3棟目の建物のうち西側に位置する建物。西のSB6669とは6m(20尺)、南のSB8245とは約9m(30尺)の間隔をおく。6間(17.9m)×2間(5.9m)の南北棟建物。柱間寸法は10尺(桁行2.98m, 梁間2.95m)等間である。柱の掘形は方1.2m, 深さ70cm内外で、径40cm程度の柱痕跡をとどめるものもある。六通の梁間中央に柱掘形があり、間仕切りの柱ないしは北廂の北妻中央の柱掘形である。東のSB8215および西と南の第II期建物と柱筋をそろえているので、重複関係はないが第II期とした。



SB8215 (PLAN 23, PL. 82・83) 6ABP-A地区

南北棟建物 東第2建物群の南から3棟目の建物のうち東側に位置するもの。西のSB8210とは6m(20尺)の間隔をおく。6間(17.9m)×2間(5.9m)の南北棟建物。平面形、柱間寸法、柱穴の状況などはSB8210と同じである。北妻柱列のイ七・ロ七の柱穴に第III期の建物SB8218Aの柱掘形が掘込まれている。



SD8211 (PLAN 22・23, PL. 82・83) 6ABP-A地区

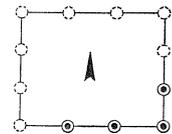
建物を囲む溝 東第1・2建物群の北側1.5m(5尺)に位置する素掘りの東西溝SD7163・SD6618がSB8215の北東部で南におれ、南北溝SD8211となる。SD8211はSB8215, SB8245の東1.5mを南北に流れる。溝には礫混りの赤褐色土が堆積するのみで、遺物を欠く。SB8245の四通の柱筋あたりで消失する。第III期建物SB8222, SB8224, 塀SA8217が掘込んでいるSB8215の雨落溝にもなるう。

SK8213 (PLAN 23, PL. 83) 6ABP-A地区

SB8210の北側にある土壙。長さ6.2m, 幅1.2m, 深さ20cmの浅い土壙で、人頭大の安山岩のほか瓦, 土器片が比較的多く出土した。SA8223, SB8218など第III期の柱掘形が掘込まれており, 出土の遺物が奈良時代前半にさかのぼらないので, 第II期にした。平城宮土器Vが出土しており, 第II期の廃絶時期をしめしている。

SB7155 (PLAN 31, PL. 51) 6ABP-F地区

西渡り廊 中央建物群と推定西第1建物群との間に介在するとおもわれる建物。SB7150と柱筋をそろえ西3.5mをへだてている。東西2間(7.2m)以上×南北1間(3m)以上の建物。柱間寸法は桁行3.6m(12尺), 梁間3m(10尺)で、柱の掘形は方1.3m内外, 径40cm程度の柱痕跡をのこす。東方のSB6650と対称位置にあることから, それと同規模の3間×3間の建物が想定できる。



SD6645 (PLAN 29, PL. 51) 6ABP-D地区

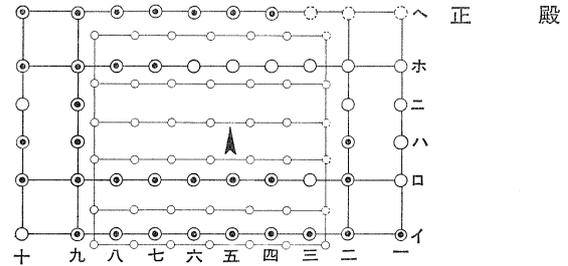
中央建物群のSB6611の西側を流れる素掘りの南北溝。東方のSD6608の対称位置にあり, 中央建物群の西面を画する溝とおもわれるが, F地区では検出していない。

iii 第Ⅲ期の遺構

第Ⅲ期にも石積擁壁SX9230および斜道SF9232Bが存続し、壇上に殿舎が群立する。建物の平面形と配置は第Ⅱ期とはまったく様相をことにし、中軸線上の正殿、後殿を中心にしてその東方に6棟の脇殿を配し、建物の間を扉や溝で区切っている。建物は原則として掘立柱であるが、礎石建物も混えている。

SB6620 (PLAN 30, PL. 50~53) 6ABP-D・F地区

中軸線(W267)上に位置する建物でこの時期の正殿とみられる。前面の石積擁壁SX9230の後方23.8m(80尺)をへだてて建つ。9間(29.2m)×5間(17.4m)で、4面に廂がつく東西棟建物。柱間寸法は身舎で10尺(桁行2.98m, 梁間3m)等間、廂で4.2m(14尺)である。柱の掘形は方1.6m, 深さ70cmで、身舎の柱穴では柱痕跡

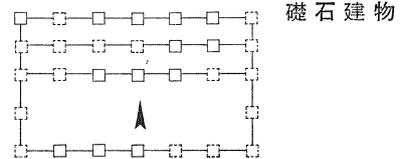


(径55cm)を扁平な安山岩の根固め石がとりまく。ただし、イ一・イ十・へ十の柱穴は方1m, 深さ45cmと他の柱穴にくらべて小さくかつ浅いので、本来は隅欠きの建物であったろう。また、西廂の柱抜取痕跡には安山岩が投げこまれている。一通のハ・ニ柱穴にそろえて2間(3.8m, 13尺)の階段がとりついている (fig. 37)。

SS6675はSB6620の足場である。SB6620の南北廂の柱間と身舎の内側にかけて、6間(17.9m)以上×5間(16.6m)の小柱穴列(方60cm, 深さ20cm)がある。柱間寸法は必ずしも一定しないが、およそ桁行を2.98m(10尺)等間とし、梁間では身舎の2間と南端間1間を2.98m(10尺)、廂間を3.87m(13尺)とする。

SB6630 (PLAN 30, PL. 50・53) 6ABP-D地区

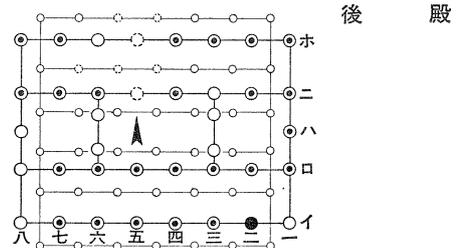
第Ⅱ期建物SB6611の柱掘形にかさなって、径80cm内外の範囲に小礫をつめた遺構がある。それらは9個しか存在しないが、礎石掘付痕跡とみなしうる。そのほかに掘付けの掘形もある。復原すれば7間(21m)×4間(10.2m)の東西棟建物で、北側に廂と孫廂がつく。



本来は南廂も存したであろうが、削平されて消失している。柱間寸法は身舎の桁行・梁間ともに3m(10尺)等間であり、廂・孫廂は2.1m(7尺)である。SB6620の後身建物とおもわれるが、規模は格段に小さい。

SB7170 (PLAN 32, PL. 65~67) 6ABP-G地区

中軸線上に位置する建物でこの時期の後殿。SB6620とは20.45m(68尺)の間隔をおく。7間(20.98m)×4間(14.4m)で南北2面に廂がつく東西棟建物。柱間寸法は身舎の桁行・梁間ともに3m(10尺)等間であり、南北の廂は4.2m(14尺)である。柱の掘形は方1.3mだが、深さは身舎で80cm, 廂で50cmである。径40cm内外の柱痕跡をとどめるものや、柱痕跡のまわり



わりに安山岩の根固め石をめぐらすもの、柱抜取痕跡に安山岩の塊石を投げ入れるものがある。身舎の三通と六通の梁間に2個の小柱穴を掘り、梁間を1.5m(5尺), 3m(10尺), 1.5m

第Ⅲ章 遺 跡

(5尺)に仕切る。身舎の南側柱列の柱掘形が第Ⅰ期のSD7165を掘込み、南廂の柱掘形が第Ⅱ期のSB7151Aの柱掘形を掘込んでいる。

SS7214 はSB7170の足場である。6間(18.2m)×5間(19.5m)の小柱穴列(方60cm, 深さ20cm)を配置する。柱間寸法は厳密でないが、桁行は3m(10尺)等間とする。梁間は南北の廂を4m(南北のはじまりはSB7170の廂列の外側2.5m)とし、内の3間を3.6m(12尺)とする。

SK7193, SD7188, SD7195 (PLAN 32, PL. 68・69) 6ABP-G地区

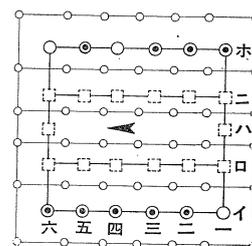
SK7193はSB7170の身舎西間仕切内にある土壌。長辺を南北にとる長方形(長さ3m, 幅1.66m, 深さ47cm)を呈する。下部には粘質土と砂質土が堆積し、上部に若干の遺物をふくむ暗褐色土層が堆積している。

SD7188はSB7170の6通と7通間の身舎から北へのびる素掘りの南北溝(幅55cm, 深さ20cm)。褐色土が堆積している。南端はSK7193に注ぎ、北は発掘区外へのびる。SD7189はSD7188に平行する素掘りの南北溝(幅55cm, 深さ10cm)。暗褐色土が堆積しSK7199につながる。SD7188の後身であろう。SD7195はSK7193の西南隅から西方へのびる玉石敷の東西溝。現状では側石の抜取痕跡しかとどめていない(幅60cm)。

SK7193は一種の貯水施設であり、SD7188ないしはSD7189は北からの導水路であり、SD7195は西方への排水路とおもわれる。SD7188には水が流れた痕跡がなく、本来は木樋暗渠であった可能性がある。そのうちSD7189が第Ⅱ期のSB7152の柱掘形を掘込むことから、第Ⅲ期となり、SB7170に矛盾なくおさまることから、浴室のようなSB7170の付属施設に想定した。

SB7173 (PLAN 28, PL. 65・66) 6ABP-F・G地区

SB7170とSB6620との間は建物幅の中庭となり、その東西に脇殿を配する。SB7173は東側の脇殿で、5間(13.5m)×4間(13.2m)、東西2面に廂がつく南北棟建物である。現在、東西の廂柱列の柱掘形しか検出していないが、後述する足場掘形的位置関係によって5間×2間の礎石付き身舎を想定することが可能である。柱間寸法は桁行が2.7m(9尺)等間であり、身舎の梁間を桁行と同じ2.7m(9尺)等間とすれば廂は3.9m(13尺)となる。北妻柱通りの東側柱の内側にある浅い土壌は、かろうじてのこった礎石据付痕跡である。掘立柱の掘形は方1.2m, 深さ1.5mで径40cmの柱痕跡をとどめるものがある。また、柱抜取痕跡に石を詰めるものもある。

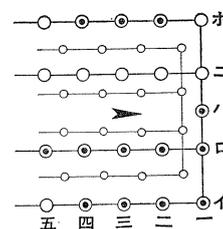


SS7186はSB7173の足場で、6間(18.2m)×5間(17.9m)の小柱穴列(方60cm, 深さ25cm)である。外周の柱穴はSS7186の柱穴の外側約2.4mに位置し、柱間寸法は厳密でないが、桁行では南北の両端を3.6m(12尺), 他を2.7m(9尺)とする。梁間は両端の間を4.2m(14尺)とし、内側の間を3.3m(11尺)とし、中央の間を2.7m(9尺)とする。

SB7173の西側柱列の柱掘形が第Ⅱ期の建物SB7150の柱掘形を掘込み、SB6620とSB7170の東妻柱筋に西廂柱列をそろえている。

SB6622 (PLAN 25, PL. 50・56, fig. 40) 6ABP-B地区

SB6620の南東に位置する。5間(13.3m)以上×4間(14.4m)で、東西2面に廂がつく南北棟建物。南妻柱列はすでに削平されている。柱間寸法は桁行2.66m(9尺)等間、梁間は身舎を3m(10尺)等間、



廂を4.2m(14尺)とする。身舎の柱掘形はやや大きく(方1.5m)、廂は小さい(方1.2m)。径45cmの柱痕をとどめるものがある。桁行は5間ないしは7間と想定されるが、他の脇殿の規模と同じとすると5間とおもわれる。

SS6614はSB6622の足場。4間(12.3m)以上×3間(10.3m)の小柱穴(方60cm、深さ20cm)による総柱遺構で、北側の柱穴列はSB6622の北妻柱列の北2.7mのところにある。

SB6622は第Ⅱ期の建物SB6660A・Bの柱掘形を掘込み、SB6620の南側柱筋とSB6622の北妻柱筋をそろえている。

SD6612, SD6652, SD6606, SD6659

(PLAN 25, PL. 50・56) 6ABP—B地区

SD6612はSB6622の西1.65m(5.5尺)をへだてて流れる石敷の南北溝(幅1m)。現状では南半に底石の安山岩をとどめ、北半には据付痕跡をとどめる。雨落溝北端は東西溝SD6606につながり、南は石積擁壁SX9230下の南北溝SD7133につながるようである。ただし、SD7133との間には1.8m内外の落差を生じることになる。

SD6652はSD6612に西方から合流する東西溝(幅60cm、長さ7m)。内に玉石がちらばり、本来は石敷であった可能性がある。西端は削平されて不明。

SD6606はSB6622の北2.1m(7尺)をへだてて流れる石敷の東西溝(幅70cm)。現状では玉石の抜取痕跡しかのこっていない。SD6659はSB6622の東1.65m(5.5尺)をへだてて流れる石敷の南北溝(幅65cm)の痕跡。玉石の底石を抜取った痕跡や移動した凝灰岩がある。SD6612・SD6606・SD6659はSB6622をとりまく雨落溝でもある。

SA6623 (PLAN 25・26・28, PL. 55・56) 6ABP—A・B地区

SB6622の北妻中央柱からはじまり、北方の東西塀SA6624につながる7間(20.55m)の南北塀。柱間寸法は原則として3m(10尺)だが、北第5・6間を2.85m(9.5尺)に縮めている。東部の仕切塀柱の掘形は方1m、深さ40cmで、なかには柱抜取痕跡に凝灰岩をつめたものもある。

SB8300 (PLAN 20, PL. 72) 6ABP—B地区

SB6622の東10.8m(36尺)にある3間(9m)以上×4間(12m)の南北棟2面廂建物。廂は東西につき、南妻柱列は削平されている。柱間寸法は桁行・梁間ともに3m(10尺)等間である。身舎の柱掘形は方1.5m、深さ1mで、径40cm内外の柱痕跡をとどめ、安山岩の礎盤をすえるものもある。廂の柱掘形は方1m、深さ70cmで、径30cm程度の柱痕跡があり、柱根の残骸や柱抜取痕跡もある。桁行を5間に復原すれば第Ⅲ期の東面築地の門SB8335と心がそろう。SB8300の東側柱列の東2.3mに方50cm程の柱穴の3間分(9.4m)の小柱穴列**SS8313**がある。その北端の小柱穴の西3mにも1個の小柱穴があり、それらはSB8300の足場とみられる。

SD8301 (PLAN 20, PL. 72) 6ABP—B地区

SB8300の東1.5m(5尺)にある素掘の南北溝(幅1.1m、深さ30cm)。底は南に向って傾斜し、北端で西にのびた痕跡がある。南は石積擁壁下へ流れ落ちるのであろうが、対応する溝を検出してない。擁壁の南7.5mのところまで東西に流れる玉石溝SD9236が斜道SF9232Bの路肩

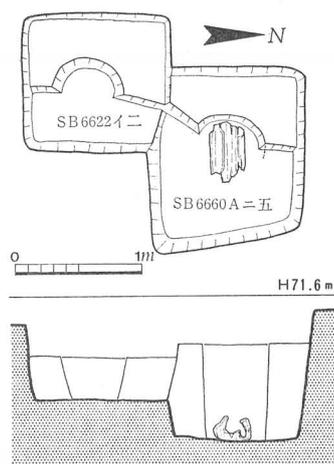
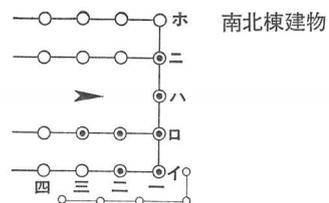


fig. 40 SB6622とSB6660柱掘形の重複



南北棟建物

足場

第三章 遺 跡

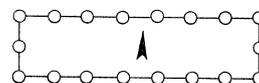
でL字状に曲り、SD8301の水をうけた可能性がある。

SD6607 (PLAN 20・25, PL. 55・73) 6ABP-B・D地区

SB8300の北7.8m(26尺)に位置し、殿舎地区の東半部を横断する石敷の東西溝である。西端はSB6620の東廂柱列の東約2mからはじまり、東は東面築地SA3719を暗渠SD8309で貫通し、外郭に出る全長68m(227尺)の溝である。現状では溝を構築した安山岩とおもわれる石材の抜取痕跡のみをとどめ、石敷の原形をのこすところはない。西半部では抜取痕跡の残存状況がわるいが、東半部では良好な痕跡をとどめている。抜取痕跡による溝幅は1.1m、深さ45cmで、側石と底石の抜取痕跡を判別できる。すなわち、底石は両側よりも20cm程度深く掘下げて据えつけ、本来の溝内法幅が30cm、深さが20cm以上であったことがわかる。また、さきに側石を抜きとり、のちに底石を抜きとったことが埋土の堆積状況からうかがえる。東端の溝底(標高72.06m)にくらべて西端の溝底(標高72.50m)のほうが40cmあまり高く、郭内の雨水などを排水する主要水路であったことがわかる。第Ⅱ期の建物SB6655およびSB6660の柱掘形を掘込んでいる。

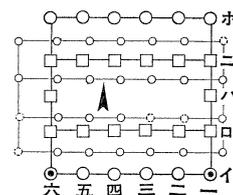
SB8305 (PLAN 20, PL. 73) 6ABP-A地区

東西溝SD6607の北3.5mに位置する7間(18.94m)×2間(4.8m)の東西棟建物で、建物の方位が西で北へ少し振れている。柱間寸法は桁行2.7m(9尺)、梁間2.4m(8尺)の等間である。柱の掘形は方50cm、深さ45cm内外である。第Ⅱ期の建物SB8245の柱掘形を掘込んでいる。この建物は方位が振れ、柱穴が小さなことから仮設的な建物とみられる。



SB6621 (PLAN 27, PL. 57・58) 6ABP-A地区

後殿SB7170の東13m、脇殿SB7173の北3.6mをへだてて位置する。5間(12.6m)×4間(12.45m)で、南北2面に廂がつく東西棟建物。身舎の柱は本来礎石をすえたらしく、断続する布掘り風の礎石据付痕跡(幅1m、深さ20cm内外)がある。柱間寸法は、桁行2.52m(8.4尺)等間、梁間は身舎が2.8m(9尺)等間で、廂が3.42m(11尺)となる。廂の柱掘形は方1m、深さ40cmで、柱抜取痕跡に塊石を投入するものがある。



SS6665はSB6621の足場である。6間(15.3m)×3間(9.4m)の小柱穴(方60cm)による総柱遺構。柱間寸法は不揃いだが、桁行では東の端間を3m(10尺)とし、他を2.4m(8尺)とする。梁間は3.13m(10尺)の等間である。この足場はSB6621の本体から少し西にずれており、また西妻柱列の礎石据付痕跡が約1.5m西から掘られていることからすれば、誤って西寄りに足場を組んだのち東寄りに建物位置を修正したのであろう。

SB6621の柱穴は他時期の遺構と重複しないが、棟通りがSB7170とそろい、SB7173の東側柱筋とこの建物の西妻柱筋とがそろっているので第Ⅲ期におく。

SD7177 (PLAN 27・31, PL. 65) 6ABP-G地区

脇殿SB7173の北1.5m(5尺)を流れる素掘りの東西溝(長さ9.35m、幅1m、深さ15cm)。ところどころに埴や凝灰岩をならべた痕跡があり、本来は石敷ないしは埴敷の溝であった可能性がある。東端は南北溝SD7175につながって北流する。この溝の西3.4m延長線上に凝灰岩抜取り痕跡があるので、後殿SB7170の南面雨落溝の雨水をあつめたようである。第Ⅱ期の建物SB

7220の柱掘形と南北溝SD6608を掘込んでいる。

SD7175 (PLAN 27, PL. 67) 6ABP—G地区

SB6621の西3mに位置する素掘りの南北溝(長さ23.65m, 幅70cm, 深さ15cm)。南端の溝底素掘溝にくらべて北端のほうが13cm深いので北流する溝であったことがわかる。南端はSD7177とつながり北端はSD6633につながる。溝には平城宮土器Ⅶの土器片が多数堆積し第Ⅲ期の年代をきめる手掛りになった。

SD6633, SD6632 (PLAN 27, PL. 58・60) 6ABP—A・G地区

SD6633は南北溝SD7175が東へ折れ曲った素掘りの東西溝(長さ26.5m, 幅75cm, 深さ25cm)。堆積土のなかに多くの平城宮土器Ⅶの土器片をふくむ。西端の溝底にくらべて東端のほうが約10cm低く, 東へ流れたことがわかる。SD6632は東西溝SD6633が南へ流路をかえた南北溝(長さ12.7m, 幅70cm, 深さ20cm)。やはり平城宮土器Ⅶの土器片が堆積している。

SA6626 (PLAN 27・32, PL. 58・65) 6ABP—A・G地区

後殿SB7170の北5mに位置し, SB7170およびSB6621の北面を遮蔽する東西塀。2間分の未掘部分をふくめて25間(73.25m)を検出した。東端は南北溝SD6631の西側で南に折れて南北塀SA6625となり, 西端は発掘区外へのびる。柱間寸法は2.93m(10尺)。柱の掘形は1.1m×0.9m, 深さ60cmで, 径40cmの柱痕跡をとどめるものもある。第Ⅱ期の東西溝SD7163およびSD6618の直上に掘込んでいる。

SA6625 (PLAN 26・27, PL. 57・58) 6ABP—A地区

SB6621とSB7173の東方を囲む南北塀。全長12間で(36.25m), 北端は東西塀SA6626につながり, 南端は東西塀SA6624につながる。柱間寸法は3.0m(10尺)等間。柱の掘形は北方ではSA6626と同じく長方形(1.1m×0.9m)を呈するが, 南方の3間分は方形(方90cm, 深さ55cm)をなす。ともに径30cmの柱痕跡をとどめるものがあり, また柱抜取痕跡に凝灰岩の破片をつめたものもある。北端の柱痕跡(SA6624の東端柱穴でもある)の位置にくらべて, 南端の柱痕跡(東西塀SA6624の東第7柱穴)のほうが西へ20cmふれている。

東西を仕切る塀

SA6624 (PLAN 21・26, PL. 57・73) 6ABP—A地区

殿舎地域東半部を南北に画する東西塀。西端を脇殿SB7173の東側柱列南端の柱穴につなぎ, 東端を東面築地SA3800Aにむすんでいる。全長21間(62.3m)。柱間寸法は3.01m(10尺)で, 柱の掘形は方90cm, 深さ50cmである。なかに径40cmの柱痕跡をとどめるものや凝灰岩をつめた柱抜取痕跡がある。西から第3柱は南にのびて南北塀SA6623となり, 西から第7柱および第10柱からは北へのびて南北塀SA6625, SA6629になる。柱穴の重複関係はないが, 第Ⅲ期の建物との間に共通の計画性がみとめられるので第Ⅲ期においた。

南北を仕切る塀

SA6629 (PLAN 21~23, PL. 82・83) 6ABP—A地区

殿舎地域の北東部を東西に区画する南北塀。南端を東西塀SA6624の西から第10柱に結び, 北端は北面築地にむすぶものとおもわれる。全長15間(45.4m)で, 柱間寸法は北第8間と第12間を3.3m(11尺)にするほかは, 3m(10尺)の等間である。柱穴の状況は東西塀SA6624と同じ。第Ⅱ期の東西溝SD6618と北面築地回廊南雨落溝SD8214を掘込んでいる。

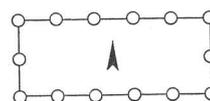
東西を仕切る塀

SB8219 (PLAN 22, PL. 81・82) 6ABP—A地区

東西塀SA6624の北9.3m(31尺), 南北塀SA6629の東4.8m(16尺)をへだててたつ5間(15m)

第三章 遺 跡

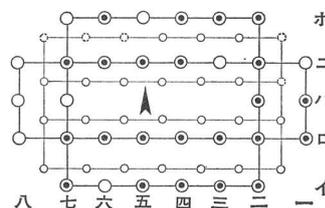
× 2 間 (6m) の東西棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに 3 m (10尺) 等間である。柱の掘形は方 0.8~1.5m, 深さ 50cm, 柱痕跡は概して不明瞭だが, 径 25cm の柱痕跡をとどめる柱穴もある。西妻柱列の柱穴に SB8224 の西廂柱掘形が掘込んでおり, それよりも古いことがわかる。



SB8224 (PLAN 22, PL. 81・82) 6ABP-A地区

隅欠きの建物

SB8219と同位置にたつ。7間 (22.2m) × 4間 (13.2m) で, 4面に廂がつく東西棟建物。ただし, 廂の4隅の柱穴を欠いている。柱間寸法は身舎が 3 m (10尺) 等間で, 廂が 3.6m (12尺) である。柱の掘形は方 1 m, 深さ 50cm 内外。径 40cm 程度の柱痕跡をとどめるものがある。身舎の東妻柱の柱穴には径 50cm の扁平な安山岩をすえているが, 他の柱穴ではみられず, 礎石建物に想定することはできない。柱の高さをそろえるためだろうか。SB8219の西妻柱列の柱掘形に八通の柱掘形を掘込んでいる。



SS8828はSB8224の足場。6間 (15.8m) × 2間 (6.6m) の総柱遺構。柱間寸法は厳密でないが, 桁行では西 2 間を 3.6m (12尺) とし他の 4 間を 3 m (10尺) とする。梁間では南側を 3.6m (12尺) とし, 北側を 3 m (10尺) とする。柱の掘形は方 50cm, 深さ 30cm 内外で, 径 25cm 程度の柱痕跡がある。

SA8225 (PLAN 22, PL. 82) 6ABP-A地区

目隠堀

SB8224 と南北堀 SA6629 との間にある 2 間 (4.5m) の南北堀。柱穴の状況は SB8224 と同じ。柱間寸法は 2.25m (7.5尺) である。この堀に面する SA6629 の柱間が西からの入口とすれば, 一種の目隠堀である。

SA8217 (PLAN 22, PL. 83) 6ABP-A地区

南北を仕切る堀

SB8219の北 8.8m (30尺) をへだててたつ東西堀。西は南北堀 SA6629 の南から第 8 柱からはじまり, 東は東面築地 SA3800A にとりつく。全長 11 間 (33m) で, 柱間寸法は 3 m (10尺) 等間である。1.0m × 1.3m, 深さ 50cm 内外の柱掘形に径 40cm 程度の柱痕跡がある。この東西堀は, 殿舎地域の東北部の一郭を南北に区画している。

SD6631 (PLAN 23・27, PL. 58・83) 6ABP-A地区

殿舎地区の北東部を貫通する素掘りの東西溝 (幅 70cm, 深さ 29cm 内外)。西端は SD6632 につながり, 東端は東面築地西雨落溝 SD9226 につながる。第 II 期建物 SB8210 と SB8215 の柱穴を掘込んでいる。

SB8218A・B (PLAN 23, PL. 83, fig. 41)

6ABP-A地区

SB8218Aは東西堀 SA8217の北 9.3m (31尺), 南北堀 SA6629の東 5.1m (17尺) をへだててたつ 5 間 (14.1m) × 2 間 (6m) の東西棟建物。桁行の柱間寸法は, 東西両脇間を 3 m (10尺) とし, 内の 3 間を 2.7m (9尺) 等間にする。梁間は 3 m (10尺) 等間。柱掘形は方 1.2m, 深さ 50cm 内外だが, 柱痕跡は明瞭でない。東西の妻柱列の

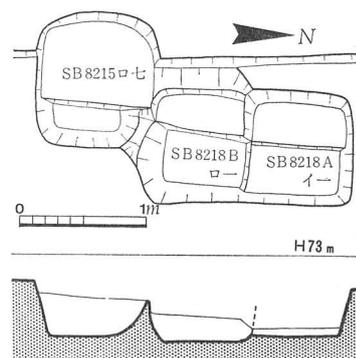


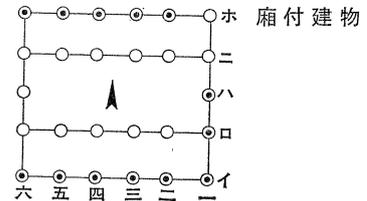
fig. 41 SB8218A・B柱掘形の重複

柱掘形に後身の SB8218B の柱掘形が掘込んでおり、南側柱列の柱掘形にやはり第Ⅲ期の建物 SB8222 の柱掘形が掘込んでいる (fig. 41)。

SB8218B は SB8218A をほぼ同位置でたてかえたもの。5 間 (14.1m) × 2 間 (6m) の東西棟建物。桁行の柱筋は SB8218A と同じだが、梁間の柱筋を 2.1m 北へ移動している。柱間寸法や柱掘形の状況は SB8218A と同じである。

SB8222 (PLAN 23, PL. 83) 6ABP—A 地区

SB8218B のあとにたつ 5 間 (14.1m) × 4 間 (12.98m) で南北 2 面を廂とする東西棟建物。柱間寸法は桁行の両脇間を 3m (10尺) とし、内の 3 間を 2.7m (9尺) とする。梁間は身舎を 3.02m (10尺) 等間とし、北廂を 3.32m (11尺)、南廂を 3.62m (12尺) とする。身舎の柱掘形が若干大きく、方 1m、深さ 55cm である。柱抜取痕跡に塊石をつめるものがある。廂の柱掘形は、1.2 × 0.7m 内外の長方形を呈し、径 40cm の柱痕跡をとどめる。身舎の側柱列の柱穴が SB8218A・B の柱掘形を掘込んでおり、3 棟のうちもっとも新しい建物であることがわかる。桁行の両脇間を広くとる身舎の柱間寸法が、SB8218A・B と同様である点が注目される。



廂付建物

SA8223 (PLAN 23, PL. 83) 6ABP—A 地区

SB8222 と南北塀 SA6629 の間にある 2 間 (5m) の南北塀。柱穴の状況は SB8222 と同じ。柱間寸法は 2.5m (8尺) である。この塀が面する SA6629 の柱間が西からの入口とすれば、SB8223 の目隠塀になる。

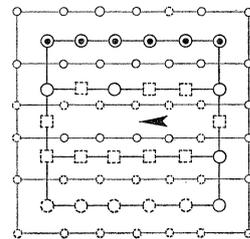
目隠塀

SD6644 (PLAN 30, PL. 51) 6ABP—D 地区

正殿 SB6620 の西側にある石敷の東西溝。底に敷いた安山岩・凝灰岩が部分的にのこるが、石敷の多くは抜取痕跡をとどめるにすぎない。SB6620 の南入側柱列の西端からはじまり、8.5m 西へ流れて南流するようである。石敷の幅は 35cm 内外であるが、両側石はまったく抜き取られている。

SB7172 (PLAN 31, PL. 52) 6ABP—F 地区

正殿 SB6620 の西北方に位置する脇殿。5 間 (13.4m) × 4 間 (13.2m) で、東西 2 面に廂がつく南北棟建物。柱間寸法は桁行で 2.7m (9尺) 等間。梁間は廂で 3.9m (13尺)、身舎で 2.7m (9尺) 等間。柱の掘形は 1.5 × 1.3m で、深さは 75cm、径 45cm 程度の柱痕跡がある。柱穴のうち身舎の妻柱と 2 個の側柱穴をかいている。後述の足場からすれば柱の存在は予想されるところであり、本来は柱があったとみなければ



西脇殿

ならない。たとえば、当初に古材の柱を再利用し、材の長さの都合で一部の柱は礎石立ち、他は掘立柱としたことがかんがえられる。中軸線をはさんで東方の SB7173 と対称位置にある。東側柱列の柱穴が第Ⅱ期の建物 SB7150 の柱掘形を掘込んでいる。なお、この建物の西半分は発掘していない。

SS7228 は SB7172 の足場。桁行 6 間 (18.4m)、梁間 4 間 (13.5m) 以上の総柱遺構が想定で

足場

きる。柱掘形は方 50cm、深さ 30cm である。その外側の柱位置は SB7172 の東 2.0m、南 2.5m、北 2.4m に位置している。

第三章 遺 跡

SB7209 (PLAN 32) 6ABP-G地区

後殿SB7170の西方に2間分(5.2m)の柱掘形がある。それは東方にあるSB6621の北側柱列西から3本の柱穴と中軸線をはさんで対称位置にある。このことから、西方にもSB6621と同規模のである5間(12.45m)×4間(12.45m)の建物があったことを推測できる。

iv 時期不明の遺構

時期ならびに性格をきめがたい遺構が少なからず存在している。その多くは各所に散在する小柱穴および小土壇である。それらの各々についてはふれない。**SK7192・SK7191**(6ABP-G地区, PLAN27)は第Ⅲ期の北辺を画する東西堀SA6626外にある浅い土壇。一種のごみ捨場ないしは土取り跡とおもわれる。

C 広場地区

築地回廊の内部、殿舎地区の擁壁以南は、原則として建物のない広場であり、朝庭としていたのであろう。第Ⅰ期では東西約167m、南北約205mの縦長の長方形(34,235m²)を呈し、第Ⅱ・Ⅲ期では東西約167m、南北約86mの横長の長方形(14,362m²)に縮小している。すでにのべたように、北方が高く南方が低い地勢を呈している。

i 第Ⅰ期の遺構

SH6603A (PNAN 2)

殿舎地区と南門SB7800の間に展開する小礫敷の広場。築地回廊の雨落溝ぎわから埴積擁壁下にまで展開する。6ABR-G・6ABQ-B地区以北では砂礫質ないしは茶褐色粘質土の地山を平坦にして粒揃いの礫を厚さ10cm内外に敷きつめる。6ABR-H地区における地山が黒色粘質土にかわる低湿地では、部分的に粘質砂土をいれて整地したのち礫をしいている(下層礫敷面)。6ABR-H地区の南寄りでは、下層の礫敷面の上に粘質土や砂質土を15cm前後の厚さで堆積し、そのうえに拳大の礫をしいている(中層礫敷面)。中層礫敷面のうえには5~10cmの厚さで灰色の細砂層が堆積し、そのうえに小粒の礫をしく(上層礫敷面)。しかしながら、地山が洪積世の台地かかる6ABR-G地区以北では中・上層の2層を区別することは困難である。中層のうえにみられる細砂の堆積は、広場南部が帯水した状況をしめしている。

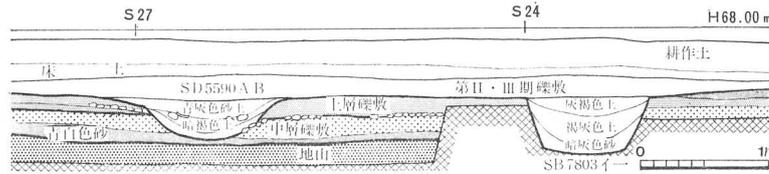
SD7760 (PLAN 12・14, PL. 12・32) 6ABR-G・H地区

南門SB7800の北階段東端の位置から発する素掘りの南北溝(幅40cm、深さ10cm)。6ABR-G地区の南辺以北では削平されている。この溝は中軸線から東へ6mへだたっており、西側に同様の南北溝を想定するならば、幅員12m(40尺)の南北通路の東側溝となる。しかし、通路部分にとくに手をくわえた痕跡はない。同時期の東西溝SD5590および第Ⅲ期の東西溝SD3769と建物SB7803の柱掘形が掘込んでいる。

SD5590A・B (PLAN 5・13, PL. 11, fig. 42) 6ABR-H地区

南面築地回廊SC5600の心から北へ約22mへだたる素掘りの東西溝(幅1m前後、深さ30cm)。中層礫敷面にともなうSD5590Aと、上層礫敷面にともなうSD5590Bにわかれる。SD5590Aには礫混り灰色砂土が約10cmの厚さで堆積し、東端は東面築地回廊SC5500の西雨落溝SD5588

fig. 42
SD5590 付近の
土層堆積



につながる。SD5590Bは底にやや大粒の礫が堆積し、う上に厚さ20cmの灰色質土が堆積しており、SC5500の西雨落溝から西へ寄せた南北溝SD5589につながる。上下2層の堆積土からは多くの瓦片が出土した。

SD5588, SD5589 (PLAN 5, PL. 14) 6ABQ-Q地区

SD5588は本来はSC5500の西雨落溝SD3790の一部分であるが、東西溝SD5590Aとの合流点以南でひろがったもの。長さ15m、幅1.8mの素掘りの南北溝で、北端はSD5590とつながり、南部でSC5500を横断する木樋暗渠SD5561, SD5562, SD5563につながる。

SD5589はSD5588を西によせた溝である。長さ11.5m、幅35cmの素掘りの南北溝で、北端はSD5590Bにつながる。

SD5607 (PLAN 6・7) 6ABR-P・Q地区

SC5500の西雨落溝SD3790の西側に平行する素掘りの南北溝(残存長26m、幅35cm、深さ10cm)である。Q地区の西北隅からP地区の南寄りのにこっており、南北両端はさだかでない。第Ⅲ期の東西堀SA3740がこの溝を掘込んでいる。なお、南北溝SD5589と同一線上にあり、ある時期、雨落溝とは別の排水溝を回廊にそってつけた可能性もある。

SD7805, SD7806 (PLAN 12・13, PL. 4) 6ABR-H・J地区

南門SB7801の北側の雨水をSD5590に導く石敷の南北溝。SD7805は(長さ12m、幅30cm、深さ10cm)。北部は素掘溝の状態でのこるが、南半では両岸に拳大の礫をならべて護岸する。南端はSB7801の上層雨落溝につながり、北端はSD5590Bに注いでいる。

南門の排水

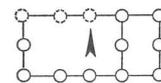
SD7806は中軸線の西側でSD7805と対称位置にある石敷の南北溝。南端の2mを検出したにすぎないが、つくり方や規模はSD7805と同じであり、SD5590に注ぐものとみてよい。

SD3779 (PLAN 7, PL. 31) 6ABR-P地区

P地区のほぼ中央にある素掘りの東西溝(長さ34m、幅40cm)。ほとんど削平され、東西両端は不明である。SC5500を横断する木樋暗渠SD3770と方位がそろっており、連続する可能性があるのではこの時期にいれる。

SB7765 (PLAN 14, PL. 36) 6ABR-G地区

G地区のほぼ中央に位置する4間(10.1m)×2間(5.1m)の東西棟建物で、東妻側に廂がつく。柱間寸法は桁行の西端間が2.7m(9尺)であるほかは、2.4m(8尺)等間である。身舎の柱掘形は方70cm、深さ40cmで、径35cmの柱痕跡がある。廂の柱穴は径40cmの円形を呈する。西妻柱および北側柱の2柱が第Ⅱ期のSK3784によって破壊されている。



小建物

SD7142 (PLAN 14~16, PL. 37・38) 6ABQ-C・D地区

広場地区を南北に貫通する素掘りの南北溝(幅1.2m、深さ15cm)。北方のC・D地区ではよくのこるが、南方のG・H地区ではわずかに痕跡をとどめるにすぎない。北端は6ABP-D地区の埴積擁壁SX6600の前にはおよんでおらず、発掘しなかった構内道路のあたりにあるも

南北通路

第三章 遺 跡

のとおもわれる。南端は東西溝SD5590Aに注いだ可能性もなくはないが、SC5600を横断する盲暗渠SD7807と方位がそろっているため、SD5590Aの設置以前においてSC5600の北雨落溝に連結した可能性が大きい。第Ⅱ期の南面築地回廊SC3810Aがかさなっている。この溝は中軸線の東18.5m(62尺)に位置し、中軸線の西にも同様の溝を想定するならば、幅37m(125尺)の通路があったことになる。

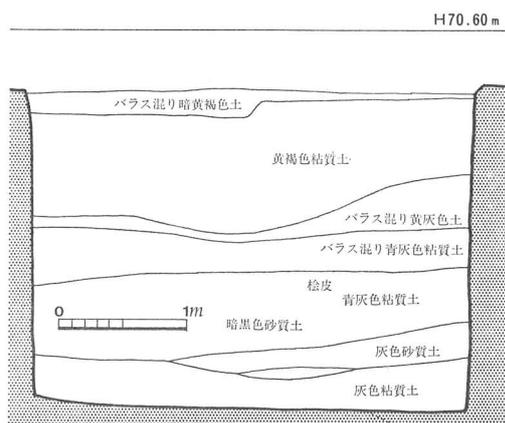


fig. 43 SE7145の断面

SE7145 (PLAN 16, fig. 43) 6ABQ—C地区

井戸 C地区の東北隅にある井戸である。3.5m×3.1mの隅丸方形の掘形で、深さは2.5mである。井戸枠は完全に抜きとられ、版築状にていねいに埋戻されている。底部ではほぼ中央に方1mの範囲に木片をふくむ暗黒色砂質土塊があり、その上層の青灰色粘質土上面には栓皮が堆積していた。埋土から少量の瓦片と刀子が出土した。

ii 第Ⅱ期の遺構

SX3785 (PLAN 7・14・15, PL. 31) 6ABR—P, 6ABQ—B地区

わだち 第Ⅱ期造営時の轍である。幅15~20cm、深さ5cmの細い轍が、この時期の整地土にのこされている。南北方向の痕跡と東北から西南方向にかけての痕跡があり、後者は7~8条交叉している。2条が平行する南北方向の例(B地区)によると1.5mの間隔があり、それが車幅をしめすことになる。第Ⅱ期の整地土にしるされ、この轍のうえに南面築地回廊がつくられていることから、第Ⅱ期の造営時の遺構になる。

SH6603B (PLAN 2)

この時期の広場は北方で石積擁壁SX9230を南へせりだし、南面築地回廊を北によせ面積をせばめる。SH6603Bでは第Ⅰ期の礫敷面のうえに黄褐色粘質土を主とする整地土(厚さ10cm前後)をもり、そのうえに再び礫をしきつめる。この状況は南面築地回廊SC3810A以北において明瞭に識別できるにもかかわらず、以南では第Ⅰ期礫敷面との区別が容易でなく、むしろ混りあっているようにもみえた。また、後の第Ⅲ期でもこの礫敷面は存続するが、第Ⅱ・Ⅲ期を層位的に分別できない。

SA7815 (PLAN 13, PL. 3) 6ABR—G地区

竿痕跡 第Ⅱ期南面築地回廊の心から南へ48.9mへだたったところで東西にのびる塀(10間、51m)。G地区を横断し、西へさらにのびるようである。東は未掘区にかかるが、6ABR—Q地区に柱筋のそろった柱穴があり、広場地区を横断した可能性が大きい。柱間寸法は5.1m(17尺)等間。柱掘形が径40cmと小さいことからすれば、竿のような仮設物をたてたのだろう。上層礫敷面で検出。東面築地回廊上におよんでいないので第Ⅱ期にいれる。

SD7763 (PLAN 14, PL. 36) 6ABR—G地区

G地区中央にある素掘りの東西溝(幅40cm、深さ10cm)。長さ22mをとどめるが、西端の接

続状況は不明である。第Ⅰ期の東西棟建物SB7765の柱掘形に掘込んでいるので、この時期に
いれておく。

SK3784 (PLAN 7・14, PL. 26・36) 6ABR—P・G地区

南面築地回廊SC3810Aの南で東西にのびる不整形の大土塼(最大幅5.3m、深さ20~30cm)。東
端は第Ⅰ期東面築地回廊SC5500の西雨落溝SD3790の西縁でとまるが、西端はなお発掘区外に
のびるようである。土塼の堆積は上下2層にわかれ、多数の瓦片が出土し、部分的に滞水した
痕跡をとどめる。第Ⅰ期の建物SB7765の柱掘形を掘込み、南面築地回廊SC3810Aの南側基壇縁
にそっていることから、回廊基壇造成時の土取場の痕跡である可能性が大きい。東方では土塼
SK3787、轍SX3785がかさなり、第Ⅲ期建物SB7769の南側柱の掘形によって掘込まれている。

SA3809 (PLAN 8・15, PL. 32) 6ABQ—BD地区

南面築地回廊SC3810Aの心から北21.8mに位置する東西塼。西端は発掘区外にのび、東端 竿 痕 跡
は東面築地回廊西側でおわる。13間分検出し、柱間寸法は原則として6m(20尺)であるが、D
地区では間柱がはいって柱間がやや不規則になる。柱掘形は小さな円形(径40cm、深さ30cm)
を呈している。柱間が広いことからすると塼ではなく、竿のようなものをたてたのかもしれない。
上述のSA7815と共通するところがある。上層礫敷面で検出。

SE9210 (PLAN 16, PL. 46, fig. 44) 6ABQ—A地区

A地区西南にある井戸。井戸の掘形は矩形を呈し、上下2段にわかれる。上段は南北7.3m、
深さ1.7mであり、下段は上段掘形の西北寄りを深くしたもので、東西4.9m、南北4.5m、深 大型井戸
さ1.9mであり、遺構検出面から底までの深さは3.6mとなる。下段掘形の底には4段の井戸枠
をとどめるが、その上部はすでにぬきとられている。井戸枠採取痕跡は底から約1mの厚さで
埋戻され(青灰色粘土)、それ以上は埋立てられることなく、放置されたようである。

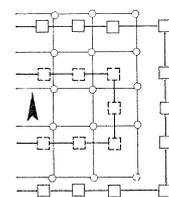
井戸枠の内法は、方2.25mであり、西南と西北隅には木材の礎盤をあてている。枠木の1段
と3段には板をもちい、2段と4段には校倉の校木を転用している。井戸枠と掘形との間は木 校木の転用
屑を混えた灰褐色砂土で裏込めし、井戸底には拳大の玉石を敷く(厚さ10cm)。玉石敷の上部に
堆積する暗灰色土には、10世紀代の土師器があり、ほかに瓦片や木器があった。第Ⅲ期および
それ以降も使用されたことをしめす(校木についてはp.140参照)。

SK7136はSE9210の井戸枠採取痕跡の後身であり、東西5m、南北8.5m、深さ90cmの土塼
である。堆積土は3層にわかれ、11世紀頃の瓦器が出土している。一種の泉として長くもちい
られたのであろう。

iii 第Ⅲ期の遺構

SB7803 (PLAN 13, PL. 12) 6ABR—H地区

H地区の西寄りにある3間(9.6m)以上×4間(13.2m)で四面に廂がつく東
西棟建物。西半は発掘区外にあるが、中軸線で折り返すと桁行は7間(22.5
m)となる。側柱の柱間寸法は桁行・梁間ともに隅の間を3.6m(12尺)とし、
それ以外は3m(10尺)等間とする。柱の掘形は方1m、深さ30cmと浅く、
柱痕跡をとどめていない。おそらく礎石をすえた掘形であろう。身舎の柱位
置を直接にしめす痕跡はないが、小柱列の足場SS7823の存在によって想定できる。それは2間



大型建物

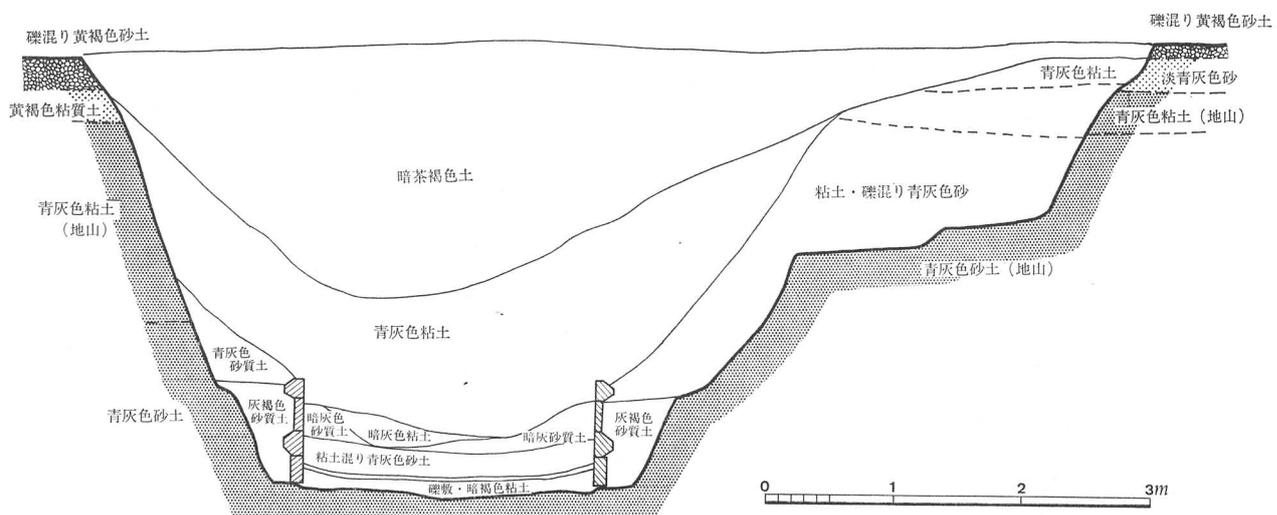
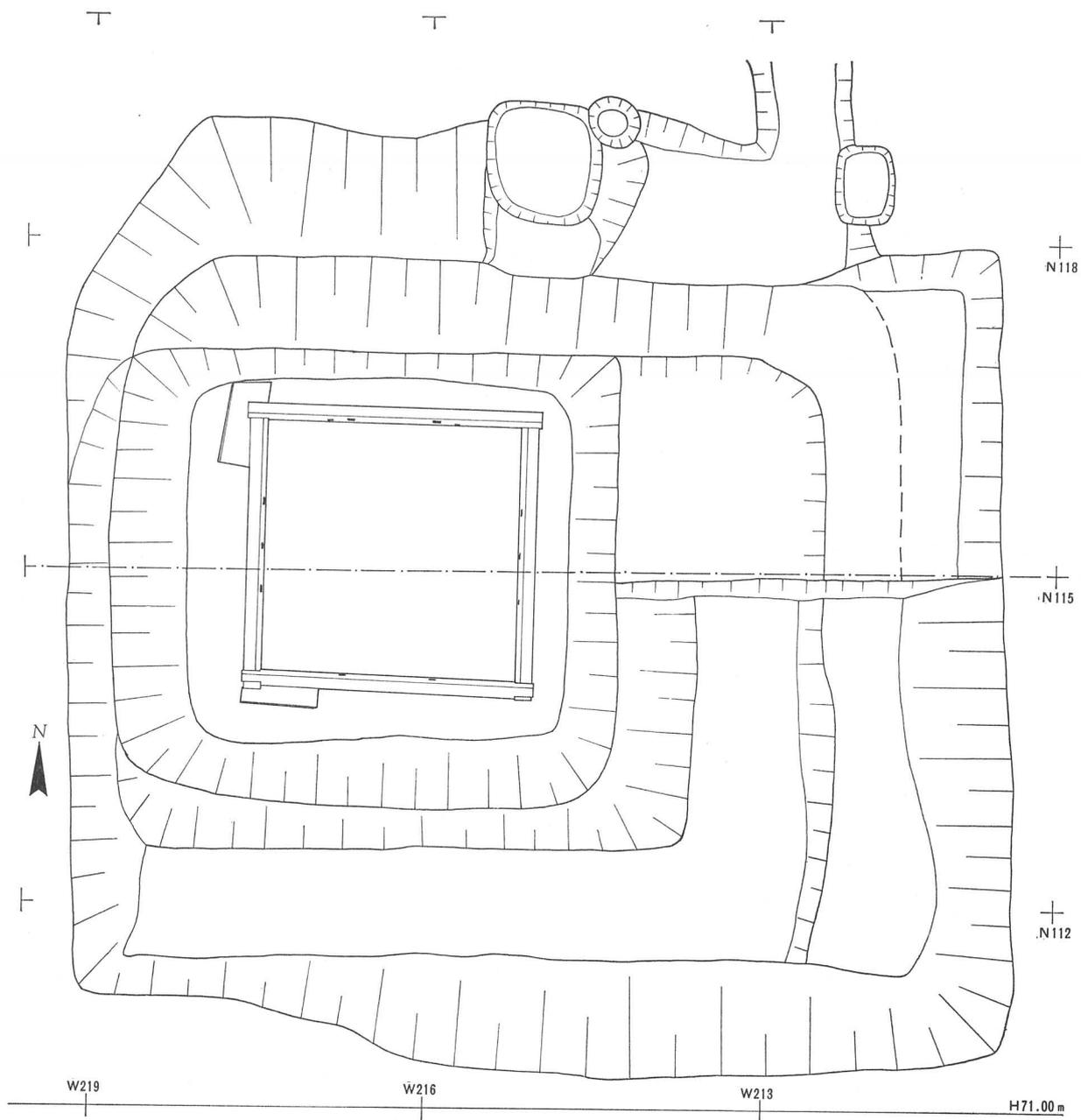


fig. 44 SE9210実測図

(6.5m) 以上×4間(8.2m)の総柱遺構であり、その間に身舎柱を想定すると、5間(15m)×2間(6m)の身舎となる。おそらく身舎も礎石を据えていたのであろう。第Ⅰ期の南北溝SD7760に重複し、上層礫敷面で検出した。

SA3740, SB3768 (PLAN 7・13, PL. 30・36) 6ABE—K, 6ABR—P・G地区

SA3740はこの時期の南面築地SA3810Bの心から南35.6mをへだてて東西にのびる塀。広場地区を横断し、西は発掘区外へのび、東はこの時期の東面築地SA3800Aの心から東18.7mの東外郭へのび、南北塀SA8238とむすぶ。検出した柱間総数は34間で、柱間寸法は2.4m, 2.7mのところもあるが、おおむね3m(10尺)におさまる。柱の掘形は方70cm, 深さ30cmである。なお、D地区ではSA3740にかさなって無数の杭が打ちこまれた痕跡(長さ20m, 幅70cm)があるが、平城宮廃絶後の遺構とおもわれる。

SB3768はSA3740の東から3間目に開く1間の門である。柱間寸法は5.4m(18尺)で、柱の掘形(方1m, 深さ40cm)には柱抜取痕跡があり、西の柱掘形には角材の礎盤があった。ともに上層礫敷面で検出しており、南北塀SA8238とともに第Ⅲ期の外郭を形成しているとみられる。また、中軸線上にもSB3768に類する門の存在が予想される。

SD3769 (PLAN 7・13, PL. 30・36) 6ABE—K, 6ABR—P・G地区

SA3740の南2.5mをおいて東西にのびる素掘りの東西溝である。幅1m, 深さ10cmのこの溝は広場地区を横断し、西は発掘区外へのび、東は第Ⅰ期の東面築地回廊SC5500の基壇をとおりぬけている。溝底は東になるにしたがって深くなっており、東方に排水したことがわかる。第Ⅰ期南北溝SD7760を掘込んでおり、上層礫敷面で検出した。

SB7753 (PLAN 13, PL. 36) 6ABR—G地区

中軸線の東7mにあり、北側がSD3769に接してたつ2間(4m)×2間(3.5m)の東西棟建物。柱掘形は小さな円形(径40cm, 深さ15cm)を呈している。SA3740に設けたであろう中央門にともなう番屋的な性格をもつ建物のようなものである。上層礫敷面で検出し、第Ⅰ期南北溝SD7760を掘込んでいる。



小 建 物

SB7769 (PLAN 14, PL. 34) 6ABR—G地区

南面築地SA3810Bの南に接してたつ2間(4.5m)×2間(3.9m)の東西棟建物。ただし、西妻柱列は3間(中央間1.5m, 両脇間1.2m)とする。柱の掘形は小さく(方50cm, 深さ35cm), 北側柱の掘形には径25cmの柱痕跡がある。SB7753と同じく番屋的な建物とみられる。第Ⅱ期の土壌SK3784を掘込んでいる。



小 建 物

SD7131, SD7132 (PLAN 14~16, PL. 32・34・38) 6ABQ—C・D, 6ABR—G地区

SD7131は中軸線の東33m(110尺)で南へ流れる素掘りの南北溝(幅80cm, 深さ10cm前後)。北端は東西溝SD7132につながり、南端は石積暗渠SD7799で南面築地SA3810を貫通する。SD7132はこの時期の石積擁壁SX9230の南8.5mにある素掘りの東西溝(幅50cm, 深さ10cm)で、東端はSD7131につながる。ともに上層礫敷面で検出するが、SD7131が同時期の東西塀SA7130にかさなっており、第Ⅲ期のなかでも新しい時期にぞくする遺構である。

SA7776 (PLAN 14, PL. 34) 6ABQ—D地区

この時期の南門SB7750の北面東寄りにある4間(5.9m)の東西塀。柱の掘形(方70cm)には径40cm内外の柱痕跡をとどめる。第Ⅱ期南面築地回廊SC3810Aの北雨落溝SD3778に重複している。

第三章 遺 跡

SB7785 (PLAN 15, PL. 37) 6ABQ—D地区

南面築地SA3810の北34mに位置する3間(8.1m)×2間(4.2m)の東西棟建物。柱間寸法は桁行2.7m(9尺)、梁間2.1m(7尺)で、柱掘形は小さな円形(径30cm、深さ25cm)を呈する。柱位置はやや不揃いで、棟方向は東で南へ約3度ふれている。上層礫敷面で検出。

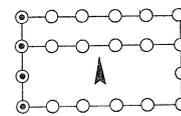


SA7130 (PLAN 9・16, PL. 40・41) 6ABQ—A・C地区

石積擁壁SX9230の南26mで広場地区を横断する東西塀。27間分の柱穴を検出した。大半の南面の囲い柱間は3m(10尺)だが、東面築地SA3800Aには2.1m(7尺)の柱間寸法でとりつき、井戸SE9210に接する東から13間目の柱間(4.2m、14尺)は広く柱掘形も大きいので、門にあてることができる。柱の掘形は大半が方70cm、深さ20cmで、径30cmの柱痕跡をのこすものもある。それに対して門の柱掘形は他よりも大きい(方1m)。上層礫敷面で検出し、同時期の南北溝SD7133が掘込んでいる。

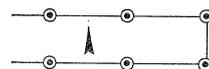
SB9220 (PLAN 17, PL. 45) 6ABQ—A地区

斜道SF9232Bの登り口にたつ5間(12m)×3間(7.2m)の東西棟建物で、北に廂がつく。柱間寸法は桁行が2.4m(8尺)等間であり、梁間も廂ともに2.4m(8尺)の等間である。柱の掘形(方1m、深さ70cm)には、柱抜取痕跡がある。第I期の埴積擁壁SX6600を掘込み、上層礫敷面で検出した。第IIとIII期を区別する決め手はないが、SF9232Bに食い込み、中軸線上にあるSB7131と北廂の柱筋をそろえているのでこの時期におく。



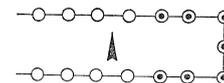
SB7141 (PLAN 16, PL. 39) 6ABQ—C地区

東西溝SD7132の南側にある2間(12m)以上×1間(3.6m)の東西棟遺構。柱の掘形は長方形(3m×1m、深さ80cm)を呈し、径60cmの柱位置を30cm程度深く掘込んでいる。中軸線をはさんで対称的な柱間を想定すれば、桁行は6間(36m)となり中軸線上に桁行中央の柱がのることになる。このような建物の類例は他になく、構造も決めがたく、棧敷風の遺構かもしれない。上層礫敷面で検出。第II・III期のいずれかを決め難いが、SD7131、SD7132で囲まれていることから一応第III期にいった。



SB7140 (PLAN 16, PL. 39) 6ABQ—C地区

SB7141の南にある6間(16m)以上×2間(4.8m)の東西棟建物。柱間寸法は桁行が2.7m(9尺)等間で、梁間が2.4m(8尺)等間である。柱の掘形は方70cmで、径30cmの柱痕跡をとどめるものもある。この建物の棟方向は西で北へ約4度振れており、ゆがんだ建物になっている。上層礫敷面で検出。SB7141とは共存できず、方向も振れているので第III期のなかでも時期が下るものとおもわれる。



SB7134 (PLAN 16, PL. 39)

SB7141の東南にある3間(5.4m)×2間(4m)の東西総柱建物。柱間寸法はととのっておらず、とくに東妻柱列がゆがんでいる。柱穴は小さな円形(径30cm)であり、仮設建物のようなものである。上層礫敷面で検出。



SD7133, SD9236 (PLAN 16, PL. 40・45) 6ABQ—A・C地区

SD7133はC地区南辺中央部にある石敷の南北溝(幅70cm、深さ5cm)である。側石はすでに

なく、扁平な安山岩を用いた底石およびその痕跡がのこるにすぎない。南端は消失しているが北端は壇上の南北溝SD6612をうけたようである。

SD9236はSB9220の北西にある東西溝（幅80cm、深さ10cm）で、6mをとどめるにすぎない。西岸には人頭大の安山岩をならべている。ともに上層礫敷面で検出したが、著しく破壊されているので、本来の姿をうかがうことができない。しかし、SD9236はSD7132の前身として東西にのび、それにSD7133がつながり、石積擁壁の上からSB8300の東雨落溝の排水をうけた可能性もある。

SK7135 (PLAN 16, PL. 39) 6ABQ-C地区

SB7134の東側にある方形の土壇（方2m、深さ25cm）である。堆積土は上下2層にわかれ、上層からは瓦器片などが出土した。上層礫敷面で検出。

iv 奈良時代以前の遺構

SX7800 (PLAN 15, PL. 37, fig. 45) 6ABQ-D地区

D地区の西北隅にある方墳の痕跡である。墳丘はすでに削平され方形にめぐる周濠だけがのこる。墳丘部は9m×8.2mの方形を呈し、方位を東北-南西にとっている。周濠は南西辺でののこりがよく、幅2.5m、深さ30cmであり、のこりのわるい東北辺では幅1m、深さ10cmであった。これは東北が高く南西に低い旧地形の状況をしめしている。周濠内には古墳存続時の黒褐色土が凹レンズ状に堆積し、そのうえに平城宮造営時の埋土がかさなっている。こうした堆積土中から埴輪や須恵器の破片が出土し、5世紀後半の古墳であったことがわかる。

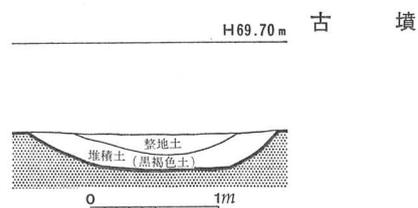


fig. 45 SX7800濠の断面

SD7787 (PLAN 13・15, PL. 12・37, fig. 14) 6ABR-G・H, 6ABQ-C・D地区

発掘区の西寄り、中軸線の東11mのところにある素掘りの南北溝（幅1.5m、深さ15cm）。下層の礫敷でおおわれており、平城宮造営以前の溝であるとともに、方墳SX7800の上をとっており5世紀以後の遺構であることがわかる。また、第I期南門SB7801の下層でも確認できた（fig. 14）。さきに朱雀門地区で検出した下ッ道東側溝の延長線上にあり、下ッ道がこのあたりまでおよんでいたことがあきらかになった。

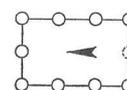
SB7816, SB7817, SB7818 (PLAN 13, PL. 3) 6ABR-GH地区

SB7816はH地区北辺中央部にある2間（4.5m）×1間（3.3m）の東西棟建物。柱掘形は小さな円形（径30cm、深さ15~25cm）で、棟方向は西で北へ約4度振れている。地山面で検出した遺構で、和銅の造営時ないしはそれ以前の建物となる。つぎのSB7817と重複関係にあるが、柱穴が直接重複していない。

SB7817はSB7816の西に重複して建つ3間（4.9m）×2間（3.3m）の南北棟建物。柱掘形の状況はSB7816と同じ。地山面で検出した。



SB7818はSB7817の西北にある3間（8.3m）×2間（5.2m）の南北棟建物。北妻柱列の柱間は若干広がっている。柱掘形の状況はSB7816と同じ。棟方向は北で西で5度強振れている。地山面で検出した。



第三章 遺 跡

SA7824 (PLAN 13, PL. 3) 6ABR-H地区

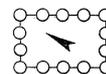
SB7818の西南にある南北塀。4間(長さ4m)で完結している。柱穴は径15cm, 深さ15cm程度であり, 杭を打ち込んだようである。地山面で検出した。

SD3772 (PLAN 7, PL. 31) 6ABR-P地区

P地区の東南隅にある素掘りの溝(幅80cm, 深さ13cm)で, 長さ19.5mを検出した。西南から北東方へゆるやかに彎曲している。地山面で検出。

SB3773, SB3774 (PLAN 7・14, PL. 31) 6ABR-P地区

小 建 物 SB3773はSD3772の西にある4間(6.6m)×3間(4.1m)の建物で, 棟方向は北で西へ35度32分振れている。柱の掘形は方50cm, 深さ10~20cmである。地山面で検出。



SB3774はSB3773の東側にならぶ2間(4.2m)×2間(3.2m)の建物。棟方向は北で西に約48度振れている。柱掘形の状況はSB3773と同じ。地山面で検出。



SK3782, SK3787 (PLAN 7) 6ABR-P地区

土 墳 SK3782はSD3772の北にある不整形の土墳(5m×1.4m, 深さ50cm)。堆積土からは少量の古墳時代の土器小片が出土した。地山面で検出。

SK3787はSK3782の北にある楕円形の土墳(3m×1.9m, 深さ15cm)。西端には第Ⅱ期の土壇SD3784が掘込んでいる。地山面で検出。

SK3798, SK3799 (PLAN 15) 6ABQ-B地区

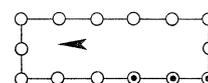
SK3798はB地区の西南隅にある方形の土壇(方3m, 深さ20cm)。第Ⅱ期の南面築地回廊SC3801Aがかさなっている。古墳時代の遺物が少量出土した。地山面で検出。

SK3799はSK3798の北にある不整形の土壇(5m×3.5m, 深さ30cm)。堆積土中に古墳時代の土器があった。地山面で検出。

SB7780 (PLAN 15, PL. 37) 6ABQ-D地区

大 建 物 D地区の東南隅に位置する5間(14.6m)×2間(4.8m)の南北棟建物。

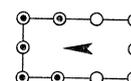
柱間寸法は桁行2.92m(10尺)等間, 梁間2.4m(8尺)等間である。柱の掘形は方1m, 深さ25cmであり, 径35cmの柱痕跡をとどめるものもある。北で若干西へ振れている。第Ⅱ期の南面築地回廊の北雨落溝SD3778と足場SS3805が重複する。地山面で検出。柱の掘形が比較的大きい。



SB7790 (PLAN 15, PL. 37) 6ABQ-D地区

SB7780の北7.2mをへだて, 柱筋をそろえて建つ3間(8.7m)×2間(4.8m)

の南北棟建物。柱間寸法は桁行2.9m(10尺)等間, 梁間は2.1m(7尺)と2.7m(9尺)にわかれる。柱の掘形は方1m, 深さ20cmで径35cmの柱痕跡をとどめるものもある。この建物とSB7780の棟方向は北で西へ約3度振れており, 同時期の建物。地山面で検出。



D 東外郭地区

築地回廊で囲む第1次大極殿地域の東側は, 壬生門内に展開する東方の内裏・第2次大極殿地域と隣接する地区である。調査の結果, 発掘区の東限を南北に貫通する南北溝SD3715を境にして, その西側が第1次大極殿地域にぞくすることがあきらかになった。また, 後の第91次調査によってSD3715の東側, 6ABE-M地区以北は幅12mの南北に長い帯状の区画となって

第2次大極殿地域の外周をめぐる¹⁾ことが明らかになっている。この地区の整地は一様ではないが、旧地形の低い南部(6ABE—P・M地区)では1mに達する盛土を行ない、北方に向うに従って盛土がうすくなり、6ABC区では地山を削平しているようである。木樋暗渠などによって築地回廊をぬけ、東外郭地区を横断してSD3715に排水する施設が8条あるが、それについては回廊地区でふれたので、ここでは略する。この地区の時期決定は必ずしも容易でないが、築地回廊内に準じて第Ⅰ～Ⅲ期の3期に区分した。なお、6ABE—P、6ABS—E地区は第1次朝堂院地域の遺構にぞくするが、便宜上この項にふくめる。

i 第Ⅰ期の遺構

SD3765 (PLAN 5~7, PL. 19・30, fig. 46) 6ABS—E, 6ABE—M・K, 6ABD—D地区 初期の幹線水路

この地区の南半部を南北に流れる素掘りの南北溝(幅1.6m~2.6m, 深さ60cm)である。南方で深く、北方で浅い。D地区で消失し、北限をしることができない。南方は、後の調査によって、第1次朝堂院地域内を南下することが判明している。溝の堆積土が比較的厚いM地区から各種の遺物が出土しており、出土した木簡の年記によって和銅年間に存在したことがわかる。また、溝の使用期間は短く、M地区では粘土質の土によって西側から短期間のうちに埋立てている状況を顕著にとどめていた(fig. 2-46)。

ちなみに、中軸線の東102.6m(342尺)、東面築地回廊SC5500の東14.3m(48尺)に位置している。なお、平城宮造営以前の遺構とする見方もあるが、第1次大極殿地域の排水路である暗渠SD5555およびSD5584がこの溝に注いでおり、築地回廊建設時に存在し利用したことはあきらかである。木樋暗渠SD5560, SD5562, SD3770などがこの溝のうえを横断している。

SD5584 (PLAN 5) 6ABE—M地区

築地回廊の東南隅の北13mで、東雨落溝SD5575からはじまり、南東に流れてSD3765に注ぐ溝(長さ8.5m, 幅1m, 深さ40cm)。SD3765の廃止とともにこの溝も埋立てられており、SD5575からの取付部分には木樋暗渠SD5562が掘込まれている。

SA5550A・B, SA5551A・B (PLAN 5, PL. 16・19, fig. 46) 6ABS—E地区

SA5550AとSA5551AはSD3765を埋立てたのちにつくる塀であり、第1次朝堂院地域をめぐる朝堂院の塀。SA5550Aは南北塀で6間分(17.7m)、SA5551Aは東西塀で4間分(11.8m)の柱穴を検出した。L字状に交わる東北隅の柱穴は後世の野井戸によって破壊されているが、連続するものとみてよい。柱間寸法は2.95m(10尺)等間である。柱の掘形は方1.5m内外、深さ1.2m内外であり、地山に沈下した柱痕跡(径35cm)を下部にとどめるものがあり、上部には一まわり大きな柱抜取痕跡がのこる(fig. 46-1)。SA5551Aの西端はSC5500の西雨落溝の位置からはじまるので、回廊の東側柱に取付いたことになる。SA5550の南端は発掘区外にのびるが、後の調査によって第1次朝堂院地域をめぐる¹⁾ことが判明している。

SA5550B・SA5551Bは朝堂院の木塀を築地に改めたものである。柱掘形のうえに厚さ25cmの砂礫をまじえる黄褐色土の盛土がのこる。ただし、破壊が著しくその幅をしることができなかった。

1) 『年報1975』p. 16

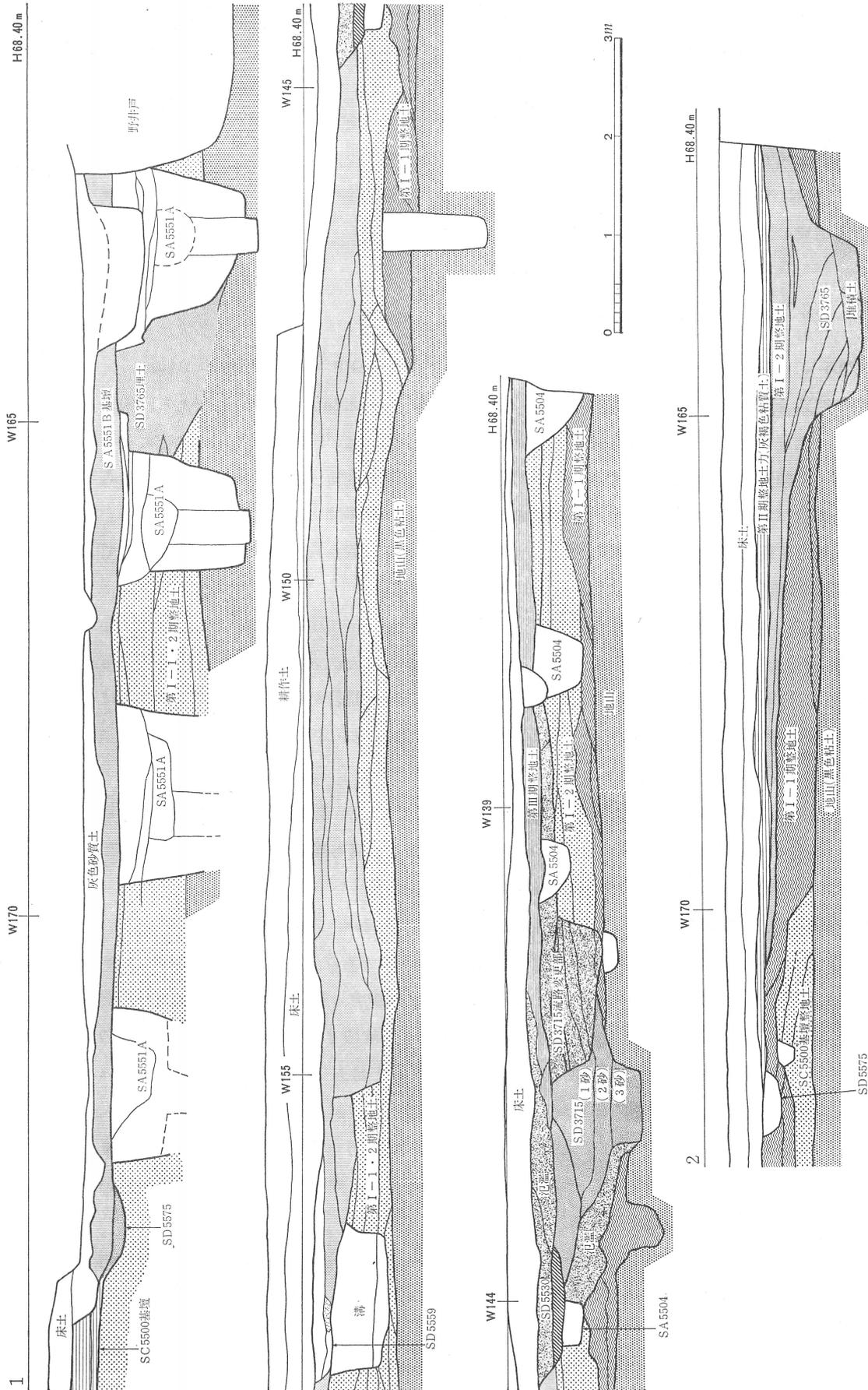


fig. 46 東外郭横断面図 1. S.48ライン 2. S.30ライン

SD5559 (PLAN 4) 6ABE-P地区

SA5550の東2.1m(7尺)にある素掘りの南北溝(幅1.45m, 深さ60cm)。築地築造時にこの溝も埋立てられており、基壇土が西岸までおよび、堆積土には部分的に凝灰岩片がふくむところもあった。基壇の地覆石据付痕跡ないしは雨落溝の痕跡とみられる。

地覆石据付
痕跡**SD3715** (PLAN 4・6~8・18・19, PL. 20・29・79・86, fig. 46)
6ABE-P・M・K, 6ABD-D, 6ABC-U・V地区

東外郭地区の東限を画して南北に流れる素掘りの南北溝(幅2~3m, 深さ1m)。溝底は南に向かって傾斜しており、約300mの間で7.6m低くなっている。この溝は宮内を南北に流れる基幹排水路で、北は6ABO区から、南は6ABH区までの間約530mで存在を確認している。溝の堆積層は2・3層に区分しえたが、流水のために層位に混乱があるらしく、遺物の逆転がみられる。M地区南部では東方から1条、西方から3条の溝が合流しており、氾濫のあとをのこすのであるが、この付近からは木簡をふくむ奈良時代全般にわたる多量の遺物が出土した。P地区では霊亀元年の年記のある木簡が出土した土壌SK5535を掘込んでこの溝をつけているので、上限が715年を遡らないことをしめす。下限は包含する遺物から奈良時代末期におくことができ、奈良時代を通じて存続したことになる。

幹線水路

SK5535 (PLAN 4, PL. 20) 6ABE-P地区

P地区には不整形の土壌が多数あり、SK5535もその一つ。幅1.8m, 深さ30cmの土壌であるが、東部をSD3715が破壊している。内から霊亀元年の年記のある木簡が出土した。

SD5490 (PLAN 4) 6ABE-P地区

P地区の東南隅にある素掘りの東西溝(幅1m, 深さ20cm)。東方からSD3715に流入する。後の第91次調査で、この溝がSD3715から東へ18mのびていることを確認している。

第2次大極
殿東外郭の
遺構**SA5492** (PLAN 4, PL. 20) 6ABE-P地区

SD3715の東岸にある南北塀。全長4間(8.1m)であり、柱間寸法は2.03m(6.5尺)となる。柱の掘形は方50~80cmと不揃いで、南端の柱穴には径17cmの柱根がのこる。

SA5504 (PLAN 4, PL. 20) 6ABE-P地区

SD5490の北14mにある東西塀。4間分(11.5m)を検出した。西はSD3715の西岸からはじまり第2次大極殿地区の南面外郭塀であるSA8165にとりつくことになる。ただし、柱間寸法は不揃い。SD3715の東岸地帯を南北に区画している。

SD5505 (PLAN 4, PL. 20) 6ABE-M地区

M地区の南辺で東からSD3715に注ぐ素掘りの東西溝(幅2m, 深さ50cm)。水流の激しさをしめすように合流点が著しく氾濫している。この溝は第2次大極殿地域外郭の塀ないしは築地に設けた石積東西暗渠をうけていることが第91次調査であきらかになっている。この溝の堆積土から平城宮土器Ⅲが出土した。

SB5595 (PLAN 4, PL. 20) 6ABE-P地区

P地区の東南隅にある3間(5.85m)×2間(3.9m)の東西棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに1.95m(6.5尺)等間である。柱の掘形は方60cmで、柱痕跡をとどめるものもある。東妻柱列は第91次調査で検出した。



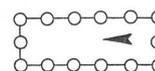
SB5510 (PLAN 4, PL. 20, fig. 47) 6ABE—M地区

SB5495の北10.5mにある南北棟建物である。6間(11.4m)×2間(4.2m)の身舎北妻に、2間(3.4m)×2間(3.4m)の小室をとりつけている。身舎には棟通り中央に間仕切の柱穴をおく。柱間寸法は身舎の桁行・梁間ともに1.9m(6.5尺)を基準にするが多少の出入がある。小室は桁行・梁間とも1.7m(5.5尺)等間である。柱の掘形は不揃いだが、方60cm内外で、径17cmの柱根をとどめている。小室の身舎への取付きとして、身舎柱の内側に柱を建てた可能性がある。この建物の周辺には地山上に黄褐色粘質土の整地層があり、その上面で検出した。SB5495と柱筋を揃えているのでこの時期におく。



SB5515 (PLAN 6, PL. 20) 6ABE—M地区

SB5510の北に近接する5間(10.7m)×2間(3.9m)の南北棟建物。柱間寸法は桁行が2.14m(7尺)等間で、梁間は1.95m(6.5尺)等間である。方位は北でやや西に振れているが、SB5495、SB5510とほぼ柱筋をそろえているので同時期とする。



SB5520 (PLAN 6, PL. 20, fig. 47) 6ABE—M地区

M地区東北隅、SD3715の東岸にある3間(6.24m)×2間(4.16m)の南北棟建物である。柱間寸法は、桁行・梁間ともに2.08m(7尺)等間である。柱の掘形は不整形でおよそ方50cm、深さ60cmである。5個の柱穴には径14cmの柱根があり、北妻柱の柱穴には埴の礎盤がある。



SB5521 (PLAN 6, PL. 20) 6ABE—M地区

SB5515の北10.5mにある2間(5.1m)×2間(3.6m)の南北棟建物。柱間寸法は桁行が2.55m(8.5尺)等間、梁間が1.8m(6尺)等間である。柱穴は小さく不揃いである。



SX5528, SX5540, SX5527 (PLAN 4・6, PL. 20) 6ABE—P・M地区

溝に架けた遺構
SD3715の両岸にならぶ小柱穴列である。P地区のSX5528は溝をはさんで2間(3.6m)×1間(3m)であり、M地区のSX5540は12間(40.2m)×1間(3m)、SX5527は5間(8.5m)×1間(3m)である。柱間寸法は2.33m(8尺)を基準にするが多少の出入がある。しかし、必ず東西の柱穴が対になるという原則がある。SX5528の柱穴が方80cmと大きいのに対し、他は径40cm内外の小柱穴である。東岸の建物群のあるところに限ってこの施設をもうけているようであり、橋のように溝に蓋した施設とかがえられる。西岸の柱列には第Ⅲ期の南北溝SD5530が掘込んでいる。

SA5525, SA5526 (PLAN 6) 6ABE—M地区

SA5525はSB5520の北側にある東西塀。SD3715の東岸からはじまり東へのびるものよう
で、2間分(4.3m)を検出した。柱の掘形は径40cmの円形である。SB5520と柱筋をそろえて

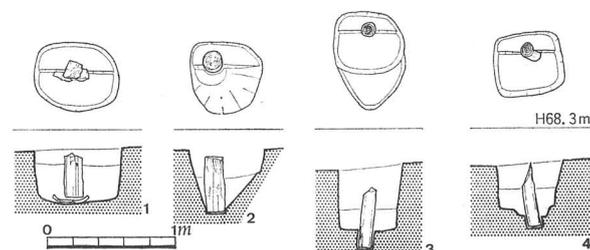


fig. 47 小規模建物の柱掘形
1. SB5510イニ 2. SB5510イ三
3. SB5520ハニ 4. SB5520ハ四

いるのでこの時期においた。

SA5526はSA5525の北に位置する東西塀で、2間分(4.3m)を検出した。柱の掘形は方60cmであり、SA5525よりも大きい。両者は建替えの関係にあるものようである。2条の塀の北側には建物がなく、南方の建物群を画した塀とみられる。

SK3730 (PLAN 7) 6ABE-K地区

K地区中央、木樋暗渠SD3770の南にある土塀(方2.2m、深さ60cm)。埋土から土器片と多量の栓皮が出土し、また2点の木簡もあった。

SX3720, SF3742 (PLAN 7, PL. 29, fig. 48) 6ABE-K地区

SX3720はSD3715に架けた橋で、溝の両岸に径10cmの杭を打込んだ橋脚がある。橋脚は近橋脚接する2本を一組として打込んだもので、東西両岸に各4箇所ある。間隔は95cmで、全長2.85mを3等分している。この橋脚は護岸をもかねて裏側に板をいれている。

橋をはさむ東西の岸に黄褐色粗砂土の硬い地面が幅5mでのびており、道路敷**SF3742**に想定することが可能となる。時期を決めたいが、橋の北15.3mに位置する東西塀SA3780に開く門との関係からこの時期においた。

SA3780, SB3746 (PLAN 8, PL. 28, fig. 26) 6ABD-D地区

東西溝SD3775の北1.8mにあって、東外郭地区を南北に2分する東西塀がSA3780である。南北に仕切る塀と門中央に1間(4.1m、14尺)の門SB3746を置いて、西に5間(14.8m)、東に3間(8.6m)の塀がつく。塀の柱間寸法は東端1間が2.7m(9尺)であるほかは、2.96m(10尺)等間である。柱の掘形はおおむね方80cm、深さ80cmだが必ずしも一定しない。門柱の掘形は横長の長方形(1.5m×3m、深さ80cm)で、塀の柱掘形よりも大きい。底には木材の礎盤をしく。塀の両端はSC5500の東側柱位置とずれており、直接回廊につながっていない。

SA3750 (PLAN 8, PL. 29)
6ABD-D地区

SD3715の西にある南北塀。SA3780の北3mから12間分(28.6m)を検出した。北は発掘区外にのびるようだが、C地区にはおよんでいない。柱間寸法は2.38m(8尺)等間で、掘形は方80cmである。第1次朝堂院東外郭ではこの柱筋にほぼ等しいところに和銅造営時に遡る南北塀SA8410が下層遺構として発見されており¹⁾、それが6ABE-P地区におよぶことは確実である。同一の塀でなくともそれに関連するものであろう。**SX3729**はSD3715の東岸にある1間(2.7m)の柱穴で方2.1m、深さ30cmの柱掘形。SA3750の南端の1

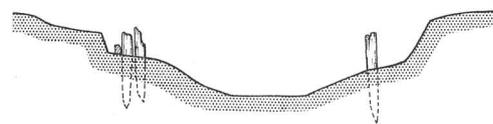
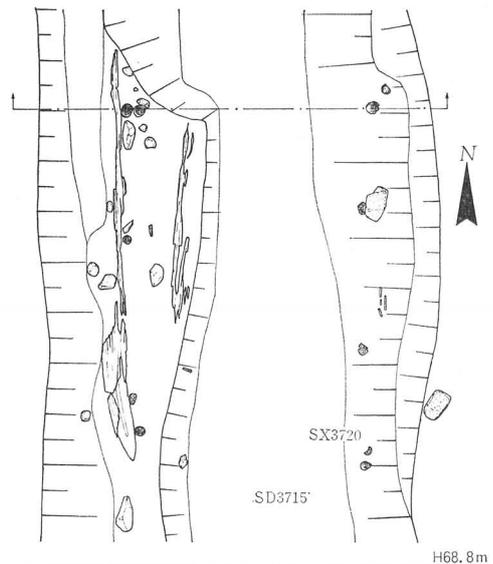


fig. 48 SX3720実測図

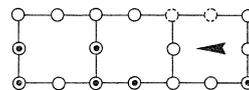
1) 『年報1977』p. 22

第三章 遺 跡

間とほぼ柱筋をそろえているので、ここに橋のような施設が想定できる。

SB8330 (PLAN 18, PL. 79) 6ABC—V地区

SD3715の西岸に近接する6間(17.54m)×2間(5.26m)の南北棟建物である。棟通りの2間ごとに間仕切柱をおく。柱間寸法は桁行2.92m(10尺)等間、梁間2.63m(9尺)等間となる。東側柱列の柱掘形はSD3715によって浸食されている。柱の掘形は方60cm～1mで、径25cmの柱痕跡をのこす。第Ⅱ期のSB8320と第Ⅲ期のSB8325の柱穴が掘込まれている。SD3715が開削される以前の建物であろう。



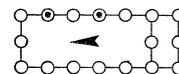
SB8315 (PLAN 18, PL. 79) 6ABC—V地区

SB8330の西北にある3間(4.6m)×2間(3.1m)の南北棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに1.5m(5尺)等間。柱の掘形は方40～80cmと不整形で、径22cmの柱痕跡をとどめるものもある。第Ⅱ期のSB8320と第Ⅲ期のSK8317が掘込んでおり、東側の柱穴が破壊されている。



SB8234 (PLAN 19, PL. 87) 6ABC—U地区

SB8315の北6mにある6間(12.5m)×2間(4.16m)の南北棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに2.08m(7尺)等間である。二通の梁間中央に仕切りの柱穴を配する。柱の掘形は方50～80cm前後で、径30cmの柱痕跡をとどめるものもある。SB8315と西側柱列がそろう。



SA8229 (PLAN 21, PL. 84) 6ABC—U地区

SC5500の東側柱列の東3mにある南北塀。全長は5間(11.66m)で、柱間寸法は2.33m(8尺)等間である。柱の掘形は方60cmで、径20cmの柱痕跡がある。方位を北で西へ少し振れているが、築地回廊に開く門SB8333の正面にあたることから、仮設的な目隠塀とかがえる。

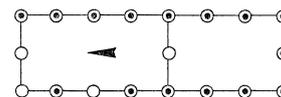
SA8231 (PLAN 18) 6ABC—U地区

SA8229の東にある南北塀。全長は4間で(11.24m)、柱間寸法は2.81m(9.5尺)等間である。柱穴は径40cmの円形を呈する。SA3777の間口の広いところに面していることから、目隠塀とかがえる。

ii 第Ⅱ期の遺構

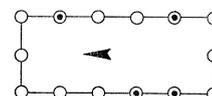
SB8320 (PLAN 18, PL. 79) 6ABC—V地区

SD3715の西岸にある7間(20.85m)×2間(5.95)の南北棟建物で、北から四通の棟通りに間仕切の柱穴を設ける。柱間寸法は桁行・梁間ともに2.98m(10尺)等間で、柱の掘形は方1～1.2m、深さ40cmである。大きな柱抜取痕跡をとまうほか、径30cmの柱痕跡をとどめるものがある。抜取痕跡には土器・瓦片などが混入していた。第Ⅰ期のSB8330を掘込み、第Ⅲ期のSK8317, SK8318, SK8319, SB8325がかさなっている。



SB8240 (PLAN 19, PL. 87) 6ABC—U地区

SB8320の北22.5mにある5間(15m)×2間(6m)の南北棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに3.0m(10尺)等間である。柱の掘形(方1.5m内外、深さ70cm)には径45cmの柱痕跡をとどめるものがある。柱抜取痕跡



から建物の外側に柱をたおした状況がわかる。この抜取痕跡からは、瓦や土器片が出土した。第Ⅲ期の東西溝 SD8227が掘込んでいる。

SA8236 (PLAN 19) 6ABC-U地区

U地区の北辺で検出した4間(10.6m)の東西柱列。柱間寸法は2.65m(9尺)等間で、柱の北辺の堀掘形は方1m、深さ70cmである。東西にのびて外郭北辺を画するのであろうか。ただし、北側にのびて東西棟建物になる可能性もすてがたい。北面築地回廊 SC6670 基壇南縁の延長線上にあるので第Ⅱ期においた。

iii 第Ⅲ期の遺構

SD5530 (PLAN 4・6~8, PL. 20・29) 6ABE-P・M・K地区

南北溝SD3715の西岸にあって、これと重複する素掘りの南北溝で、K地区以南でみられる。新しい水路の上流では幅1m前後、深さ40cmであるが、P地区では幅3mに広がっている。SD3715の流路が埋って、この時期に改修したものであり、K地区以北ではSD3715をそのまま利用したものとみられる。小礫を含む砂が堆積し、瓦片などが混在した。

SX5543 (PLAN 6, fig. 49) 6ABE-M地区

SD5530に架けた橋。80cmの間隔をおく東西両岸に南北2間(1.35m)の杭(径6cm)を打ちこんでいる。杭と溝肩との間には自然木をわたして護岸している。

SA8238, SB8335 (PLAN 9・18・19, PL. 23・47・79・86) 6ABD-C, 6ABC-U・V地区

さきへのべたように、この時期の広場地区を横断する東西堀 SA3740の東端の柱穴から北へ東面を画する木堀のびる南北堀SA8238と門SB8335である。

SA8238は東面築地SA3800の心から東17.8m(60尺)に位置する。V地区のSB8335以北では27間分(72.67m)を確認し、その柱間寸法は3.0m(10尺)、2.7m(9尺)、2.4m(8尺)などと不揃いだが、概して2.7m(9尺)が多い。柱の掘形は方50cm、深さ20cm内外であり、円形を呈するものも多い。SB8335の南のD地区では柱穴を検出していない部分もあるが、一連の堀があったとみてよい。

V地区にあるSB8335は1間(5.4m, 18尺)の門である。北側の柱掘形は長方形(1.4×1.1m)を呈し、長軸を南北におき、2段に掘込む。掘形の北側のほうが深く(深さ70cm)、そこに径27cmの柱痕跡がある。また、掘形の北縁にはSA8238の柱穴がかさなっており、門を建てたのちに堀をつくったことがわかる。この門柱と堀の柱とは40cm程度離れていることになる。なお、南側の柱穴は半分しか検出していない。

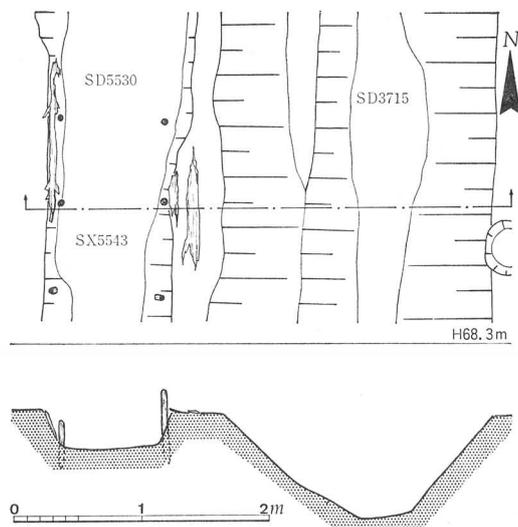


fig. 49 SD5530に設けた小橋SX5543

第三章 遺 跡

SD8237, SD8239 (PLAN 8・9・18・19, PL. 23・47・79・86)
6ABD—C・D, 6ABC—U・V地区

心々距離4.4m (15尺) をおいて平行する2条の南北溝(幅1m内外, 深さ30cm)。2条の溝は一条通りまで検出したが, さらに北へのびる可能性は強く, 大膳職地域の東面を画する南北築地SA350と同一線上にあることが注目される。6ACD—D地区では未検出だが, 2条の溝の中心にSA8238がおさまり, 堀の側溝とみられる。

SA3741 (PLAN 7) 6ABE—K地区

門SB3768内にある6間(17m)の南北塀である。柱間寸法は南端の間が2.4m(8尺)であるほかは2.96m(10尺)等間である。柱の掘形は径25cmの円形を呈し, 径18cmの柱痕跡をとどめるものもある。第I期の東西木樋暗渠SD3770を掘込んでいる。ある時期に門SB3768を廃してこの南北塀を設けたのであろうか。

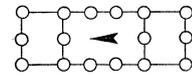
SB9213 (PLAN 9, PL. 48) 6ABD—C地区

外郭内の建物 SA3800とSA8238とはさまれた地帯にある3間(5.65m)×2間(3.95m)の南北棟建物。柱間寸法は桁行1.88m(6尺)等間, 梁間1.97m(6.5尺)等間である。柱の掘形は径50cm前後の円形。



SB8325 (PLAN 18, PL. 79) 6ABD—V地区

SD3715の西岸にある5間(12.64m)×2間(4.12m)の南北棟建物で, 南北に廂がつく。柱間寸法は身舎の桁行・梁間とも2.06m(7尺)等間で, 南北の廂は3.23m(11尺)である。柱の掘形は方40~60cmと不整形で, 径25~30cmの柱痕跡をとどめるものもある。第I期の建物SB8330, 溝SD8327, 第II期の建物SB8320に重複している。また方位が北で東に振れ, 東門SB8335の東に想定しうる道路内にかかっているため, 第III期のなかでも新しい時期にぞくするであろう。



E 大膳職地域

再検討 6ABO地区の大膳職地域については, すでに『平城宮報告II・IV』で報告した。その後に行なった6ABO地区の第81次調査や第1次大極殿地域の発掘成果によって, 遺構の変遷について若干の補足と訂正を行なわざるをえなくなった。その大きな理由の一つは石敷東西溝SD130の解釈である。『平城宮報告II・IV』では, SD130を大膳職地域の南面を区画する築地の南雨落溝に想定したのだが, この溝は前述してきたように第I期第1次大極殿地域を区画する北面築地回廊SC8098の南雨落溝であることが判明した。そこで, 改めて大膳職地域の変遷について検討を加えねばならぬところとなり, 新たに検出した遺構に説明を加えるとともに変更部分についてもものべることにした。『平城宮報告IV』で想定した各時期の建物配置について根本的にことなる点はない。しかし, 時期区分については『平城宮報告II・IV』の第I期と第II₁期を本報告の第I期, 第II₂期を第II期, 第II₃期と第III期を第III期とするのであるが, 後述のように絶対年代の比定については若干ことなるところがある(fig. 50, 51)。

i 第I期の遺構

『平城宮報告IV』第I期(以下報告IV第I期などという)のうち, 北面築地回廊SC8098推定域に重複する遺構を平城宮造営前と第II期にふりわけると。ただし, SB299, SB370, SB347について

第三章 遺 跡

は重複しないが第Ⅱ期にいった。改定案の第Ⅰ期は2小期に細分できる。第Ⅰ-1期は中軸線をはさんで東方に建物SB317、西方にSB170があり、後方を東西溝SD141が画する。第Ⅰ期-2では、後方を画する東西溝SD126A・Bが北方にしりぞき、中軸線をはさんで東西にそれぞれ3棟、東方SB200・SB205・SB212、西方SB185A・SB177A・SB194Aの建物を配する。

ii 第Ⅱ期の遺構

第Ⅱ期の細分

第Ⅱ期はSC8098を廃し、この地域に築地で囲んだ官衙を形成する時期である。主として報告Ⅳ第Ⅱ-2期の遺構が中心となる。すなわち、中軸線をはさんで、東西にそれぞれ築地をめぐらし、建物を配するのだが、ここでは東区、西区とよぶことにしよう。第Ⅱ期も2小期にわかれる。第Ⅱ-1期の東区ではSB201を中心にして7棟の建物(SB206・SB209・SB213・SB299・SB370・SB347)が並び、南側に2穴の井戸(SE311A・SE272A)をおく。西区では、ほぼ同規模の建物8棟(SB8116・SB112・SB131・SB145・SB186B・SB177B・SB194B・SB143)を南側と北側によせて配置し、その中間東寄りに井戸SE168Aをおく。第Ⅱ-2期は建物配置を部分的に改変するとともに築地内を木堀で2分する。東区の東側では第Ⅱ-1期の建物を廃し、あらたに3棟の建物SB364・SB341・SB293をおく。東区の西側では建物に変更がなく、3条の堀SA332・SA204・SA412をくわえる。西区の東側では南の2棟SB113・SB166をたてかえるが、西区の西側では建物のたてかえがない。

築地内を画する2条の南北堀SA304・SA121は、報告Ⅳでは第Ⅲ期につくられたこととしており、殿舎地域の状況からすると、区画内を木堀で細分する傾向は第Ⅲ期において顕著であり、第Ⅲ期の可能性もつよい。しかし、今回第Ⅲ期においたSB116がSA121・SA120と重複すること、東区の東側にたてかえるSB364が小区画の中央建物とみられることから、第Ⅱ期に含めることにした。この際、西区の西側では井戸を欠くことになり、この区画が利用されなかった可能性もある。また、東区の西側にある3条の堀は第Ⅱ-1期にさかのぼってもよい。第Ⅱ期の遺構には今回の調査で検出したものがあり、つぎにその主なものをかかげる。

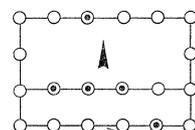
SA109 (PLAN 34・35, PL. 92・94・95, fig. 49) 6ABO-L・P 地区

6ABO-L地区以西では、粘土質の地山のうゑに約70cmの第Ⅰ期整地(灰白色粘土・赤褐礫混り粘土)がある。第Ⅱ期のSA109はこの整地土に灰黄色粘土・黄灰色粘土を盛って築地基壇とし、南北に側溝を掘込む。第Ⅲ期には再度整地土(黄褐色粘土など)を盛りあげ、築地の改修を行なっている。南北側溝幅が一定しないので、基壇幅をきめえないが、第Ⅱ・Ⅲ期とも幅4m内外であったものとおもわれる。寄柱や門の親柱の痕跡がなく、築地幅も不明である。第Ⅱ期築地基壇上の下部から軒平瓦6282-B, 6284が出土した。L地区の土層観察用の試掘坑では、第Ⅰ期の灰白色粘土の深さと同位置で、軒丸瓦6732A, 6691A, 6721を採集した。このことについては、試掘坑の東に第Ⅱ期以降の土層が重複しているものと解釈した。

SB116, SB8116 (PLAN 34, PL. 92・93) 6ABO-L 地区

新たに検出した遺構

SB116は『平城宮報告Ⅱ』で5間×2間の東西棟建物として報告したものが、今回南廂をもつ5間(13.37m)×3間(8.61m)の東西棟建物であることがわかった。柱間寸法は桁行2.67m(9尺)、梁間は身舎で2.97m(10尺)、廂で2.67m(9尺)である。柱の掘形は方80cm、深さ30cmで、径40cmの柱



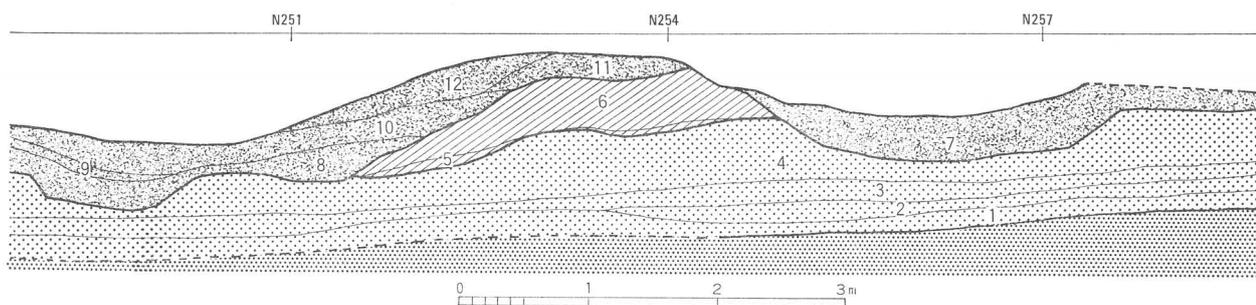


fig. 52 SA109土層断面

第Ⅰ期整地土(1.暗灰色粘土, 2.灰白色粘土, 3.赤褐色礫混り粘土, 4.黄色粘土), 第Ⅱ期整地土(5.灰黄色粘土, 6.黄灰色粘土), 第Ⅲ期整地土(7.黄褐色粘土, 8.灰色礫土, 9.木炭層, 10.黄褐色土, 11.灰茶褐色礫土, 12.茶褐色礫土)

痕跡がのこるものがある。なお、廂の西端柱の穴は検出できなかった。

SB8116はSB116と重複する5間(13.5m)×2間(6.0m)の東西棟建物。SB112・SB131・SB145の東西棟建物と棟通りをそろえる。柱間寸法は桁行2.7m(9尺), 梁間3.0m(10尺)である。柱の掘形は方1m, 深さ80cmで、径40cmの柱痕跡がのこる。



SK8079, SK8080 (PLAN 34・35., PL 89・90) 6ABO-E地区

E地区には不整形の大小土壇が多く存在する。時期を決めがたいものも少なくない。SK8079 探土 擴とSK8080は第Ⅱ-1期当初の遺構である。SK8079は長楕円形(17.5m×4.8m, 深さ60cm内外)の土壇。土壇内の堆積土は数層に区別でき、その最上層に第Ⅱ期の築地SA8100にともなう雨落溝SD267, 暗渠SD8077が重複している。SK8080も同様の土壇(24×5m, 深さ50cm内外)である。これらの土壇は、第Ⅱ期第1次大極殿地域の北面築地回廊を造成したときの探土壇とかんがえられ、築地回廊SC6670と築地SA8100の建設が同時でなく、後者が若干遅れることをしめしている。

SA8100, SD267, SD8094, SD8095, SB8101A・B, SB8102

(PLAN 33・34, PL. 88~91) 6ABO-E地区

SA8100はSA109の東延長線上にあり、大膳職地域の東区の南辺を画する築地。築地本体はのこっていないが、寄柱痕跡, 門, 南北の雨落溝によってその存在を知ることができる。寄柱痕跡は桁行6m(20尺), 梁間1.2m(4尺)を原則とする。柱の掘形は方50cm内外, 深さ10cm内外である。ただし、門の付近では桁行を縮めている。

東区南面の
築地

SB8101A・Bは、SA8100の東部に位置する1間門である。SB8101Aは柱間寸法が3m(10尺), 親柱の柱掘形は方60cmで、その内寄りにそれぞれ寄柱痕跡をとまなう。SB8101Bは柱間寸法が同じく3mで、親柱の位置を50cm西へずらしてたてかえる。柱の掘形は方60cm。SB8101Aと同様、寄柱痕跡をとまなう。SB8101A・Bの東西それぞれ桁行1間目の寄柱痕跡も建替えがみられる。

SB8102はSB8101A・Bの西15mに位置する1間の門で、柱間寸法は3m(10尺)である。親柱掘形は径1.3mの円形を呈する。

SD267はSA8100の北3mにある素掘りの東西溝(幅1m)である。東に流れ東面築地SA350

第三章 遺 跡

を暗渠でぬけ、東の築地外に排水したようである。

SD8094・SD8095は、それぞれSA8100の南2m、2.9mをへだてた位置にある東西溝。前者は幅35cm、後者は幅65cmである。SD8094は基壇地覆石据付痕跡であり、SD8095は南雨落溝に想定できる。

SA8100の東西両端はあきらかでない。しかし、西端は後述する東西暗渠SD8077の検出によって、築地SA233と直交し、東はSA350とまじわり、大膳職地域の東区を形成してたことがわかる。

SA233A・B, SD8077 (PLAN 34, PL. 90・91) 6ABO-E地区

東区西面の
築地

『平城宮報告Ⅳ』で第Ⅲ期の南北木塀としてきたものであるが、東西暗渠SD8077や部分的に築地の雨落溝が残存することから、木塀の前身として築地SA233Aが存在したことが推定できる。第Ⅲ期の木塀はSA233Bとよぶことにする。

SD8077は凝灰岩の板石を組合せた東西暗渠(長さ2.5m、幅71cm、内法幅47cm、内法高22cm)である。それは長方形(64cm×28cm、厚

さ11cmを標準とする)の凝灰岩板石を用いて側壁とし、天井をかけたものであり、底石を欠いている。この暗渠の北にSA233Bの柱穴が重複する1間(3m)の柱穴があり、これを門の親柱に想定することが可能である。

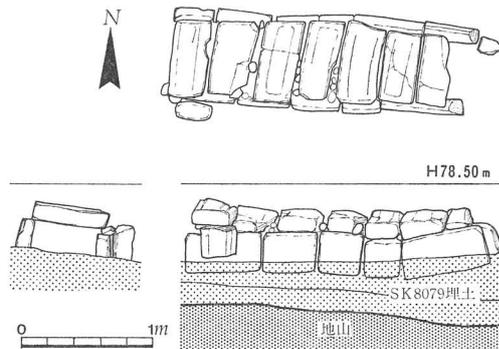


fig. 53 SD8077実測図

iii 第Ⅲ期の遺構

報告Ⅳの第Ⅱ-3期と第Ⅲ期をあわした。さきの時期区分では、第Ⅲ期の築地内に建物がほとんどない状況となる。これががもっとも大きな変更理由である。東・西両区の南北塀を第Ⅱ期にくりあげたほかは、今回第Ⅱ期にさかのぼらせた遺構はない。

iv 平城宮造営以前の遺構

さきに報告Ⅳで第Ⅰ期に比定した西区のSB167が北面築地回廊と共存しえなくなり、一時期繰上げる必然性がでてきた。またその北側で柱筋をそろえて建つ南北棟建物SB176も同様に古くなる。2棟の建物は他の建物にくらべて方位をことにし、柱掘形の残存状況も良好といえない。とはいえ、SB167には同位置でのたてかえがみとめられるので、仮設建物でもない。一方、南方から北上する下ッ道の延長線上西側にそっており、平城宮造営以前の施設とみなざるをえなくなった。